
ゼロの使い魔の世界に英雄が生まれるようです

戸井万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔の世界に英雄が生まれるようです

【ISBN】

N8107T

【作者名】

戸井万

【あらすじ】

ハルギニアに元英雄が転生

序章・第一話・エイブラハム爆誕（前書き）

処女作です
評価お願いします

Aufmerksamkeit, diese Arbeit schlie?t ein originales Sturzellement ein. Bitte kommen Sie ins Unerfreuliche in Browser zur? ck

序章・第一話・エイブラハム爆誕

俺は確かに死んだはずだった、俺の名前はエイブラハム・ヨシュー・クルスト…世紀の大天才科学者。技術者にして剣聖と呼ばれた男だった。

自慢になるが俺の頭脳は見ただけで全てを数値化し計算し尽くす事が出来た、つまりは具体的に未来が見えたり何かを作ろうと考えたらそれが頭の中で出来てしまう程度だったんだが…

「だあぶ～あぶぶぶつぶあ～（なんで俺赤ん坊になつてんねん）」「あれだよな、俺世界を平和にした後平和にするために繰り返した殺人の罪を清算する為に娘を騙して俺と戦わせて…死んだよな、確かに娘の剣は俺の心臓を貫いたはずだ。

「お！エイブラハムが何か言つてるぞゼノア！」

若い男がキラキラした目で俺を見る、地球の言語じゃなかつたがちょっと聞いただけでマスター出来た言葉によれば…ここはハルゲニアと言つ星でトリステインと言う国のタルブ辺境伯に俺は生まれたらしい。

「パパって呼ぶの？ママって呼ぶの？」

これまた若い女がこちらを期待した目で見て來ている…「うん、その気持ち解るよ。

内心苦笑しながら俺は口をモゴモゴさせる、両親らしき人物はワクワクしている…期待に答えてやるか。

「まあま～、ぱあぱ～」

わつと二人が両手をあげて喜んだ、そして一人で俺を抱き上げた。

「エイブラハムはゼノアに似て賢いなあ！」

「貴方に似てとても可愛い顔をしているわよー間違いくいい子になるわ！」

俺を褒めてるのか一人で褒めあつていいのかさつぱりとわからな
いが…まあ少なくとも俺は愛され過ぎていいらしい、嬉しい事だ。

「……んーどうでもいいが腹減ったなあ、ちよこと訴えてみますか。
「ほ、ほれやあ…びええええん！（おーこ、ゆぢやんよお、腹
減つたよ～おっぱいおーくれ）」

「うやうやしく泣き声になる」のうで一人共慌て始めた、あーその行動解るよ、赤ちゃんって言葉話さないから何求めてるかわからないんだよな、俺も苦労したよ。

「おしゃれ...じゃないわね。おしゃればいかしら?」

「ほきやあああああああん！（当たりたそ母ちゃん、腹洞二たからなるべく早くおくれ）ハリー・ハリー・ハリー！」

「エルドリッヂ様、乳母はどこに？」

俺の親父の名前はエルドリッヂと言つらしき、いい名前だ。

それを聞いたゼノアは頬を染めながら胸を出して俺の前に出した。

「ふえひ…まむう（わーい、いただきまーす）」「

口に乳頭を含んだ俺は嬉々として母乳を吸う、やはり赤ん坊だからか味はしない…たらふく飲んだ後は心地よい睡魔が俺を襲つて来た、なんで俺は記憶を保つたまま生れたのかわからないが…とりあえずしがらみから逃れて俺は平和に生きよつと思つ……むにゅむにゅ

「鍵は空いてるよ、ビーヴー」

返事を返すと四人の魔術士…メイジだけか…が入って来た。

「今日から坊ちゃまに魔法を教える家庭教師でござります、早速ですが今日は坊ちゃまの属性を知りましょうね」

全員が俺より五つ程上の女性だった、市井のメイジを呼んだらしが…大丈夫なのか？それ…さて俺が努力している場面を見るのも馬鹿馬鹿しいであろうし結果だけ教えようか。

俺は全ての属性にとんでもなく高い適正があるらしい、と言つか俺の頭脳は全ての魔法の使い方を教えてくれた、ついでに俺は前世の魔力を引き継いで生まれたらしく、スクウェアスペルをばかすか撃つても魔力切れを起こさなかつた。

家庭教師達は肩を落として帰つて行つた、数年かかる内容を一日どころか数時間でマスターしてしまつたらしい。

「お前はなんて優秀なんだエイブラハム！」

そして現在俺は親父に抱きしめられほお擦りをされていた、不精髭が痛いぜ。

「やめてくれよ、髭が痛いぜ」

「そんな口調も可愛いぞエイブラハム！」

親父は一時間程離してくれなかつた、飯どきになつても頬が痛い…

「大変ですねエイブラハム様」

俺の部屋で一緒に食事を取つてているメイド、名前は確かシエスタだつたかね、彼女はニコニコしながらそんな事を言つてゐる、俺より3つ年下の彼女は小さい口で一生懸命パンをかじつてゐる。

「そんな事はない…と言いたいけどな、まあ俺は愛されているんだよ」

母は俺が4つの時に病氣で他界した、優しい母だった…だがそれだけだ…人の死に慣れ過ぎた俺は泣けなかつた。

「エイブラハム様はおとなですね、シェスタも見習いたいです」

まだちょっと舌つたらずな口調でニコニコ笑うシェスタ、妹が出たみたいだ。

「よしシエスタ、飯食い終わったら俺に着いてこいー遊びに行くぞ！」

俺がそう言うとシエスタはパアッと顔を明るくさせて急いでパンを口に詰め込み始めた、食べるのが遅いシエスタなりの気遣いか、それとも遊びへの執念か。

というわけで俺達は屋敷の裏門からこっそり外に出た、俺は杖を腰布に挿し背中に授業で作ったミスリルのショートソードを背負っている、今日ははちょっと遠くの森まで遊びに行くつもりだ…口笛を吹いてまだ子馬の愛馬を呼ぶ。

シエスタを愛馬に乗せて俺はシエスタの後ろから手綱を握り馬を走らせる。

「わあ！凄く早いですエイブラハム様！」

凄く喜ぶシエスタの頭をぐりぐり撫でると自分の頭を俺の胸に預けてきた、そんなこんなしている内に森が見えてきた、馬を近くの木に止めてシエスタを下ろす。

「さあ探検に行こう！」

「はあい！」

俺の言葉にノリよく返事をしてくれたシエスタに感動して森の中に入る、昼間でも薄暗い森は恐怖を抱かせる。

「ち、ちょっと怖いですエイブラハム様…」

シエスタがピッタリとくつついてくる、その姿に思わず微笑みながら歩を進める。

30分程進んだどうか、異臭を俺の鼻が感知した。

「シエスタ、身を低くして俺の後ろに

「はいっ！」

「しつ！静かに…！」

シエスタは自分の口を両手で塞いでおとなしく俺の後ろに隠れた、茂みから顔を出すとそこには豚のような魔物が居た、なんじやありや。

「はわわ…オーケーです…」

「…なにそれ？」

「知らないんですか…！？私達みたいな子供が大好物な魔物ですよ…！」

つまりは子供を食べる魔物らしい、人間の子供なんぞ食べるところ少ないとと思うがね。

「どれ位強いんだ？」

「大人が十人がかりでも殺されちゃいます…逃げましょウエイブラハム様…」

成る程な、下手に関わるよりは逃げた方がいいとシエスタに賛同して身を引こうとしたが急に風向きが変わったのだ、風下だったこちらは風上になっていた

「ブキイーーー！」

豚のよつな鳴き声をあげて巨体を揺らしながらオークがこちらに向かってくる、俺は覚悟を決めて背中のショートソードを引き抜いた。

「走れシエスタ！」

「え！？え！？」

「早く！」

「は、はい！」

シエスタが走り去ったのを背中越しで感じて深く息を吐く、完璧な明鏡止水ではないが一応形にはなつていて、さて筋力の劣る体でどこまで出来るのか。

こちらに接近したオークは木をそのまま削ったような巨大なこん棒を振り上げた、その隙を利用して奴の懷に入り袈裟に剣を振る、オークの固い皮膚を切り裂き中の脂肪と血を腹から引きずり出したが致命傷には至っていない。

「ブギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

痛みで足を踏み鳴らしている、ドシンドシンと俺まで踏み潰されそうになり一步後ろに下がる…剣の短さと俺の力の無さで致命傷を負わす事は出来ない。

ならばと刺突の構えを取り相手の拳動を待つ、痛みが収まつたのか怒りに染まる瞳をこちらに向けてきている、奴はこん棒を思いきり振り上げて振り下ろした、右に倒れ込むように転がり威力を殺すように回転して立ち上がり振り下ろされ地面に減り込んでいるこん棒に飛び乗り、そのままオークの腕を駆け上がる。

「くたばりやがれ豚野郎！」

思いきり口の中に剣を突き刺すとオークは力が抜けたように前に倒れ始めた。

「うわ！？おい、ま、待て！」

剣を引き抜こうとしたら肉質が硬くなつたのか引き抜けない、そのまま俺はオークと一緒に地面に叩きつけられる事となつた。

「ぐつ…いてて、ちきしょう…」

悪態を尽きながら覆いかぶさるオークの死体からはいざり出る、全身打撲と言つた所かな、骨は折れていないのが幸いである。

杖を引き抜いて自分に治癒魔法をかける、痛みが引き筋肉に貯まつていた乳酸が抜けていくのがわかつた、深々とため息を吐く…死なずに済んだと、オークの頭を持ち上げなんとかショートソードを引き抜き背中に背負い直す。

「うわーーん！…離して！…離してーーー！」

「シエスタ？」

そこまで遠くない場所からシエスタの悲鳴が聞こえた、何があつたんだ？

…いやそもそもオークって単体で生活する生き物なのか？ それならば警戒する必要はないはずだ、シエスタが恐怖を抱いていたと言つ事は恐らく村を襲う為に群れる習性を持っているはずだ。

つまりはシエスタは捕まつたのだろう、声が聞こえた方向に突つ走る、四の五の言つている場合ではないので杖を腰布から引っ張り出して魔法の準備をする。

「シエスタ！」

声が聞こえた場所は投棄された古い寺院でシエスタは沸騰してい

る鍋の上に素っ裸で縛り上げられていた、シエスタが泣きわめく姿を見てオークは楽しんでいるのだろう。その紐が切られてシエスタの体は重力に引かれ鍋の中へと…

「させるか！鍊金！！」

杖を振つて鍋を砂に熱湯を水に、火を消して薪を干し草に変えてやつた。

シエスタは柔らかい干し草の中に落ちて見えなくなつた、8匹のオーク達がこつちを見て歓喜の鳴き声をあげている…ご馳走が増えたつてか？ハツ！俺は煮ても焼いても食えない奴なんだよ！

「ファイアーボール！エアカッター！ウォーターブレッド！アースランス！」

火の玉が一匹を美味そうに焼いて風の刃が一匹を半身に下ろして水の弾丸が一匹を寺院の中まで吹つ飛ばし土の槍が一匹を串刺しにした。

オーク達がジリジリと下がり始めた、今頃力量差を感じたのだろう、俺が力を込めて【本気】で睨むとオーク達は悲鳴をあげながら逃げていつた。

「…シエスタ！」

オーク達がいなくなつたのを見計らつて干し草からシエスタを引つ張り出す。

「エイブラハム様～！怖かつたです…凄く怖かつたです…」

「あ、ああ…すまん」

急に抱き着かれた、ビンタの一発でもと覚悟していたのだがどうやら杞憂に終わつたようだ。

その後シエスタに服を作つてやり俺達は帰路に着いた、家に帰つたら親父にこつぴどく怒られた…まあ当たり前だよな、今回の探検は散々な結果に終わつたがまたどこかに行つてきたいと思つ。

第一話・お友達（前書き）

もじけえ

第一話・お友達

あれから三年が立ち俺は八歳になつた、俺はやはり研究者としての性なのが研究に没頭するようになつた。

世間ではそれなりに有名だ、エイブラハム・ヨシュア・クルスト・ド・タルブの薬はよく効いてくれると、そして俺が今作つているのはヴァリエール家次女への誕生日プレゼントたる薬だ。

「よつ、でーきたつと」

出来た錠剤を瓶に突っ込み魔法で包装する、薬の名前は万能薬、名前の通りウイルスや細菌などの菌類が引き起こす病気ならなんだつて治せる薬でイチゴ味だ。

イチゴ味、ここ大事な。

「兄様！」

部屋の扉が音を立てて開きそこからシエスタが走つてくる。

シエスタ、俺の妹になつた女の子だ、俺がタルブ辺境伯の息子としてのメイジの才能をこつそりとくれてやつたらシエスタはちょっとした癪癩でそれを暴走させた、それをみた俺の親父はシエスタを養子に迎えたと言う訳だ。

親父の辺境伯としての血筋、母の公爵としての血筋の力を得たシエスタは現在炎のドットである、何故才能をくれてやつたかと言うと俺から見れば血筋の力は邪魔しかしないのだ、違う魔力同士は反発しあう為俺が向こうから持つてきた魔力と生まれ持つた魔力は反発しあつていた、邪魔だからシエスタに押し付けた訳だ。「兄様兄様、遊んで下さい！」

あの一件からやけに懐かれた、それでも妹分が妹になつただけでさして変わらない、俺は膝を叩いて立ち上がる。

「よし、街にでも行くか！」

「わーい！」

ピヨピヨと俺の背に飛び乗るシエスタ、それを見ながら苦笑しつ

つ俺は街に向かう…街と言つても人口1200人の城下だ。

屋敷から出ると石畳の道が広がり両脇には店が立ち並んでいる、俺とシエスタはよく適当に街をブラブラして困っている人が居たら無償で助けていた。

「おお！エイブラハム様にシエスタ様だ！」

「おう本当だ、エイブラハム様ー！妻の病気はすっかりよくなりました！」

「わしの足もこの通りですじゃ、感謝しますぞ！」

いやはや大人気である、色んな人から頭を撫でられおやつを渡されてしまつた、街に困っている人はいなかつたので近くの川まで歩きそこでおやつにする事にした。

二人でおやつを食べて河原で昼寝をして屋敷に帰る、いつもの日課だ、前世で一番欲しかつた物…もしかしたら神は本当に居るのかもしぬれない。

そんな日課を二日程熟していたらとうとう誕生日になつてしまつた、窮屈な服に身を纏い馬車に乗り込みヴァリエール領に向かつた。

「なあエイブラハム」

最近ちょっと老けたんじやないかと思う親父が話しかけてくる。

「ん？なんだい親父」

俺は窓の外の景色を見ながら答える。

「今のお暮らしは楽しいか？」

「何言つているんだよ、最高に決まつてゐるじやないか。親父が居て妹が居て…遊びに行つて帰つたらおかえりつて言ってくれて一緒に飯を食つて…家族が居るつて幸せ以上の幸せつてあるか？」

そういうと親父はそうかと言つてニヤリと笑つた。

他愛もない会話をしている内にヴァリエール家に着いた、なんと

言うか…でっけえ家だつた…中に入ると親父はそうそうに挨拶に行つてしまい取り残された俺は仕方なく次女を探す事にした。

たしかピンク色の髪の毛してるつて聞いたな、回りを見渡すとすぐにつかつた、大量の貴族の子供に囲まれて挨拶されていた。

よし面倒臭い、プレゼントをさつさと渡して俺はどこかに退避しよう。

「ほら、どいたどいた。」

回りに群がる貴族の糞餓鬼どもを押しのけて次女の前まで行く、おや随分将来美人になりそうな顔だ。

「はじめまして俺エイブラハム」

そう言つて頭を下げる。

「はじめまして、私はカトレアです」

彼女も同じように挨拶した、俺は手に持つていた小さな箱をカトレアと名乗つた幼女に渡す。

「よろしく、はい、誕生日プレゼント、つーわけで誕生日おめでとう、一步大人になつたね、やつたね。…じゃ」

義理は果たしたからとつと退散する、あまり長居すると面倒臭い事になりそうだ。

「えつと、あの…」

カトレアが何か言う前に俺はさつさと外に出てしまつた、外にある大きな池の湖畔に座り込み欠伸をする、もう夜だ…八歳のお子様には辛い時間である。

「ゴロリと地面にねつこうがると先程見た顔がこちらを覗き込んでいた。

「うわっ！？カトレア！？」

「はい、こんばんは」

飛び起きた俺にも驚かず「一二一二」とカトレアは笑う、なんなんだ

？ カトレアの両脇には金髪のキツそうな少女とカトレアを小さくしたような幼女が居た。

「…ダレ？」

急な展開について行けずには疑問符を出す。

「紹介するわね、こちらが私のお姉様であるエレオノール姉様」
紹介されたエレオノールとやらはそっぽを向いて踏ん反り返っている。

「こっちが私の可愛い妹のルイズよ」

ルイズと呼ばれた方はピヤツとカトリアの背に隠れてしまった。

「…で、なんか用？」

そろそろ面倒臭い俺はぶっきらぼうにそれを聞く、カトリアが口を開く前にエレオノールがスツと前に出てきた。

「貴方がカトリアに媚びらずにさっさとここに来たのを見て興味があつたのよ」

見た目もキツけりや口調もキツい、将来嫁の貰い手に困りそうだ。

「…で？」

もう面倒臭いので「口りと寝る、今日は用が綺麗だ。

「だから友達になつてやるつて言つてるのよー」

エレオノールが声を粗げた、俺なんか悪い事したつけ？　いやしてないよな。

「あつそ、よろしくね～つと…ふわああ…」

大口を開けて欠伸をする、やつぱり眠い。

「きいいいいーどこまでも馬鹿にしてー…」うなつたら決闘よー…「めんなさいつて言わせてやるわ！」

何が気に入らぬのか怒り狂いながらエレオノールがこちらに杖を向けてきた、自分も腰布から杖を引き抜き一三度杖を振る。

「エアステイール」

呪文を唱えるとエレオノールの杖が俺の手に飛んできた、それを受け止めて再び欠伸をする、オリジナルスペルのエアステイールだ、相手の手から風で武器を取り上げる魔法である。

「…くつ！覚えていなさいよー」

「え？何を？」

「…うえーん！馬鹿ーーー！」

からかい過ぎてエレオノールはどこかに走り去ってしまった、うん、こりや後で謝らなきやな。

「ね、姉様に勝った…」

ルイズと呼ばれた女の子が咳きながら近寄ってきて俺の手を掴んだ。

「お兄様と呼ばせて下さい」

なんでやねん。ルイズに手を離して貰つて立ち上がる、服に着いた芝生を払つて一人を見る。

「エレオノールちゃんはどこに行つた?」

「恐らく自室よ、でもどうして?」

カトリアが不思議そうな顔で俺を見てくる。

「謝りに行くだけだよ、流石にやり過ぎた」

二人とも酷く驚いたような顔をしていた、なんだよ、俺が謝るのはおかしいってか? 人間誰でも間違いを起こす、間違つて誰かを傷つけたらごめんなさいって謝る…これが出来てこそ一人前の人間であるしかつこよさでもあり誇り高い行為でもある。

悪い事をしても謝る事をせずふて腐れる奴はプライドが高いんじやなく低いのだ、捨てられるプライドがないから必死に虚勢を張るしかない、男ならあつさり捨てられる位の余分なプライドは持つておくべきだ。

「それじゃ誠心誠意謝罪に言つてくる」

二人を尻目に走り出す、謝るなら謝るで早い方がいい、時間が経てば経つほど謝り難くなるしな。

ハルゲニア語でエレオノールと書かれた部屋までたどり着いた、息を吸い込み扉をノックする。

「…ダレ?」

「エイブラハムだ」

「帰つて」

やはり会いたくないようだ、それはそれで悲しいな。

「さつきはやり過ぎた、ごめん、改めて友達になりに来た」

「…今開けるから待つてなさい」
扉の鍵が外されて赤い目をしたエレオノールが怖ず怖ずと出でた。

俺はエレオノールに向かつて手を伸ばす。

「なに？」

「握手で仲直りしよう」

そういうて笑うとエレオノールも釣られて笑つてくれた、この子も綺麗な顔をしている。

エレオノールがゆつくり出してきた手をとつて上下に軽く振る。
「これで恨みつこ無しな、俺はもう帰るけどこれからはいつでも皆でタルブまで来てくれよ、歓迎する」

「…うん、私、貴方が婚約者ならよかつたわ」

「五つも年下の子供に何を言つてんだ、親父が俺を探しているみたいだから俺は帰るよ」

「うん、バイバイ」

お互い手を振りあつて別れる、門までエレオノールとカトレア、ルイズは見送りに来てくれた。

「…もう三人の女性を口説いたのか？エイブラハム」

親父がニヤニヤしながら尋ねてきやがつた。

「友達が出来たんだよ」

それだけ答えて俺は新たに出来た友人を馬車の窓から眺めていた。

第三話・カリーヌとカトレンと婚約者と（前書き）

その内R-18も書くかも知れない、アヒンアヒン言わせるけんね、
サイトを…（嘘）

感想やレジュー もう一皿用にお願いします、出来るだけお返事をせて
いただきます

第二話・カリーヌとカトリアと婚約者と

非常に氣まずい、すつゞく氣まずい、俺は自分の家のドアを開けて玄関に立っている、何故こんな所に居るかと言つと遊びに行こうと玄関に歩いていたら来客があつたようで呼び鈴がなつた。正直面倒だつたが来客なら出なくてはいけないので扉を開けたら…ヴァリエール三姉妹の親御さん、ヴァリエール公爵とその麗しの奥方カリーヌが立つていた。

「……何か御用で？」

背中に隠れて震えているシエスタを庇いながら尋ねてみる、半端ない威圧感だ。

「君は確か…ちょうどよかつた、カトリアに渡した薬を作つたのはダレがね？」

「俺ですけど何か御用でも？追加のご注文ですか？」

俺が作つたと聞くと公爵は目を丸くした後俺の両手を掴んだ。

「君が…君がカトリアを助けてくれたのか！礼を言つ！」

俺の頭には盛大にハテナマークが浮かび公爵の目には大量の涙が浮かんでいた。

事情を聞く所によるとカトリアは不治の病に生まれつき犯されていたようで長くは生きられない体だつたそうだ、それが俺のあげた薬で一発で完治。

わざわざ御礼を言いに来てくれたそうだ。

「おや公爵、今日はいかがなされた？」

親父が驚いたように走つてきた。

「エルドリッヂ！君の息子が我が娘をだな…」

親父同士でやいのやいのと話し始めてしまつた。

てつくり俺はエレオノールを泣かした事で何かしらお叱りを受けるのかと思った。

「……

「……ん？うおっ！？」

ボーッとしていたらカリーヌがしゃがみ込んで俺を見ていた、思わずびっくりしてしまったが…よく見るとカリーヌってとても三児の母には見えない、俺の頭脳だって肌年齢は10代って弾き出しているしカリーヌ自身もどうみたって20代、いや10代とも言える張れるレベルだ。

「な、何か？」

「…貴方随分強い魔力を持つているのね、私以上…ルイズ以上から」

…一発で隠蔽された魔力を見抜きやがった、確かに驚いて一瞬隠蔽が疎かになつたが…一瞬で見切つたのか？

「…ちよつと戦いましょ、私が認めれば…そうね、カトレアをお嫁にあげましょう」

立ち上がつたカリーヌは朗らかにそう言い放つた、何故そうなる。

「断る事は…」

「不可だ、エアハンマー」

屋敷の外まで弾き出された、杖を引き抜いてある呪文を唱える。

「ウォーターブレイド！」

杖の回りに水が集まり剣と成した、風水のラインスペルだがこの剣は鋼鉄だろうと両断する、今は筋力がないから苦肉の策だ。

「ほう、剣か、ボクも剣は得意だ。ブレイド」

カリーヌさん口調変わつてはりますよ。

カリーヌはブレイドの魔法を唱えてこちらに肉薄してくる、だがそれはミステイクだ、カリーヌと魔法合戦をやつたら俺は負けるだろ？…だが剣なら別だ、何故なら俺は剣聖…剣の技術においては右に出る者はいない。

あつさりとカリーヌのブレイドをいなす、カリーヌはキヨトンとした後フライで素早く距離を取つた。

もうちつと体がデカければ今ので仕留められたがこの体じゃ無理だ、気を取り直して下段に剣を構える。

「ニアハンマー、ニアカッター、ニアカッター、ニアカッター」
マシンガンのようにな風魔法が飛んでくるがそれを全て叩き落とす、
次の詠唱までが早すぎて近寄れない…ちつと無理するしかないか?
「しつ！地を這う蛇！」

地面に剣を叩きつけると地を這う蛇のようになネクネと曲がりながら真空刃がカリースに近寄っていく。

「甘い、鍊金」
鉄を盾にされて地を這う蛇はあつさり無効化された、ちくしょうパワーが足りねえ…ウォーターブレイドを解除して地面に杖を向ける。

「クラッショ！」

地面が爆発して視界を遮った、水風土炎のスクウェアスペル、水素爆発の魔法だ。

命中率に難があるのと無風状態じゃないと使えないのが欠点の魔法だ、だから地中で爆発させて眩ましにするか室内で爆発させるかの一択しかない。

「甘い」

そして俺の苦肉の策はあつさりと竜巻に吹き飛ばされてしまった…しかし砂埃が晴れた後俺はどこにもいなかつた、何故なら…

「ぎやああああああああ…？」

隠れていた地面」と竜巻に吹き飛ばされていったのだった…！

だけどこのままじや終われない竜巻が切れたのを見計らい空気を鍊金してナイフにする、カリースはキヨロキヨロと辺りを見渡しているが俺はそんな所にいない、ナイフを逆手に構えて上空から強襲する、影に気付いたのか上を見て俺と目があつた。
躊躇わざナイフを振る…かわされた…

「ぐあつ…」

そのまま地面に叩きつけられて俺は動けなくなつた。

「…見事よエイブラハム、私に一撃当てるなんてね」
カリースの首に一本の赤い線が入り血が垂れる。

「約束通り貴方をカトレアの婚約者とするわ」

そう言つてニツ「カリ笑うカリース、俺はいや、別にいいつすと言おうとしたが…言えず意識を手放した。

それから三日後、俺とカトレアは正式に婚約する羽目になった、カトレアは凄く不服そうである。

そらそつだ、数える程しかあつてないのだから、あの程度の出会いで惚れられる訳がないのだ。

「はあ…すまないなカトレア」

「…気にしてないわ」

ものすごく気にしてらつしゃる。

俺だつて望んで婚約者になつた訳ではないのに…つーかカリース強引過ぎるだろ常識的に考えて。

「ふう…ま、よろしくなカトレア。愛想が尽きたらさつわと言え、婚約解消するから

ため息を着きながらわざと言つてやるとカトレアはむつとした表情を俺に見せた、なんなんだよ。

「貴方私をどう思つてるの？」

「…質問の意図がわからんのだが…」

「貴方私を女としてどう思つているのつて聞いているの」

笑い飛ばしてやわらうかと考えたが真剣な表情に押されて考える事にした。

現状を把握しようか、俺八歳、カトレア九歳…まあ俺も今年で九歳だから同じ年として…

…言える事は二つ三つだな。

「カトレア、俺もお前もまだ子供だ、ぶつちやけ俺がカツコイイ男に見えるか?」

「…どつちかと言つと可愛いわね」

「これ位の歳だとみんなそうだとツツコミたくなつたが抑えて咳払いをする。

「決断するにはまだはええよ」

カトリアは少しだけ考えた後渋々頷いてくれた、しじうがない…

聞きたかったであろう言葉を言ってやるか。

「…俺は将来カトリアは美人になると思つぞ、絶対な、お前の親父さんもお袋さんも美形だしな」

そう言つとカトリアの顔はまるで花が咲くようにパアと明るくなつた。

「そう、フフフ」

やけに嬉しそうだ、どうして古今東西南北女つづーのは褒められるだけでここまで喜べるのだろうか。

氣色悪い笑い方をしているカトリアから三歩離れて紅茶を飲む、この紅茶安物にしては美味しいな、ついでにスコーンをサクサクと… おお、流石シエスタ… 美味いぞお焼き加減が完璧だ。

「お兄様… 婚約したつて… 婚約したつて本当なんですか…？」

ドアを吹き飛ばさんばかりの威力で開けて入つてきたのは噂… ではないがシエスタ、表情は鬼気迫つている。

「成り行きな、でどうしたシエスタ」

「お兄様の…」

「ん？」

なんだかとつても嫌な予感が…

「お兄様のスケコマシ… ファイアーボール…」

「ヒデブツ…？」

ああ哀れ、俺は何がなんだかわからないまま外まで吹き飛ばされたのだった、なんだか今日はあの夫妻のせいであつてない気がする。まあ… いつか報われる日が来るだろうさね。

間話・ステータス（前書き）

エイブラハム達って今どれ位強いの？
てな訳で表記してみました

間話・ステータス

エイブラハム・ヨシュア・クルスト・ド・タルブ

能力値（幼年期）：クラス：説明

筋力：E：子供らしい筋力、野犬に負ける

耐久：C：馬並の体力の多さ、フルマラソンを楽に完走出来る

敏捷：E：子供らしい足の早さ、子供同士なら1番！

魔力：A：魔王クラスの魔力の持ち主

技量：：千年に一人生まれるかどうかの天才が決死の努力にて手に入れた技量、世界を楽に救える

幸運：F：不幸を呼び込む程の運

所持スキル：クラス：説明

神の頭脳（真）：：神に与えられし頭脳は万物の事象に対し全てを理解し支配する

ピースメイカー：-：封印されしスキル、解かれれば平和を生み出すであろう

剣聖：S：全盛期より大きくランクダウンした技術ではあるが剣を振れば空を切り裂き山をえぐり海を割るが魔剣聖剣クラスが必要

安楽死の心得：A：敵を苦しませずに殺す心得

必殺の心得：S：敵を逃がさずに殺す心得

不屈の心：B：絶望的な状況になればなるほど燃え上がり筋力がアップする

勝利への戦略：：敗北必至の戦争でも必ず勝利するスキル

ニヤンリンガル：D：動物と意思疎通が出来る

地獄からの帰還：-：これにランクはない、一つの人生で一度だけ生き返る事が出来る

騎乗：B：馬やら車ならプロ並に乗れる技術、二人乗り対応

戦闘続行：：死体となつても敵がいなくなるまで戦い続ける事が出来る

一家に一台：C：人並み以上になんでも出来る

ヒーロー：A：友人恋人家族からの救援サインに必ず間に合うよう
に駆け付ける

シエスタ・ド・タルブ

能力値（幼年期）：クラス：説明

筋力：F：幼児並の筋力

耐久：F：幼児並のスタミナ

敏捷：E：子供並の足の早さ

魔力：C：一人前の魔力量

技量：E：なんの変哲もない子供程度の技量

幸運：C：それなりに運がいい

スキル：クラス：説明

タルブの血筋：A：火の魔法に向いており魔力量も豊富

メイドの心得：C：お世話の心得、優秀なメイドである証拠

侍の魂：D：大分薄れてしまつたが彼女の魂には侍の力が宿つて
いる、刃物の扱いが最初から上手い

悪食：B：腐りかけた物や痛んだ物を食べてもお腹を壊さない

理解者：A：物分かりがよく聰明である

兄萌：A：優しい優しいお兄ちゃん、いつも強くって優しくってか
つこよくて憧れだつた、けどいつのまにか妹ではなく女として意識
するように…禁断の関係を好むスキル

カトレア

能力値（幼年期）：クラス：説明

筋力：F：貧弱すぎる筋力

耐久：F：幼児並の体力

敏捷：F：幼児並の足の早さ

魔力：C：一人前の魔力量

技量：D：ラインクラスの技量、十分優秀

幸運：E：いつもツイていない、なんで私だけ…

スキル：クラス：説明

弱い体：-：元病弱な少女、歩けば疲れて走れば倒れる

ヴァリエールの血筋：A：色濃く継いだヴァリエールの血、風と水の適正がある、基礎魔力量が跳ね上がる、ちょっとびりSにもなる
カリスマ：E：他人や動物から好かれ安くなる程度のカリスマ
自己犠牲：-：このスキルにクラスはない、愛する者が死にかけた時自分の命を与えて助ける

妹思い：B：恋を応援したりと妹の為に動くスキル、溺愛
希望の心得：A：不利になればなる程希望を振り撒く心得、カリスマのクラスがグーンと上がる

烈風の娘：B：英雄烈風のカリンの血筋、風に高い耐性を誇る
潜在能力：A：遺伝子に刻まれた才能、彼女がこのまま大人になればとてつもない力を發揮するかも知れない

烈風のカリン

能力値：クラス：説明

筋力：C：見かけに寄らずとてもパワフル
耐久：B：戦士らしいスタミナを誇る

敏捷：B：全盛期よりワンランクダウンした敏捷

魔力：A：エイブラハム並の魔力を持つていてる時点で十分人間やめています

技量：A：風に関して彼女の右に出る者はいないだろう

幸運：C：ツイていないんだがツイてないんだかわからない

スキル：クラス：説明

騎士の魂：A：護衛時や防衛戦時に耐久が跳ね上がる魂

母：B：母とは悪ガキが唯一恐れる者、時に優しく時に厳しい

ツンデレ：-：封印されしスキル、解放される時は旦那とのデート位であろう

英雄：B：烈風と呼ばれる彼女はこれからもマンティコア隊で恐れられるであろう、才能だけでは発現しないスキル

魅力：A：お年を召しても彼女は美人、街を歩けば男が振り向く、

目があつかないよ、でもそこがまたイイ

騎乗：B・魔獣にも乗れる騎乗スキル、エイブラハムは無理
リキャスト：A・素早く呪文を唱えられるスキル

聞話・ステータス（後書き）

書き忘れましたが前話でカリーヌさんは手加減しております

第四話・~~する~~事が存在意義（前書き）

やると決めたみたいですが、ほんの少しだけ前世に触れました

第四話・守る事が存在意義

俺は今ヴァリエール家に来ている、あの一件からカリーヌは俺の師匠的な存在になつてゐるが…どうやらあの時相当手を抜いて貰つていたらしく今度は掠りもしないのだ。

「今日はここまでだ、風呂に入つてよく眠れ」

返事をする余裕もないのにコクコクと頷いて返事をする、カリーヌは鼻で笑うと俺を放置してどこかに行つてしまつ…なんだか厳しい母親が出来たみたいで落ち着かない。

「お兄様～大丈夫ですか？」

遠巻きに見ていたシエスタが走つて近寄つてくる、首を横に振つて無事じやない事を伝える。

「ですよね、レビテーション」

クスリと笑つたシエスタはレビテーションを使つて俺をヴァリエール家の一室にほおりこんだ、あの…もうちょっと優しくしてくれないかな…俺全身打撲してゐし切り傷だらけなんだけど…

「また酷くやられましたねエイブラハム兄様」

ケラケラとルイズが笑つてゐる、何を思つたかルイズは杖を引つ張り出した。

「今治癒魔法をかけてあげますね」

おい、待て待て…お前の魔法は全部…結局俺はトドメを刺され、ヴァリエール公爵に治癒魔法をかけて貰つた。

思つた他重傷で三日程ヴァリエール家にお世話になつてしまつた、ついでにヴァリエール公爵の誠心誠意の謝罪で俺はすっかり恐縮してしまつた。

ルイズがなんでもかんでも魔法を爆発させるのは知つてゐるし俺としては蔵書量の多いヴァリエール家の書斎を利用出来て万々歳なのだ。

「ふむ」

俺が今読んでいるのはマザリー一枢機卿の執政記録だ、職に就いて一年のマザリー一だがなんと言つたか普通である。

当たり障りのない法案しか通せてないのだ、平民達の暮らしを良くする法案は全て潰されてしまつていて。

封権社会によく見られる兆候だ、目先の金銭にしか見ていない貴族による妨害、全く持つて惜しい国だ、食料事情を見るに元々の国力は高いはずであるがその国力は貴族の懐になだれ込み王家に届くのは僅かとなつてしまつていて。

イツツモツタイナイ、いつそ農業革命でも起こそつか？ 後で親父に相談してみよう。

本を閉じて元の場所に戻す、俺が出来る事は限られている……俺が今出来る事は領地の小作人制度を無くす事だ。

木製のドアを開けると拳一個分開いて扉が何かにぶつかった……何か嫌な余寒が……一度閉じてもう一度ゆっくり開くとドアはしっかりと開いた。

「い、いたい……」

部屋の前には額を押されたカトレアがうつまつっていた、額は赤くなつておりカトレアの綺麗な瞳には大粒の涙が浮かんでいる。

「あー、ごめん、大丈夫か？」

「だ、大丈夫……」

あまり大丈夫そうではなさうなのでキュアの魔法をかけてやるとカトレアは涙を拭いながら立ち上がった。

「ちよつといいかしら？」

数秒で立ち直ったカトレアはニッコリ笑いながらそう言つてきた、別段今やる事はないので頷いて返事をする。

「ちよつと王都まで行きたいの、でも馬車は出払つていて馬しかないのよ」

ふむふむ、言いたい事は分かつた、俺に王都まで連れて行つて欲しいのだろう、王都までの道知らないけど……

「王都まで連れていけばいいのか？ でも俺道わからんよ」

「道なら私がわかるから大丈夫よ」

と言ひ訳で俺はカトレアを前に乗せてその背後から抱き着くように手綱を握り馬を走らせるのだった。

「貴方乗馬上手いのね」

「そうでもないさ、今日は馬がよく言つ事を聞いてくれるだけだよ」
事実である、俺は動物に嫌われるのだ、転生する前に一緒に居た友人は気質が荒々しいから嫌われると言つていたがあの頃は五歳から銃を握り敵を殺していたのだ、仕方ない……と言い訳しておく。

……俺は殺した人間全ての顔を覚えている、いや忘れられないのだ、どんなに辛い記憶でもどんなに小さな出来事でも……俺の脳は忘れてくれない。

「えいっ」

「はふえ！？」

そんな事を考えていたらカトレアに頬を強く引っ張られた。

「いふあいいふあい、にやにしゅるんふあ（痛い痛い、何するんだ）

「泣きそうな顔してるわよ」

ちょっと怒ったような顔のカトレアはそう言つてから俺の頬から手を離した。

「男の子がそんな顔するものじゃありません」

カトレアはそう言つてブイッと顔を反らしてしまった、多分恥ずかしかつたのだろう。

「分かったよ、気をつける……後……アリガトウ……」

「え？ 最後なんて……」

「……なんでもない！ 飛ばすからしつかり捕まつてろよ！」

照れ隠しに馬の脇腹を何度も蹴つてスピードを上げる、カトレアが心配してくれた事がちょっとだけ嬉しかったのは内緒だ。

それから数時間で王都に着いた、時間は既にに昼前と腹時計が伝えてくれている。

「おおう、活気があるな」

王宮までのメインストリートは狭いながらも人でごった返しており道の端には所狭しと屋台が並んでいる。

漂つてくる食べ物の匂いに腹が減る。

「ね、ねえエイブラハム、お腹空いてない？」

それはカトリアも同じようで俺にそう聞いてきた。

「おう減つてる減つてる、俺お金沢山持ってきたし昼飯は豪勢に行

こうぜ」

そう言つとカトリアは楽しそうに頷いた。

「ん？」

あちこちから視線を感じる、視線の向かう所は俺の腰に下げた袋
…ははーん、成る程ね。

「どうしたのエイブラハム？早く行こうよ」

「おう、行く行く」

メインストリートを歩き出すと数人の視線の主が動き出した、だがまだまだ甘い…人込みだからと言つて視線を感じられた後姿を隠さないのは三流だ、幾人か隠れた一流が混じつているっぽいが…さて、この世界のスリの腕前を見せてもらおうかな。

しばらく歩き王宮に近くなつた頃カトリアが振り向いた。

「…どうしたの？その大量の袋」

カトリアが怪訝な瞳を俺に向けてきた、そりやまあ驚くわな、俺の左手には小さな袋が沢山ぶら下げてあつた。

「俺の財布をスロウとしたスリからスつたんだ」

甘い奴らである、今頃は気がついて焦つていいだろ？

「そんな事したらダメよ！」

カトリアに怒られた、当たり前か。

「大丈夫これは」

運のいいことに近くに孤児院があつた、そのポストにぶち込んでおく。

「悪銭身につかず、悪い事して貯めたお金は恵まれない子供達のご飯となります」ついでに自分の財布から10エキュー出して入れ

ておぐ…ついでだ、これは子供達の為なんかではない、子供は国の未来でありそのまま将来の国力に繋がる、所詮自分の為だ。

「や、めっしめっし〜」

ぐるりと踵を帰して歩き出す。

「もう…レストランはそこよ、通り過ぎたやつてるわよ」

カトリアに呆れられながら注意された、俺は照れ隠しに後頭部を搔きながらカトリアの後にレストランに入る…特に描画する必要もないで割愛する、味は普通だった。

カトリアの春服選びに付き合いで、買い物を終え帰路につく頃にはすっかり暗くなってしまっていた。

「「めんね、遅くなっちゃったわ

「ま、仕方ないさ、まとめ買いだつたんだろ?」

買い物過ぎて馬車じやなくては持ち帰れない量だつた為にそう判断した。

「ね、ね、エイブラハムはどれが一番似合ひと悪い?」

「そうだなあ……………」

馬のスピードを上げる。

「きやつどうしたの?」

「夜盗だ、数は12…馬で追つてきている!」

後ろを見ると俺の言つた通りの数が馬で追つてきていた。

「止まれ!ぶつ殺すぞ糞ガキども!」

各々武器を振り回しながら追いかけてきている、逃げきれるか?

突如風船を破裂させた音が響いて脇腹に燃えているような痛みを感じた。

「ぐ…マスケットなんざあるのか…」

後ろを振り向くとフリンクロック式マスケットが煙を銃口から立ち上らせていた。

傷ついた脇腹を押さえながら必死で手綱を操る、押さえた傷口からは血がダクダクと溢れている、どうやら静脈を傷つけられたようだ、意識が飛ばなかつたのは幸いだ。

「エイブラハム！ 酷い傷……痛くない！？ 痛くない！？」

カトレアの子供なりの心配、俺は霞む視界に活を入れて笑つて見せる。

「大丈夫、全然痛くないから安心して前を見ててくれ」

何故かお前が泣きそうな顔をしていると俺も泣きたくなるんだ。

もう一発銃声が響く、馬がバランスを崩して地面に倒れ込む、叩きつけられる前にカトレアを庇い怪我をしないようにする。

叩きつけられた衝撃で意識が飛びかかるが歯を食いしばり堪える、立ち上がりカトレアを助け起こして杖を引き抜く。

「へつ！ いつちょ前にナイト気取りだぜこのガキ！」

夜盗達は手慣れた動きで俺達を取り囲み、俺を見てげらげら… そんなんに滑稽か？ なにかを守る男がそんなに滑稽か？

「ハツ！ 自慢出来るような事一つも持つてない奴がよく言つぜ… どうした？ 怖いのか、馬鹿が馬鹿面こいて笑つてないでかかつてこいよ」

そう言つて不適に笑つて見せると夜盗達の笑い声が止み静かに武器を構えた、いつちょ前に怒つてやがる… 動きから見るにコイツらは仕事にあぶれた傭兵だろう。

「死ね！」

一人が切り掛かってくる、素早くウォーターブレイドを唱えて攻撃を受け流し氣道を切ると喘息のような音を出しながら一人は息絶えた。

次は三人同時に向かってくる、順番に攻撃をいなしで急所に剣を叩き込むと三人共同じように倒れた、そして三度目の発砲音が響く。足を撃ち抜かれて地面に膝を着く、剣を支えにして倒れるのはなんとか防いだ。

なんと八人全員が俺に向かってマスケットを構えている、こんなガキに向かつて銃かよ。

「よく頑張ったが… やはりただのガキだな」

一ヤリと笑う敵の首領らしき男、他の呪文を使おうにも血を流し

過ぎて集中出来ない、足は動かない…

八方手詰まりかもしれん。

「さ、杖を捨てる。そのメスガキと足の一本で許してやる。」

首領らしき男はカトレアを見て舌なめずりをしている、成る程ペドフエリアか。

カトレアを渡せば俺の命は助かるらしい…成る程成る程。

「死んでも嫌だねクソッタレ」

そう言って首領の顔に唾を吐きかけてやつた、ウォーターブレイドを解除してカトレアに杖を向ける。

「エアーアーマー！」

一瞬で込められるだけの魔力を込めて風の鎧をカトレアに纏わせる、これで三時間は手を出せまい…

三時間もすればヴァリエール領に近いここならカリーヌがカトレアを助けに来る……つてしまつた、俺が助かる方法考へてなかつた。

「ちつ、もういい…お前を殺して逃げるとする」

マスケットの銃口が俺の額に突き付けられる、なんとかならないか？

ならないな、くそつ。

「エアカツター！」

背後から凜とした少年のような声が響き首領の首が飛んだ。

「エイブラハム、よく持ちこたえたな」

声の主は古臭い騎士服を着ていた、飛びかけの意識の中見上げるとその人物はニッコリ笑つた。

「後は僕に任せろ」

その人物は最近の俺のトラウマ、烈風のカリンその人だ。問答無用で無理矢理繫ぎ止めていた意識を手放した。

「う、うう…」

頭が割れるように痛み強い喉の渴きを覚えた。

「エイブラハム！」

目を開けると真っ黒な隈を作った親父が俺の顔を覗き込んでいた。「よかつた…目を覚ましたか…父さんをあまり心配させないでくれ」「あ、ああ…ごめん」

親父から話を聞くに俺はあれから一週間眠っていたらしい、ある程度話をしたら親父は少し休めと言い残して部屋を出ていった。

「…くそつ！」

親父がいなくなつたのを確認してから壁を叩く、カリーヌが来なければ俺は死んでいた、カトレアも酷い目に合わされていた。

「何が…何が英雄だ、何が剣聖だ…今のままじや人つ子一人守れやしない！」

子供だからは言い訳にならない。

「しつかりしやがれエイブラハム…！俺はあの時誓ったんだろ…！…もう誰も死なせないと…全てを守ると…あいつに誓ったんだよ…！」

忘れもしないあの日…俺は…最愛の女を殺した、最愛の女も俺と同じ平和を作ろうとしている者だった。

だが俺は悪党を全て殺害して平和を作りうとし、あいつは全ての悪党を構成させようとした。

だがあいつは悪党達に裏切られ続け最終的にはマッドサイエンティストに化け物に変えられてしまった。見るに堪えなかつた俺は彼女を…殺害した、彼女は化け物になり理性が消え去る前に俺に手紙を残した。

貴方に殺される前に一つだけお願ひがあると…そう書いてあつた、次は大切な者を助けられるように強くなつてくれと…

「す……は……」

高ぶつた感情を抑える為に息を吸つては吐く、そして壁に頭を叩きつける。

「…やるぞ」

せめて親父にあんな顔をさせない程度には強くなる、そう決めて

俺は剣を引っつかむ。

ハーローク・子供と父親（前書き）

読むのに一分からなによ、短すぎるとよ

「親父、話がある」

体の傷を癒し調子を整えた俺は親父の書斎を尋ねていた。

「ああ、いいよ。ちょっとテラスに出ようか」

眼鏡を外した親父は相変わらず優しく微笑んでくれる、あの事を言つたらどんな顔をするだろうか…やはり悲しむか、それとも疑うかだ。

外はいい天氣だ、まだ冬だと言つのに暖かい、テラスに出た俺達は丸テーブルにお互い腰かけた、親父は楽しげに外の景色を眺めている。

「親父に話しておきたい事がある…実は俺…」

「ゴクリと唾を飲み込み俺は別の世界からの転生者である事と前世の記憶全てを受け継いでいる事を話した。

「そうか。よく話してくれたな」

全てを聞いても親父は相変わらず一ツコリ笑うだけだった、ほつとしたようなガツカリしたような…

「まだ何か話したいんだろうエイブラハム、お父さんが全部聞いてやる」

俺は本当に幸せな家庭に生まれた事を噛み締めて口を開く。

「俺修業の旅に出たい」

「ダメだ！」

親父が初めて俺の前で声を荒げた、まさに鬼気迫る表情だ。

「どうしても行きたいのなら私を倒してから行きなさい！」

そう言って俺の前で両手を広げる親父、俺は悲しくなるのと同時に嬉しくなった。

心配してくれている、妹のシエスタより…この俺を一番に考えてくれる、前世での両親は俺が五歳の時に殺されてしまった。

「わかったよ親父、今回は諦める」

反対される事は当たり前だった、ただ親父には俺が旅に出たいと言つ事を知つて欲しかつただけだ。

そういうと親父はホツとしたような顔をして椅子に座り直し紅茶を美味そうに啜つた、俺は諦めたふりをして夜を待つた…ただひたすらに…

「よし、こんなもんか」

背負い袋に着替えと自作した燻製や干し肉などを突つ込み背負う、洗濯などは魔法で出来るから暫く新しい着替えは必要ない…ショーツソードを左腰に杖を右腰に注して俺は自室の扉を開ける。

足音を殺して歩き途中にある親父の部屋の扉の隙間から手紙を二通差し入れて俺は玄関に急ぐ、他の貴族と比べると手狭な玄関には俺がはきなれた靴と…その上にエイブラハムへと書かれた紙が張り付けられた袋が置いてあつた。

紙には名前以外何も書かれていないが、袋の中にはたんまりと信用度の高いエキュー金貨が詰まつていた…目頭に熱い物が込み上げて溢れる。

（なんだ、全部お見通しつて訳かよ親父…）

親父に感謝しながら金貨を背負い袋に押し込む、目を擦つて前を見る。

「ここまでお膳立てして貰つたんだ、必ず、生きて、強くなつて、家に帰る、！」

俺は旅立つ、強くなる為に…再び全てを守る力を得る為に…

ペローグ・子供と父親（後書き）

これにて幼年期編終了です
エイブラハムの修業時代の少年期編は外伝に取つておきます、次か
ら怒涛の青年期編：原作からのズレが強くなります

第一章・第一話・ぴつかぴかの一年生（前書き）

攻略ヒロインはバンバン増えます

第一章・第一話・ぴつかぴかの一年生

「あ、ーだるい…」

ここはアルビオン国のロサイスと呼ばれる港街、ここはまだ王国軍の領地である為元王国軍傭兵の俺はまつたり過ぐせる訳だ。

「待たせたなエイブラハム」

金貨の袋を一つ抱えたアニエス…俺が旅立つて間もなくダンブルテールで知り合つた女友達だ、後にダンブルテールの虐殺の被害者の一人と言えよう…俺達はその実行部隊の隊長に助けられた。確か名前はジャン・ゴルベルとか言つてたかな…

「あいよ、そろそろトリステインに向かうか」

金貨の袋を受け取り鞄に詰めながら俺は呟く。

「わ、私も行くぞ！」

アニエスに聞こえたようでアニエスは必死にアピールした。

「…アニエス、だから言つたろ？俺は魔法学園に入学する為に行くのであつてなあ…」

ここでお別れだと話してあつたはずなのだが…かと言つてアルビオンに残つたらアニエスは死んでしまうと思つから別の所に行くよう伝えてあるのだが…

「…暫くトリステインで仕事を受けるから平氣だ」

なんの為に？

つてそうか犯人探し…

「やあ君達、また揉め事かい？」

「ようウエールズ、そんな訳ではない」

ウエールズ・ド・アルビオン、太陽のような金髪と白い歯が眩しいイケメン、レコン・キスターと名乗る反王国軍が蜂起した場所に居て俺に助けられたマヌケな友人だ、名前からわかるように王子様だ。「しかし君が居なくなるとは悲しいよエイブラハム、アニエス…せつかく腹を割つて話せる友達が出来たのに…」

見てるこっちが申し訳なくなる程にしょげるウーハルズ、俺はそんな姿に苦笑する。

「何、お互に生きていればまた会えるさ。今度は要塞の司令室じゃなくてそこらの酒場でエールを飲みながら馴鹿話しそう」アルビオンは戦時中だ、だからこそ次に会つのは戦場ではなく平和な街を指定しておく。

「ああ、君達も元気でな。結婚式には呼んでくれーさらばだー」そう言ってウーハルズは王子様オーラを撒き散らしながら駆けて行つた。

結婚式ってなんだ？

「なんの話をしているのやら…なあアーニ…H…ス？」隣でアーニエスが燃えていた、いや燃えているように真っ赤になつていた。

「…アーニエスさーん、戻つてらっしゃーい」

揺さぶるが完全に固まつてしまつて、アーニエスつてこんなに初なんだな…確かに俺が街の娼婦に引っ張られそうになつた時娼婦を切り殺そうとしたつけか。

仕方ないのでアーニエスを抱えてフネと呼ばれる飛空艇に乗り込む、結局アーニエスはトリステインに到着するまで固まつたままだつた。

「エイブラハム！」

港街の外で自分の馬に鞍を取り付けていたアーニエスに呼び止められた。

しばらくここで仕事を探すつて言つてたから街の外に用はないはずだがな…そんな事を考えながら振り向くとアーニエスの顔がめつちや近くにあつて…

「ち、ちか…むぐつ！？」

こきなりキスをされた、俺の首に自分の両腕を回してきつく抱きしめるようにキスをするアーニエス、十秒程唇を合わせた後アーニエスは名残惜しそうに唇を離した。

「……」

俺は口を鯉のようにパクパクさせるだけで声が出ない。

アニエスは俺に指を突き付ける。

「お前の事諦めた訳ではない！必ず奪いに行く！忘れるなよ！」

そう言つてアニエスはぴゅーっと走つて行つてしまつた、なんか
キヤーとか言いながら。

唾を飲み込みようやく声が出るよになつた俺は：

「その台詞、普通は男が言うもんじゃねーの？」

突つ込みだつた、もう頭の中こんがらがつて突つ込みしか出なか
つた…ちょっと自分に自己嫌悪した。

タルブまで一時間の道程、俺は唇に残る感触に顔を赤くしながら
馬を突つ走らせる。

… そういうや俺つて恋愛したの前世でも一人だけだつたよね、虚し
い。 深く落ち込みながら我が家たるタルブ辺境伯の屋敷に入る、
懐かしい… 10年ぶりか。

「お兄様ーー！」

昔のような甲高い声ではなくしつかりとした大人の女性の声とな
つたシエスタが… 残像を残しながらこちらに接近してきていた。
「会いたかったです！」

「おぶろつーー？」

我が家敷居を跨いで12秒で再び外に弾き出されてしまつた、
つーかシエスタよ… そのスピードとパワーはなんだ？ 厚さ1サ
ントの超々ジユラルミン甲冑に輝が入つてゐるんだが…
ちなみにサントとはハルゲニアの単位の一つである、距離等を計
る時に使われる、サントはセンチ、メイルはメートル、リーグはキ
ロメートルだ、所詮メートル法の呼び名を変えたに過ぎない。

「お兄様です… 本当にお兄様です！」

シエスタはスリスリと俺に体を擦り寄せてゐる… そして俺の腹の
上でふにゅふにゅと形を変える胸… か、彼氏とかいたりしないよ
な、お兄ちゃん泣いちゃうぞ。

「ただいまシエスタ、綺麗になつたな」

すつと頭を撫でてやるとシエスタは更にきつく抱き着いてきた。

「お兄様もかつこよくなりました！」

そらそだ、何しろ俺はこの世界でも異能者として生まれている、見た目は絶世の美男子だ…見た目だけは。

「そろそろいかシエスタ、親父の顔を見たい」

「はい！お父様も首を長くして待っていますよ！」

シエスタはグイグイと俺の手を引く、おいおい…そんなに力いっぱい手を引くと…ほら、俺の左手が取れた。

「お、お、お、お兄様…なななな…なんで手が…」

シエスタが俺の左手と言つか腕一本を持ち上げてブルブル震えている。

「アルビオン戦争に参加していたのは知つているだろ？？」

「コクコクとシエスタは何度も首を縦に振つていてる。

「敵に俺と同じ位強い奴が居てな、吹つ飛ばされてどつか行つちまつたから義手にしたんだ。ほれ返せ」

シエスタから左手を受け取り肩に嵌める、カチヤツと金属音がして義手が動くようになった。

「お兄様！」

あれ？なんかシエスタが怒つている…どうしたんだ？

「なんで…なんでそんな…うえーん！」

怒つたと思つたら泣き出した、思春期かな…とりあえず俺は領民達の冷ややかな視線を浴びながらシエスタを宥め始めた、一時間程で泣き止んだシエスタはゆっくりと立ち上がり俺に背を向けた。

「お兄様がそんな人だつて言うのはわかつていました、お父様に会うんでしょう？着いてきて下さい。」

不機嫌なシエスタの後ろに着いていきながら首を傾げる、どうした生理か？

勘のいいシエスタから蹴りを貰い大理石の壁に減り込んでから再び歩き出す。

「あ、エイブラハム！」

「…お、エルザじゃないか、まだちんまいなお前は」

近寄ってきたちんまい女の子、名前をエルザ…青い髪の女の子に殺されそうになつてている所を助けたらどうやうコイツは吸血鬼らしい。

青い髪の女の子はタバサと名乗つた、タバサいわく「コイツは血を吸つから殺さないといけないらしい、エルザはいわく血はご飯だから吸わないと死んじゃうらしい、だから答えをやつた。

吸血鬼は吸血じゃなくても平氣だと、俺の世界にも吸血鬼は居た、みんな別に血を吸つてはいなかつた…トマトで代用出来るのだ、別段血を吸う必要はない。

と、言うわけでタバサにタルブ領にエルザを送り届けてくれるよう頼み別れた訳だ。

「ちんまくないよ、私はこれが普通なの」

「ああ、『じめん』『めん』」

頭を撫でてやるビジトーツと見つめられた、そんなに見つめられたら…悔しい…でもびくんびくん…クリムゾン「」にも飽きたからまた手を離してエルザと別れる。

「お兄様、言おうと思つていた事が多々ありました」

シエスタまでもジト目になつてている。

「いろんな物を旅先で拾つてくるのはやめてください、ドリドンとか吸血鬼とか生きている「」とか」

だつて知り合つちやつたら見捨てる訳には行かないし…

「言ひ訳考へない！」

「マムイエスマム！」

「よひしー」

一ツココと笑つたシエスタにほつとしながら更に先に進む、着いた場所は親父の執務室…シエスタがノックもせずに扉を開いた。

「お父様！お兄様がお帰りになりました！」

「ああ、窓から見ていたよ。おかえりエイブラハム…大きくなつたじゃないか」

大分老けた親父が前と変わらない微笑みで迎えてくれた、戦争で深く傷つき冷え切った心に再び火が灯つた。

「ただいま親父…あんたは老けたな」

「ハツハツハ！十年も立てばそうなるさ！…よくぞ、よくぞ帰つてきた…心配したんだぞエイブラハム」

笑つた親父は優しく微笑んでくれた、俺も釣られて笑う…久しぶりに暖かい気持ちでいっぱいになつた。

楽しい時間はとは矢のように過ぎる物で気が付くと外は漆黒の戸張が落ちていた。

「もう夜か、エイブラハム。ささやかだがお前の帰還を祝つて会食を行う事にした。あの方々も来るから久しぶりによく話すといい」

俺は固まつた、あの方々とは間違いなくヴァリエール家と母方の実家であるグラモン家だ。

グラモンの方はいい、だがヴァリエールには幼少のトラウマカリース様がおられる。

小さなルイズがどれだけ美人になつたかも気になるし将来が楽しみであつたカトリアにも会いたい、勿論当時から綺麗だつたエレオノールに会うのも楽しみだ。

三姉妹はよく俺に手紙を書いてくれた、心配する内容、旅先の話を聞きたがる内容…そんな感じだが…カリース様だけは違う、帰つたら覚えておけ、よくぞカトリアを泣かした、褒美をやる、まだ忘れていいぞ、

こんな内容ばかりである、冷や汗がボタボタと垂れる。

「甲冑を脱いで楽な格好で出席するといい」

「あ、ああ…」

歯がかちかちとぶつかり合い音を出す、ぶっちゃけよつ、戦争よりカリースの修業と言う名の虐めのが怖かつた。

懐かしい自室でラフな格好に着替える、震える手でボタンをはめるには苦労したが…殺される事はないと自分に言い聞かせて食堂に向かう。

もーいやだ、中から談笑する声が聞こえないのがいやだ、部屋に帰つて毛布を被つてブルブル震えながら眠りたい。

しかし帰つたらカリーヌの攻撃が更に酷くなるだろうから覚悟して扉を開ける。

- ハンマー ! -

カリーヌの声が響き俺に竜巻のようなエアハンマーが迫ってくる、
いつになく本気である。

（戻れた!!?）

やつちまつた、テン pari過ぎて杖を置いて来てしまつた。

ならばと深く息を吸い込み一口でその息を吐き出す、特殊な呼吸法で体の筋肉のコンディションを完璧にする、手刀を構えて両腕を交差させて風に振る。

三柳交差翼擊！

エアハンマーは四つに分割され俺の後ろの壁を破壊した、エアハンマーを撃つた人物が接近してくる…早過ぎて人影にしか見えない…だが！

手をぬるりと回すように動かした後飛びはねる、人影もそれを追うように跳んで向かつてきた。狙い通り！ 奴の体にある孔をハート型に蹴りで着く。

三柳 雅
舞注入脚！カリーエさん、あなたの体にある孔をハート型に打ち抜いた…いまあなたの体は剥き出しの性感帯に包まれている旨で触れてござります

振り向かずに指で触れる。

「あんつ」

後ろで人影が喘いだ、そこで俺は冷や汗がダラダラと流れる… 力リーヌはこちらを冷え切った目で見ていて、俺の真正面の席だ。

街を廻るのは少々

「カトリア！？」

「んんっ！…い、息を吹き掛けないで…」

急いで背中にある廻孔を突く…あまり強く突いてなかつたからす
ぐに効果は無くなつた。

「な、何故力トレアが…」

「貴様に強くなつた所を見て欲しかつたんだと、しかしボクにそれ
を使おうとしたか」

「背後から本物のカリーヌの声が響く、再び冷や汗が止まらない、
俺脱水症状で死ぬんじゃないか？」

「面白い、使ってみる」

「て、てめえなんかこわかねえ！野郎ぶつこらしたらあーーー…。
結果は言つまでもなく、完膚無きまでボッ「ボボ」にされた。
食堂の片隅で力トレアに治療して貰う。

「久しぶりの再開だつてのにすまんね力トレア…」

「あら、いいのよ。気持ちよくしてもらつたから…」

やはり根に持つてらつしゃる、深々とため息を吐いているヒルイ
ズがちよこちよこと近寄つてきた。

「おお、ルイズか。見違えたな」

「嫌ですわエイブラハム兄様…絶世の美女になつただなんて…」
誰もそんな事言つてねーよ。

「所でエイブラハム兄様、先ほど使つていたミヤナギなんたりとは
なんなのですか？」

先程使つてたミヤナギ…ああ、なるほどじね。

「三柳流爆拳と三柳流斬脚だな、爆拳は相手の体にあるエネルギー
の塊…孔を突いてエネルギーを爆発される拳法、斬脚は素手で相手
を切り裂く拳法だな。どちらも一流の武術だ…見てろ」

パンを鍊金して鉄に変える、そのパンを前にして指を広げ両手を
組み合させて指を網のよつにする、そのまま勢いよく鉄に手を押し
出す。

「三柳千葉下ろし」

鉄がブロック上に切りわけられて机の上に転がる。

「それって三柳流秘伝書の中にあるあれですか？」

様子を見守っていたシエスタが口を開いた、俺は目を丸くした：

「何故シエスタが三柳流を知っているんだ？」

「ああ、私のひいお爺ちゃんが持ってきた本に書いてあるんですよ、ほら…これです」

いつも持ち歩いていたのかシエスタは巻物を懐から取り出した、それを受け取り広げてみる。

「…こ、これは！」

暗黒メイド闘法と書かれていた、阿保らしいと思うだろ？…だがこれは三柳流五大武術の一つだ、つまり最強の一角。

俺が全盛期に唯一負けた相手がこれの達人であつた、俺がシエスタの動きを見切れずに抱き着かれ外に吹き飛ばされた訳がわかつた。「はあ…まあいいや、でカトレアよ。俺つて確か転入するんだよな？カトレアと同じ一年でよかつたつけか？」

「ええ、そうよ。もう年の終わりだけどね。来年はルイズも入学するわ」

名前を呼ばれたルイズは怯えたように竦み上がりカトレアの影に隠れてしまった。

「…なんか前より臆病になつてないか？」

ルイズは俺を見て怯えている、俺自体を怖がっている訳ではなく何かを怖がっている…何かあつたな。

「…ルイズ、言つていいかしら」

「ダメ！やめてちい姉様！」

ルイズの怯えが酷くなつた、まるで信頼する親に零点のテストを見せないでと言つているようだ。

「話してくれよルイズ、なんだ？俺の部屋の物でも壊したか？それなら別段気にするな」

「違うの！…えつとねエイブラハム兄様…私魔法が使えないの…失敗ばかりして…使用人にもゼロつて」

ふむ、と顎に手を当てる、随分おかしな話ではある。

魔法を失敗？ ルイズの魔法は爆発にしかならないがあれは立派な攻撃魔法だ、相手の防御を突き抜ける魔法なんざ使おうと思つて使える訳じやない。

「んー、爆発しなくなつたのか？」

「爆発しかしないの！」

なんでい、それでいいじやないか。

だいたい要因は分かつた、あれを話すべきか否か…ま、適当にはぐらかしながら言つかね。

「ルイズ、いいか。普通魔法を失敗すると……エアハンマー」

杖を壁に向けて振るが何も起こらず魔力だけが減つた。

「僅かに魔力が消費され何も起こらない、だがルイズの魔法は全て爆発する」

そんな魔法一つしかないのだが…まあヒントを与えるだけにしようかな。

「ルイズ、ブリミル関連の書籍を漁るといい。特にブリミルが使つた魔法や作った魔法を調べるといい」

そう言つとルイズは首を傾げた後シュンとなつた、そこまで落ち込む事なのがこれは…

「…いいカルイズ、四系統だけが魔法じやない、証拠を見せよう…グラビティボール」

杖の先から発射された黒い玉は積んである壊れた机にぶち当たり十分の一程の大きさまで圧縮した。

「新属性だつてあるんだ、これは闇属性、重力と腐敗を司る」

停滞した世界では新たな物は驚異となる…ま、関係ないけどね。ちなみにこれが俺が一番向いてる属性だ、凶悪な威力を誇る闇…ただ使うまで長い詠唱を必要とするから…リキャストを覚えなくては。

「それに例え魔法を使えなくともルイズはルイズだ、俺にとつてはそれだけでいい」

ルイズの頭に手を伸ばして撫でる、相変わらずいい触り心地の頭

だ。

まるで子猫を撫でているような感覚で……なんで俺に杖を向けるかなカトリア。

「ストーンスプラッシュ」

杖から発射された小石がビシバシと俺に当たる、痛いってばよ。

「アシッドミスト」

酸の霧を発生させて体を覆う、石は届く前に溶けて消える。

「……ルイズばかりずるいわ」

「ん？なんか言つた？」

「……なんでもないわ」

カトリアはさも不機嫌そうにどこかに行ってしまった、やれやれ生理か？

「お兄様それはないです」

「エイブラハム兄様は酷い人です」

何故か妹と妹分からバッシング……俺なんかしたかい？

「この下郎が」

カリーヌは一体俺になんの恨みが……そんなこんなで俺の帰還パーティーはお開きになつた。

自室に帰りベッドに倒れ込むと直ぐさま心地よい眠りに落ちていつた

第一章・第一話・ぴつかぴかの一年生（後書き）

次は攻略できるヒロイン達の好感度ですね

ルートン・パーク・カレッジ（専修校）

お願いがあります、よろしければ協力をお願い致します

ヒロインずじつかんど

アーネス

好感度：

エイブラハムへの評価：キスしてしまった・次どんな顔で会えぱい
いのだろう…

フラグ：1・ダンブルテールの虐殺2・-・-3・-・-

このままだと迎えるエンディング：BADEND【復讐の末路】

ウェールズ

好感度：

評価：頼りになる友人

フラグ：1・助ける

エンディング：NormalEND【俺達ずっと友達だよな…】

カトリア

好感度：

評価：友達として好き、異性としては…嫌いじゃない

フラグ：1・病気を治す2・-・-3・-・-

エンディング：BADEND【望まぬ結婚】

カリーヌ

好感度：

評価：可愛い馬鹿弟子だが邪悪な臭いがする

フラグ：1・弟子入り2・-・-3・-・-4・-・-

エンディング：NormalEND【免許皆伝】

シエスタ

好感度：

評価：優しく強くカッコイイお兄様

フラグ：1・メイドになる2・森の中でオーケーから助ける3・-・-

4・-・-5・-・-6・-・-7・-・-

エンディング：BADEND【なんで愛してくれないの？】

ルイズ

好感度：

評価：優しく物知りな義理の兄

フラグ：1 . カトリアの婚約者になる 2 . - - - 3 . - - - 4 .
- - 5 . - - - 6 . - - - 7 . - - - 8 . - - -

エンディング：B A D E N D 【サイト大好き！】

エルザ

好感度：

評価：拾ってくれた人

フラグ：1 . タバサから助ける 2 . - - - 3 . - - - 4 .
- - -

エンディング：B A D E N D 【所詮化け物と人】

タバサ

好感度：

評価：邪魔者

フラグ：1 . エルザを助ける 2 . - - - 3 . - - - 4 .
- - - 5 . - - - 6 . - - - 7 . - - - 8 . - - - 9 . - - -

エンディング：B A D E N D 【私の春を買って下さい】

説明

エンディングとはこの好感度、フラグの立ち具合のままそのヒロイ
ンのルートに入つたら起こる事です、フラグが多ければ多い程落と
し憎いと言えるでしょう

ちなみに全てのフラグを立ててしまうとC R A S H E N D になるヒ
ロインもいます、とてつもなく惨い死に方をします

エンディングには
真T r ue E N D

T r ue E N D

H A P P Y E N D

Normal END

BAD END

DEAD END

CRASH END

ちなみにCRASH ENDは原作完全崩壊、迎えてしまつとヒロイ
ン達だけではなくエイブラハムを除く全員が死んでハルゲニアは滅
んでしまいます

さて、読者の皆様に協力して欲しい事がいくつか存在致します。
まず自分が次どうしようかと細かく描[写]して後書きに出すので指定
された安価を書き込んで下さい
読者様参加型と銘打つていただきたいと思います、話は三回ずつ進んで
行きます
ここから始めたいと思います

ヒロインずじつかんど（後書き）

エイブラハム「入学まで後一週間！自由になるのは二日位だな、一日二回まで行動できるだ。さて…どこに行こつか」

現在地：タルブの自宅

滞在者：カリーヌ、カトリア、ルイズ、シエスタ

自宅内の行ける場所（近場のみなら三回行動できる）：城下街、中庭、自室、地下室、ワインセラー、執務室、書斎

領外の行ける場所

トリスターニア（到着までに行動一回消費）

滞在者：アンリエッタ、マザリーニ、ジェシカ、エルザ

着いてから行ける場所：魅惑の妖精亭、王城、スラム街、メインストリート

ロサイズ（到着までに行動二回消費）

滞在者：アニエス、タバサ

着いてから行ける場所：酒場、傭兵ギルド、船着き場、宿屋

エイブラハム「早い者勝ちで一人が決定出来るのは一日のみだ、一日を越したり三回以上行動したり、前の安価と合わなかつたら無効だ、行く場所を書いてくれよ、誰かに会うと書いたら無効だ。それじゃよろしく頼むぜ」

外伝・ダングルテールの悲劇（前書き）

外伝ではアニエスがヒロイン役

外伝・ダングルテールの悲劇

「つと…流石に地図無しは迷うなあ

手に持つた剣で草や樹木を切り払いながら山道を進む、旅に出て一月、遭難を始めて一週間…そろそろヤバイと思い始めた。

俺は水のスクウェアでもあるから水の心配はない…というか綺麗な水がある場所なら容易にわかるのだが流石に食料となると厳しい。ついでに俺の少年あんよが豆だらけだ、いくつか豆が破けて血が出ており靴の中がヌルヌルして気持ち悪い、由々しき事態である、女に変装出来なくなつてしまつ。

「ん…？」

阿呆な事を考えて孤独感を薄めていると鼻が何かの匂いを捉えた、頭脳はイースト発酵した小麦粉を焼いた匂いと答えを弾き出したつまりは…

「街だ！イヤツホーイ！！」

匂いのする方向に奇声を上げながら走り出すと狙つた通り街が見えた、近くに看板も立つて、ダングルテールにようことそー、そ

うハルゲニア語で書かれていた。

背負い袋を担ぎ直して傾斜を滑り降りる…高山の街だけあってか木製の家が多い、いや観光は後にしてまずは宿を取ろう。

後は仕事でも探すかな、こう言つた場所なら臨時の樵の仕事位ならあるだろう。

そこまで大きな街じゃないので宿屋はすぐに見つかった、宿屋ミラ

ンそれが宿の名前らしい…

扉を開けると扉に括りつけられた鈴が心地よい音を奏でた。

「いらっしゃいませー！お客さんですかー！？」

金髪の切れ長の目をした活発そうな女の子がそう尋ねてきた、俺と同じ年だろうか。

「うん、宿を取りに来た」

「おとーさんーーーお客さんーーー！」

少女は後ろのバックヤードに向かつてそう叫んだ、お客さんは俺であつてあなたの親父さんはお客さんじやないつてシシコリは無しだな。

「怒鳴らなくても聞こえてるよアーネス…いらっしゃい、ボウヤ一人かい？」

宿屋の主人であるおつさんは笑顔でそう尋ねてきた。

「うん、旅の途中でね。ここは一晩いくら？」

「一晩3スウ6ドーハ、食事は一食1スウだ。泊まつていいくかい？他に宿はなかつたし…まあ対して高くもないから泊まつていいくかね。

「うん、夕食付きで一週間頼むよ」

纏めて金を払うとおつさんは満足そうに領き鍵を渡してきた。

「アーネス、この子を部屋に案内してあげなさい」

おつさんはそう言つてニッコリ笑うと奥に引つ込んでしまつた

「はーい、私ねアーネスつて言つのー君のお名前は？」

「ハーハーハ笑うアーネスを見て苦笑しながら右手を彼女に伸ばす。

「名前はエイブラハム、旅のメイジだ。よろしくな」

彼女は右手を見てパツと顔を明るくした、キツイ感じの顔をしているが笑うと大分かわいらしい。

「うん！えっとね、着いてきて！」

子供らしく駆け出した彼女は階段の前で止まり手招きをしている、思わず頬が綻ぶ、シエスタもあんな感じだつたかな。

「ここがエイブラハムの部屋！」

案内された先は個室だった、日がよく当たるように作られておりついでに風も抜け安い工夫をされている、夏場でも涼しそうだ。

「ああ、ありがとうアーネス。これチップな、今回だけ大サービスだ」

10ドーハ硬貨を渡すとシエスタ…じゃなくてアーネスは顔を輝かせた。

「ありがとう！」

そう言つてどこかに駆け出していくアニエス、何か買いに行つたのだろうほほえましい。

服を脱いで水魔法で体を洗い新たな着替えを取る、若草色のチュニックに着替えてベッドに寝転ぶ…しばらく歩きつぱなしだつたら疲れた、今日はもう眠つて明日にでも行動を開始するか。

「エイブラハムー！ご飯だよー！」

扉が勢いよく開かれた、アニエスは手にパンとシチューと川魚を焼いた物を盆に乗せて持つてはいる。

アニエスの奴俺を犬か何かと勘違いしてないか？

「ああ、いただくよ。テーブルに置いてくれ」

ちよいちよいと組んだ足でテーブルをさす、アニエスはその反応を見て顔を膨らませた。

「お行儀が悪いと始祖ブリミルがお仕置きに来るんだよ」

「おーそら怖い、それじゃ頂くとしますかね」

テーブルの前に置かれた食事の前で手を組み、自然と星に感謝する。

え？命を捧げてくれた魚への感謝？何言つてんだお前…捧げてくれたつてどんだけ高慢なんだ、コイツが焼かれて食われるのは捕まつたコイツが悪い、弱肉強食、強くなければ誰かに食われる…勿論俺も、その覚悟があれば別段捕まつた間抜けに感謝はいらん。

俺が感謝するのは命を育む星に大してだ、そして自然に敬意を払う、少なくとも自然はなくてはならない物だからな。

「おつこの魚美味いな…つてこれピラニアじゃないか…こんな寒い所にも居るのか…」

後で調べる必要がありそうだ、何かしら川に異常があるのだろう…何しろここにはまだ雪が積もる位には寒いのだから…

ちなみにピラニアとラザニアは無関係だ。

食事を堪能してから空になつた器を重ねて外の食器引き取り口に出しておく…腹も膨れたしとつとと寝るかね。

食べて寝る事は人類の至高の楽しみなり……と言つのは言い訳で体力が少ないから疲れているのだ。

「だから漂白剤は食べられないってば！」

自分でもさっぱり訳のわからない寝言で目覚めてしまった、確かに漂白剤は食えないが……それを食べる、或いは食べさせられる夢なんてどうやって見ればいいのやら……その方法を頭脳が弾き出したが無視する。

「んー……いい朝だ。」

鳥が囀り朝日が窓から差し込んでいる、ひとつと服を着替え剣を担いで下に降りる。

「おはよーエイブラハム」

「おうおはようさんアニエス」

小さな体で一生懸命簞で掃除しているアニエスに会った、どうやら宿屋の主人は仕入れに行っている様子だ。

「エイブラハムは今日何しにいくの？」

簞を動かしながらアニエスはそう尋ねてくる。

「病人や怪我人を格安で助ける、せめて飯代やら宿代位稼がないと

……

「あら偉いのね」

聞き慣れない声に振り向くとエプロンを着けた柔軟な女性がこちらを見て微笑んでいた。

「大人版アニエス？」

思わずそのまま口に出てしまつた、アニエスが大きくなつたらこんな感じであろうを具現する女性であつた。

「まああなたがち間違いじゃないわ、私はアニエスの母親のミランよ。よろしくねボウヤ

しかし夫婦揃つてボウヤ呼ばわりか……まあ俺は今ガキだから仕方ないんだがな。

「私だつて大人だよ」

アニエスがなんか言つてゐるが無視する。

「それじゃあそろそろ行つてきます

「はい、いつてらつしゃい」

「いつてらつしゃーい！」

そつくりな親子に見送られて街に出る、困つている人間を幾人か救つた後謝礼を貰い近場の森に行く。

さて三柳流秘伝書は頭の中に全て入つていて、徒手空拳を身につければ…

そんな感じで修業しつつ日々を過ごしていた、一週間たつたある日俺は旅立つた。

体も十分休める事も出来たし保存食の補給も出来たとホクホク顔で山を下りていた、街からは既に10リーグは離れたであろうか、沢で休憩していると誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。

助けてエイブラハム！ - -

街が燃えてるの！助けてエイブラハム！ - -

アニエスの悲鳴が頭の中に響いた、いやいやもう俺には関係ない一期一会の間柄だ。

悪いメイジが街を燃やしてる！近所のお爺さんが… - -

「あー！もー！待つてろよアニエス！！」

どうやらアニエスは俺にとつて大事な友人の一人になつていたらしい、地面を強く蹴りダングルテールへと急ぐ。

一度見捨てようとした事は謝ろう、だが一度救うと決めたなら俺は必ず救う…救つてみせる。

20分ほどかけてダングルテールに到達したが酷い有様だ、火のメイジで編制された部隊が街を焼いている、人の焼ける臭いが辺りに充満している。

とりあえず部隊の奴らに見つからないようニアニエスの元へと急ぐ、下手に戦うよりはこちらのが早い。

「そーらお嬢ちゃん逃げな逃げな！」

屋根の上からアニエスを見下ろすと巨漢がアニエスに向かつて炎を撃ちまくっている、俺は水の魔法を唱え始める。

「あつ……！」

「アニエスが転んだ、やばい…早く唱え終われ！

「残念だつたなお嬢ちゃん！ファイアボール！」

巨漢のハンマーのような杖から無数の火球が発射された。

「させるかベール！！」

アニエスの回りに水の薄い膜が球体状に張られファイアボールを消した。

屋根から飛び降りて巨漢の顔面に飛び膝をかまし、反動を利用して宙返りしてアニエスの前に立つ。

「助けに来るのが遅くなつた、ごめん」

先に謝る、そうしてから振り向いて笑つて見せる。

「後は任せろ、俺が君を守るから。もつ傷一つつけさせないから！」

倒れていた巨漢がのつそりと立ち上がる、巨漢に杖を突き付ける。

「小僧…貴様何者だ？」

まるで歓喜に打ち震えているような感覚を巨漢から感じた。

「何者？通りすがりの元ヒーローか？」

「英雄ごつこは余所でやんな！」

巨漢の杖から再び炎が噴出する。

「悪いな、英雄ごつこじやないんだ」

風を上に吹き上げさせて炎を反らす、奴が呆気に取られている内に強く地面を蹴り肉薄する。

「くらえ！」

両手で奴の腹にある孔一つを同時に点ぐが…

「そんな物きかん！」

分厚い筋肉に阻まれてしまいカウンターに蹴りを喰らい吹っ飛ばされ燃え盛る家屋を突き破る。

ズキンと背中が痛んだが今は気にしない、背中の孔を突いて痛覚神経を遮断する、ついでに剣を引き抜き構え自分の体に活性の呪文を叩き込み筋肉のパワーを限界まで引き出す。再び家屋を突き破り巨漢に接近する。

「アイアンテンペスト！」

「……シールド！」

貯めていた力を解き放ち剣をめちゃくちゃに叩きつける、敵に叩きつけられる剣の雨はまるで鉄の嵐である、巨漢はそれを受けて石の壁に叩きつけられた。

無茶をした反動で腕の筋肉が皮膚が裂けて体を赤く染める。

「やるじゃないか元ヒーロー！」

巨漢はさも嬉しそうににんまりと歯を見せて笑つた、俺が顔をしかめると同時に限界を迎えたロングソードが音を立てて砕け散つた。「だがもう終わりだなあ……」

そう言い放ち、得意げににんまり笑う巨漢。

「最後に教えてやる俺はトリステイン魔法実験部隊の副隊長……名前は……」

「あー別にいらんよ、お前もう死んでるし」

「何？」

ゆつくりと立ち上がり親指を立てて首を搔き切る真似をした後指を下に下ろした。

巨漢にゆつくりと赤い線が大量に…そして無造作に入りバラバラと崩れ始める。

「テメエのような肩にこそその死に様は相応しい、墓標も無く名前も無く…誰に記憶される事も無く死んでいけ」

「い、嫌だ、人を…人をもつと燃やして俺は…あ、あああああああ！」

ただの挽き肉になつた巨漢を一瞥してアニエスに向き直る。

「大丈夫かアニエス」

「エイブラハム…お父さんとお母さんが…」

ベルを解除しアニエスの肩に手を置き首を左右に振る、言わなくとも理解している…この街からもう助けを呼ぶ声は聞こえない。

「アニエス、君はどうする？俺は街を出て世界を回る…君一人なら養つていけると思うけど……辛い旅になるかもしれない、とりあえず

ず新たな街には連れていく…その街で平和に生きるのもいいし俺に着いてくるのもいい…好きにしなよアニエス

まだ子供のアニエスにはどちらを選んでも辛い選択になるだろう。

「着いていく、私はお前に着いていく…剣を教えてくれエイブラハム…父と母の仇を…ダンブルテールの恨みを私の手で晴らす」

この一瞬でどれだけ考えたのだろう、この虐殺でどれだけ地獄を見たのだろう、子供っぽさが消え目には憎惡の炎が灯り口調すら無骨になっていた。

「…君がそう望むなら、俺はそうしよう」

復讐を止める事は出来ない、旅の中で復讐は無駄と教えるしかない…

こうしてアニエスと俺はダンブルテールを旅立つたダンブルテール内で実験部隊の隊長であるコルベールと出会い次の街まで保護して貰つたりもした、アニエスは今は力がないからかコルベールを見つめるだけだったが…いつか復讐してやると目が爛々と輝いていた。

外伝・ダングルテールの悲劇（後書き）

外伝は安価ないよ、一章の安価をよろしくね

第一話前編・シヒスタと中庭（前書き）

もじけえ…

ちょっと読者様に聞きたいのですがみんなで選んでルート決めるの止めた方がいいですか？

つってもそつすると俺BADEND書きたくなつちやうんですけど…リア充爆発しろが座右の銘ですから

どうか感想に答えをお書き下さい、みんなで行動決めるのって時間掛かりすぎるんですね

「ふあああ〜〜ふ…眠い」

朝起きたばかりでそんな事を言つ、あれだよね、寝起きの心地良い眠気つてなんかいいよね。

一度寝したくなる気持ちを抑えて服を着替える、体内時計が今は午前5時であると教えてくれている。

「ふあああ〜〜ふ…」

さつきから欠伸が止まらない、鏡の前に立ちアチコチにシンシンと伸びている髪の毛を見てげんなりする。

前世からこの髪の毛はそうなのだ、水に濡れようがハードジェルで固めようが決して寝ない髪の毛、根性有りすぎである。

「あふう…」

欠伸を噛み殺しながら体を伸ばす、ちょっと不安になる位背骨が鳴る、不安になりながら朝食までどうじょうかと考えながら適当に館内を練り歩く。

ここは十年経つても変わつていい、俺とシエスタが落書きした壁紙もそのままである、一人でメイド長にこつぴどく叱られたのを思い出してクスリと笑つた。

「おつ、この壺まだあつたのか…ハハハ、轍もあんときのまだ」
カトレアが遊びに来た時転んで割つた壺、一人で焦りながら直しだ覚えがあるが…結局親父にばれたが親父はこれでいいデザインだと笑つて許してくれた。

懐かしさに頬を緩ませながら歩いていふといつも中庭に来てしまつた、朝だからか誰もいない。

中庭にある巨大な石碑…これは東のタルブ村…シエスタの故郷の墓だ、ここに全ての遺骨が眠つてゐる。

シエスタの村はまず疫病に襲われた、ガリア風邪…つまりはインフルエンザに、インフルエンザだけならまだ良かつた…いやそれで

も村の半数が死に絶えたが…その後野盗の集団に襲われたらしい、俺の屋敷に辿り着いたのはシエスタの姉とシエスタだけだった。

シエスタの姉はインフルエンザなのに無理をしてシエスタを俺の家まで運んでくれた、彼女も家のメイドをやっていてくれたがお金が貯まると城下街で店を借りてパン屋をやっていた。

中々に安く美味しい店だった…話が反れた、親父が領軍を引き攣れて村にたどり着くとそこには野盗どもしかおらず村人は全員が殺害されていたらしい。

村人の遺体を焼き骨にしてここまで運んだ訳だ、これはシエスタの親父さんとお袋さん、そして兄弟達の墓もある。

「シエスタの親父さん、シエスタは元気でやっているよ。結構綺麗になつた、あれなら嫁の貰い手も沢山いるだろ?」

慰霊碑の前で手を合わせてそう言つ。

「だが…これで良かつたのか?」

…やはり聞いても墓石は答えちゃくれない。

「良かつたんですよ」

「うおう! ? シエスタ!」

背後にシエスタが二口二口笑いながら立つて…気配が全くしない、恐るべし暗黒メイド…

「驚きましたか?」

「うん、死ぬ程」

そう言つとシエスタはケラケラ笑つた、俺も苦笑で返して慰霊碑の石段に座り自分の隣を叩く。

「よいしょ」

俺の意を察してくれたのかシエスタは隣に座る。

「いい天気だな」

空を見上げると雲一つない、快晴と言つ奴だ。

「そうですね~ 東方のお茶が飲みたいですね、確か緑茶でしたつけ?」

「ああ、俺がお土産で送つた奴か…まだあつたかな」

砂漠の方に旅立つた時に助けたエルフの女の子から貰つたのだ、人間の人掠いに捕まりそうになつていていた所を助けた…砂漠＝荒野＝北斗なんたら拳に似ている三柳爆拳で。

お前はもう死んでいるとか言つちゃつたなあ…

「そういえばお兄様！」

俺が黒歴史を思い出しているとシェスタが立ち上がって目の前に立つた、目がキラキラしている。

「私も強くなつたんですよ！カリーヌ様に勝てる位に！」

妹よ、お前は一体何者だ。

「少しはお兄様に近付いたと思ひます…ですから一度手合わせしましょう！」

ニッコリ笑つたシェスタは顎を引き体の前で手を組んだ、暗黒メイド闘法の伝統的な構え方だ…暗黒メイド闘法は使い手によりがらりと性質が変わる…俺も立ち上がり地面から身の丈を超える幅広の片刃の巨大な刀を鍊金する…勿論刃はない。

「来い！」

「はい！」

すつと足を引いたシェスタの体が消えた、もう既に目で追えない速さだ…ならば目を閉じて気配を頼りに剣を振る。

「おつと、やりますねお兄様」

「…うん」

巨大な…鉄塊と言えるサイズの剣が軽々とハンガーで…しかも片手で抑えられてしまつた。

何このチート妹。

「でも手加減し過ぎですよ」

そう言つてニッコリ笑つたシェスタは鉄塊をハンガーでバターをゆっくり切るように切り始めた。

「…うそーん」

固定化をかけていないとは言え…木製のハンガーで鉄を切るとか

…いや俺も出来るけど…シェスタがねえ…

「あ、隙あります」

シエスタの姿が再び消えて俺の体にそよ風が当たつた。

気配は後ろか！…か、体がピクリとも動かない…

「暗黒メイド闘法【大人しくして下さいご主人様】」

いやいや…なんだその技名は…暗黒メイド闘法なら使い手を知つているがそんな技使ってこなかつたぞ…。

「ご主人様を思う気持ちから雷を生み出してお兄様の神経に流しました、貴方はもう動けない」

名前が負けてる！？ 名前よりずっと恐ろしい技だぞコレ！ 名前勝ちつて奴なのか、これが噂の名前勝ちつて奴なのか…！

「お兄様なら堪えてくれますよね？」

口を開こうにも開けずに返事が出来ない、シエスタはゆらりと構えを取つた。

「暗黒メイド闘法奥義！【メイドカー二バル】！」

なんだよメイドカー二バルつて、祭りじゃないか。

そんなツツコミを頭の中でしているとシエスタが俺に抱き着いた、どういう事なの。

「せめて天国を見て…それでは、逝つてらっしゃいませご主人様」すつと恭しく礼をしたシエスタを見て頭の中は疑問符だらけだ、突如視界に大量のメイドさんが映つた。

皆見目麗しく楽しげに仕事をしている、そして全身に衝撃が走つた、メイドさん達が殴り掛かってきてる…勿論かわせずに俺は攻撃を受け続け遙か上空まで飛ばされ地面に叩きつけられた。

「グブホオア！？」

もう訳がわからない…拘束はとけたようで口口口口と立ち上がれた。

「流石お兄様…カリーヌ様を破つた奥義すらも受けりますか」

そこまで言つて得意げに笑うシエスタ、両手をパンと叩いて…

「じゃあここまでにしますね！」

と笑顔で言い放つた、えーっと…

「俺ボコボコにされただけじゃないか…」

酷く悲しい気分になりながら鼻血を啜る、泣きそつになつてきた。
「心配をかけた分です、カトレアさんルイズさんカリーヌ様お父様
エレオノールさん…そして私の分の痛みですから……凄く…凄く心
配したんですからね！」

急に怒られた、確かにシエスタ達には何も言わずに旅に出た…だ
がシエスタとルイズはともかくカリーヌやカトレア、エレオノール
も心配してくれたのか。

俺でつきり三人には嫌われている物かと…

「その…悪かった、心配かけてすまん。俺はもう何処にも行かない、
シエスタに寂しい思いなんかさせない」

「…約束ですよ」

「ああ約束だ」

そう言つて笑つてみせた、シエスタは嬉しそうに微笑み俺に抱き
着いてきた。

昔からシエスタは甘えん坊だな…まったく、兄冥利に尽きるじや
ないの。

第一話中編・ルイズのひ・み・つ

シエスタと別れて再び俺は館内をブラブラと歩く、ビルにこうか…どこがいいかな。

そうだ書斎へ行こう、新しい本が入っているかもしれないし暇を潰すには持つてこいだな。

書斎の扉を開けると見覚えのある幼女が本に向かって一生懸命伸びをしていた。

後ろから目的であるう本を取つてやると幼女はゆっくりと振り向いた。

「ようエルザ、この本でいいのか？」

本を差し出してやるとエルザは頷いてそれを受け取つた。

「ありがとう、貴方が字を教えてくれてから本を読むのが楽しいのよね」

別にそんな事は聞いてなかつたが一応氣のない返事をしてイーバルディの勇者を取つて適当な椅子に腰掛ける。

「よいしょよいしょ…」

「…………」

エルザが一生懸命俺の膝に乗ろうとしている、確かに俺は今身長が2メイルある…登り難いのは解るがそもそも俺は登る物じゃない。

「よいしょ…ふう…」

「ふうじゃない、何俺の膝を玉座の如く占有してやがるかお前は

「いいじゃない」

頬をタコのように膨らませるエルザ、これはこれで大分可愛らしく。

「最近はよくシエスタとかお父さんとかの膝で本を読んでるの」

親父の事だ、新しい娘が出来たと喜んで膝に乗せ始めたのだろう、そういえば出会つた頃よりエルザは背が伸びている…本当に吸血は止めたのだろう、吸血鬼は吸血を止めるときを失い成長…つまりは

老化を始める。

人間として生きる事を選んでくれたと言ひ訳か、いい子だ。

「その…人の膝の上つて暖かくて…その気持ちよくて…ねえいいでしょ？」

エルザが上目使いでこちらを見てきている…うーん、幼女に上目使いされてもなあ…

「ま、いつか、好きなだけ使え」

「わーい」

やる気のないわーいとか初めて聞いた、エルザは俺の胸に頭を寄せて絵本を子供らしいワクワク顔で読み始めた。

タイトルは「マツチヨ売りの老女…え？ 何ソレ？」

話の内容を見るに巨大なババアがマツチヨな男達を使つて世界を侵略する物語で最後になるとマツチヨな男達とババアが戦いを始めて…ダメだ酷すぎて見ていられない。

「はあ…どうなるのかしら…」

本を閉じたエルザは更にワクワク顔になつていた、何がそこまでエルザを駆り立てるのだろう…筋肉か？筋肉なのか？

「ねえエイブラハム」

エルザがこちらを見上げながら名前を呼んだ。

「なんだ」

「貴方確かに異世界から來たつて言つてたわね」

「正確には異世界から転生した…な」

エルザは何かを悩みはじめ覚悟を決めたように口を開いた。

「エイブラハムの前世、話してよ」

珍しいな、親父もシエスタも俺の前世には興味すら示さなかつたと言つのに…

ま、話してやるか。

「俺は有り触れた異能者家庭に産まれた、愛されて…」

「ストップ、異能者って何？」

そう言えばエルザは異能者を知らなかつたな…

「異能者つつーのは骨格が金属で出来てゐる知的生命体だ、人間なんかと比べ物にならない位強く賢い種族だ…続きいいか？」

「あ、うん、続けて」

「多分分かつてないんだろうなと思いつつ続きを話す。

「俺は特に頭がよくてな、二歳で新エネルギーを発見して世界に革新を齎した、平和に暮らしていたが俺が五歳の頃…俺を危険視したアメリカと言う国は俺を殺そうとした」

ズキンと頭に鈍痛が走る、思い出すといつもこうだ。

「それで死んだの？」

「それで死んでない、聞きたいなら黙つて聞け」

「…親父が俺を庇つて俺の代わりに殺された、人間のお袋も殺された」

「…倒れた親父は死んだと頭脳が判断した、俺の体は必死で走つた…心では親父を助けたいと思つていたのに。」

「…荒野に潜伏していたら母親は拷問されて殺された。

「…俺は憎んだ、世界を憎んで憎んで憎んで剣を取つた」

剣を握りいくつもの戦場を駆け抜けた。

「…そこで出会つたのが俺の初恋の女、ゼノヴィアだ」

「…白い髪に琥珀色の瞳、彼女はまるで絵本から抜け出してきたお姫様のようだつた。

「お姫様つて…」

「…」

「大人しく聞きますからそんなに睨まないで…」

「…彼女はそこ抜けに優しかつた、荒んだ俺にも優しくしてくれて13歳という思春期真つ只中の俺が惚れるのも時間の問題だつた。

「…それから一年、俺とゼノヴィアは婚約者になつた…忘れもしない

…あのクリスマスの日…結婚式を挙げるはずだつたあの日…彼女は…ゼノヴィアは…醜悪な化け物に姿を変えられていた」

「…ウェディングドレス姿のまま体のあちこちから膿を吹き出す肉塊

を生やしてゼノヴィアは涙ながらに俺に縋つた。

「私を殺してくれ、愛するお前の手で私を殺してくれ……お願い……お願いだエイブラハム……つてな」

強く握った拳から血が流れた。

「彼女は平和が好きだった、子供達が笑いあつているような平和が……ゼノヴィアは悪党でも救おうとした、だが悪党は所詮悪党……ゼノヴィアは化け物にされた」

忘れやしない、永遠に……英雄エイブラハム・クルストを作り上げたあの悲劇を。

「俺は彼女にこう言つた、君に一つ約束しよう、10年後の結婚記念日の今日……世界を平和にしよう、だから見ていてくれ。星に還つても見ついてくれ」

彼女はそこで笑つてくれた、最後にキスをして俺は彼女の心臓に彼女の剣を突き立てた。

「……だから俺は約束通り10年後の結婚記念日に世界を平和にした。憎き人類を滅ぼして……それからは贖罪の時間さ、ゼノヴィアが産んだ二つの卵……俺の子供を大きくなるまで育てた」

「……異能者つて卵産むの？」

「……はあ、異能者つてのは胎生型の異能者と卵生型の異能者が居るんだ」

続きいいかと視線で聞くとエルザは力強く頷いた。

「やつぱり自分の子供つてのは自分の命なんかより無量大数倍可愛くて大切でな、人類を滅ぼした贖罪をするなら……やはりその子供に重荷を背負つてもらうしかないんだ。俺みたいな奴だとな」

最低でクソッタレな父親だと俺は理解している。

「子供の……姉の方の記憶を封印して新たな記憶を植え付けた、母親を俺が殺した記憶だ。姉の方……リーナは怒り狂い俺に剣を突き立て、何度も何度も切り刻まれた」

そこまで言ってクスリと笑う、そこでようやく俺の戦いは終わつたのだ、リーナに背負わせた重荷は……リーナが子供を産む頃には消

えただろう。

リーナがやつた事はただ最後の悪党を始末して世界を完全なる平和にしただけだ。

「…ま、こんな所かな。そろそろ昼飯だ、先に行くぞエルザ

「あ、うん…」

「何辛そうな顔をしてるんだ、俺は俺の生に満足している。それじ
や」

単純明解、俺は悪党になつてリーナは英雄になつただけ…リーナが怒り狂つた時俺は嬉しかつた、見た事もなく触れた事もない母親の為にあんなに怒れるいい子なのだ。

俺の教育は間違つてなかつた、娘と息子は間違つた事には違うと言えて正しい事をする異能者を手放しで誉められるような異能者になつた。

俺が生きた意味もゼノヴィアが死んだ意味も…全てあの子達だ、あの子達が俺達夫婦が居て愛し合つたと言う歴史を次いでくれる、誇りを持つて胸張つて言える…俺は間違つてなかつたと。

「むつ…」

気がついたら笑いながら泣いていた、このままだと笑いながら泣ける変態と思われてしまつ…涙を拭い食堂への扉を開ける。

「……ルイズ？」

「はむ？は、えひふははむひいはま

「飲み込んでからでいいよ」

ルイズがクックベリーパイつまみ食いしてた。

「んくつ…エイブラハム兄様、早いですね」

「ココ笑うルイズ、つまみ食いはよくない事だが…まあ許してあげよう、お昼ご飯残したら怒るけど。

「朝飯食い損ねて腹が減つてな、ルイズもやけに早いじゃないか」

「私はこれから魔法の勉強を頑張るので早めに食事を取りに来たんです！」

ルイズの目はやる気に燃えている…ついでに皿の下には隠がくつ

きりと出ていた。

「…徹夜もいいがしつかり休む事も努力の内だぞルイズ」

「今日はちゃんと休みますよーだ、バイバイ兄様！」

悪戯に笑つたルイズは手を振りながら駆け出して…ドアに激突した。

「あーあ…痛そ…大丈夫かルイズ」

完全に気絶しているルイズを見てため息を吐く、どうやら昼飯も抜きらしい…ルイズを抱きあげてルイズの部屋に向かう、ルイズが健脚なのは知つているが何も気絶する勢いでぶつかる事はないんじゃないだろうか。

まあ女の子は多少お転婆な方が愛嬌があると思つ…………カリーヌ？あれはお転婆じゃなくてトリステインの最終兵器だからノーカウント、それにカリーヌの魅力を一番解つてゐる人物に聞いて欲しい、近くに居るだらうモノクルをして鬚を生やして娘たちを溺愛していれる水のメイジが…

「どうこいせ…軽いな」

ルイズは軽い、まさに羽のよう…おかしい、平均体重よりも10キロも低い癖に体は痩せすぎではない…胸なんざでかくても両方合わせて2キロ…これは異常だ。

「ちょっと失礼するゼルイズ…【真実の鏡】」

義手に搭載されている108つ（こんなギミックを搭載しきて数えるのめんどいから適当）のギミックの一つ真実の鏡を発動させる、そこで俺は驚くべき物を目にした。

今ある魔力量だけでも俺の倍…潜在能力的には俺の数万倍の魔力を保有している、体重が軽いのは空気よりわずかに軽い魔力のせいで体が少しだけ浮き上がつてゐる事だ。

心の奥底に眠る感情は強烈な憧れと劣等…こんな宇宙の果ての星にも飛んで來ていたのか、ルイズの心に埋まつてゐる種はすくすくと成長して真っ黒い芽を出していた、劣等を二酸化炭素代わりに吸い憧れを酸素の代わりに吐き出し…凶悪な濃度になつた憧れは再び

劣等感を生み出す……そうした循環で育つ種、俺の前世であった世界を滅ぼしかけた種……【絶望の種】生き物の暗い感情を吸つて育ち、心に根を張つて鱗を入れてさらに美味しい汁を吸う種。

ここでルイズを殺しておかねばなるまい、さもなくばハルゲニアは……

「すまんルイズ……許せ」

腰に下げたナイフを抜き放ち高く掲げる、狙いは動脈と気道と脊髄……一撃で痛みを感じぬように……

『エイブラハム兄様！』

よせ……思い出すんじゃない。

『また酷くやられましたねエイブラハム兄様』

思い出すな。

『今治癒魔法をかけてあげますね』

思い出すな！剣先を鈍らせるな！！俺の思い出の中で……そんな優しく笑わないでくれルイズ！

『エイブラハム兄様……私魔法が使えないの……失敗ばかりして……使人にもゼロって』

俺の手からナイフが落ちて床に音を立てて転がる。

「殺せない……できない……俺には無理だ……」

ルイズの頭を撫でようとして手を止める、ダメだ、殺そうとした人間が愛情にかまけて何をやつてる、手を引つ込めナイフを拾う。ルイズに貸し与えられた部屋の机の上には大量にブリミル関連の書籍とメモを取つたであろう羊皮紙が山となつていた、羊皮紙に手を伸ばして努力の成果を見る……羊皮紙に赤茶けた染みがいくつかある、ペンを見ると血塗れだ。

横目でルイズの手を見ると奇麗な手は血豆と絆創膏だらけだ、ルイズはここまで足搔くのか、努力ができるのか……杖を取り出しルイズに向ける。

「キュアル」

詠唱をリキヤストして高位回復魔法をかけてやる、血だらけの羽

ペンを握りルイズが書いてある羊皮紙の途中にルーンを書いてやる、俺からのプレゼント…というかお詫びだ。

内容は【エオルー・ヌ・フィル・ヤルンサクサ オス・ヌ・
ウリュ・ル・ラド・ベオーズス・ユル・スヴュエル・カノ・オシェ
ラ・ジエラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオーケン・イル】

「俺には使えなかつたが君になら使えるだろう」

巻末に村の跡地で待つと入れておく、ルイズはこの呪文を使うだ
ろうか…自分が行つた罪には贖罪をしなければならない。
これで死んでも…まあ仕方ない事だ。

第一話中編・ルイズのひ・み・つ（後書き）

あれっすわ、やめますね。

安価で行き先決定：全然人きませんし w

第一話後篇・新たな役職リーウスラシル（前書き）

もじけえです

第一話後篇：新たな役職リーグスラ希尔

「来たか」

いつも纏っている黒い甲冑に着替え終わつた所でルイズが馬を走らせているのが見えた、相棒たる巨剣を背中に担いでルイズを見据える。

「エイブラハム兄様！なんでわざわざこんな場所に…」

ルイズの顔に浮かぶ感情は困惑、そして期待…え？期待？なんでだ？…まあいい、俺は俺の贖罪を果たすだけだ。

「俺が書いたルーンは覚えて来たか？」

背を向けて聞いてみる。

「え、ええそれは…もちろん」

やはり勤勉だな、溺れる者藁をも掴むと言つた次第ではあるが…

今回はその藁が城一つ浮き上がらせる浮力を持つている。

「よし、じゃあその魔法を俺に向けて撃て」

「え？いいの？」

口調が素になりやがつた、前世のようにクツクツと悪党っぽく笑つて見せる、唇をできるだけ釣りあげ目は相手を睨むように釣りあげ…かと言つて眉間に皺をよせない、最後に顎を引いて笑うと同時に肩を揺らす。

「かまわんさ、所詮お前の魔法だ…俺に当たると痛つか？」

当たるな、間違いなく。

ルイズのムッとした顔に内心申し訳なく思つ、俺の自己満足につき合わせて怒らせてしまつた…嫌われたかな、まあそれも一興…前世じゃ世界から嫌われたんだ、今更遠慮する必要性はないと思つ…俺としてはやっぱり悲しいがな。

「後悔しないでくださいね！」

息を吸い込み、魔法を詠唱し始めるルイズ…恐ろしいほどの魔力がルイズの体から噴き上がつて…どうやら魔法は発動するよう

だ、やはりアルビオンで黒髪の女からスリ盗った文献に書かれていたこの呪文間違いなく虚無であり……そして敵も伝説と言われる虚無の使い手らしい。

「【エクスプロージョン】……あれ、私なんか呪文の名前を……」

俺の足元に移動した巨大な魔力の奔流が圧縮されていく……来るか、伝説。

剣を引き抜き力を解き放つ、目の高さに巨剣を構える……魔力の巨大な爆発が……來た！その爆発に向かつて剣を同時に二回振る、剣が交差した場所の空間が切り取られ黒い穴が出現する、ルイズが発生させた爆発はそれに飲み込まれ……馬鹿な、タイムパラドックスが消し飛ばされた。

残った爆風に巻き込まれて水平に吹き飛びタルブの草原を抉る。

「こ、ここまでか……」

目標の俺以外には全くといって傷すらない……なんだこの対軍団用魔法は……俺の世界でもこんな高度な事できる魔術師は魔王とかその配下の円卓の騎士位だぞ。

「ルイズ……おいルイズ……」

軽減したとは言えボロボロの体で立ちあがると別の所に居た……Why? ここどこ? 自慢の糞つたれの脳味噌はここがアルビオンだと告げている……何故? 頭脳は回答を寄せ越さない……情報不足だつてのはわかっている。

「あ、あの!」

後ろから声がかけられた、剣を手にゆっくり振り向くと杖をこちらに向けたエルフの少女が居た……アルビオンにエルフだと? どういう事だ……杖を向けているつて事は俺とやり合つ気か?

「私と契約してください!」

杖を俺につきつけたままそんな事を言つてきやがつた……

「……傭兵は廃業した、戦争なら他当たりなエルフのお嬢ちゃん」

「……何故私がエルフだと……」

「帽子から耳がはみ出てる」

エルフの少女は慌てて帽子を押さえた、実の所こんな美人はエルフ位にしかいないからである、力マカケではあるがどうやら見事に引っかかってくれたみたいだ。

「はあ……で、契約つてなんだ？俺は何をすればいい「契約してくれるんですか？」

「その為に呼んだんだる、サモンサー・ヴァントでな…」

ようやく頭の中で整理がついた、おそらくこの子は何かの呪文書を読んでサモンサー・ヴァントをしたくなつてやつたら俺が出て来た、と言うわけだろ？…足元にサモンサー・ヴァントの後を見つけた、つまりは俺はいつの間にか彼女の使い魔になつたらしい…エルフの使い魔かあ。

「えつと…それならき、きききき…キスを…」

…なんだ、サモンサー・ヴァントってキスがいるのか？目の前で真っ赤になつてているエルフを眺める、なんと言つたアレだね、胸でかいね。

「早くしろ」

彼女にひざまづき目を閉じて唇を前に出す、そして触れるか触れないか位の感触が唇に当たる。

「…ふう、ごちそうさまっ！？アツチイ！」

胸に焼けた鉄を押し付けられたような熱さを感じるがすぐに収まつた、鎧を外すと胸にリーヴスラシルとルーンで描かれている。

「なんだコレ……」

弱つた、なんでこんな所にルーンが刻まれるんだ…

「あ、あの！わ、私ティファニアと言います、貴方は？」

先程から俺にビビりまくつていいエルフが自己紹介していく、どうやらティファニアと言つ名前らしい。

「俺はエイブラハム、よろしくなティファニア」

「はい！ティファアって呼んで下さい！」

「ここまでビクビクされると傷つくな…まあかわいいからいいか。

第三話・零とルイズの贈り物

「ふーん…ほー…へー…」

場所は変わつてここはタルブの倉庫、俺はガチャガチャと音を立てながら目の前の艦載機、零戦を弄る。

「あ、あのエイブラハムさん、いつになつたら貴方のお家に…」
後ろではティファニア…いやティファアが困つたような声をあげている。

「んー後少し、エンジンの擦り合わせが終わつてからな」

俺はティファアの事などもうどうでもよく零戦を好き勝手に弄つていた、当時の足りない技術で精一杯作られているのがわかる…そしてこの操縦桿、緊張していたのか手汗の形がくつきりと浮かんでいる。

「よし、離れてろティファア」

最後の部品を組み込んでプロペラを力一杯回した、すると低い駆動音をあげてプロペラがゆっくり回り出した。

ティファアを後部座席に座らせて自分もコックピットに乗る、零戦の足元にはカタパルト…零が急加速して揚力を得て再び空に舞い上がる。

「わあああ…空飛んできますーこの大きな龍がー！」

零の風防に張り付きながらティファアは歓喜の声をあげた、大分かわいらしい。

「いい眺めだろ?これならタルブまですぐセ…ほらー見えてきた、
錬金!」

城の隣を錬金して滑走路を生み出す、そこに緩やかに着陸してエンジンを止める、まわりにはずっと滞在していたのかヴァリエールの人々が見える。

「エイブラハム兄様!」

ルイズが胸に飛び込んでくる、見た目より遙かに軽い体を受け止めて頭を撫でてやる。

「心配かけたな、俺はこの通り無事だ」

そう言つとルイズは子犬が甘えた時に出す鳴き声のよつな声をあげた、かわゆいのう……どこにも嫁にやつたくないのう……はつ！俺は何を！？

「…つと忘れてた、紹介するよ」

テファアの背中を押して前に出す。

「俺の御主人様だ」

「ティファニアです！よろしくお願ひします！」

テ、「アーヴの声が半アグダリ」上擦ったがそんな事は気になら

数秒後、ヴァリエール

数秒後ヴァリエール＝姉妹とシエスターの悲鳴があがるのだった。訳を説明するのに一時間程かかってしまった、テファには話が長くなるから部屋で休むか庭で蝶でも追い掛けてるように頼んだ。勿論テファは蝶を追い掛けてる、見た目がメルヘンなら行動もメルヘンだった、現実的に考えるなら温暖な気候のトリステインの花畠に目を引かれただけだろう、特に家の花畠は王家に勝るとも劣らぬ美しさだ。

「へえ、エイブラハムってばあんな優げな子が好みなのね」

同じく僕がなガトリアかそんな事を言いながら俺の頬を突いて

ココ笑っている、この背中を滑り落ちる冷や汗は何？

〔二〕

そしてルイズも同じように不機嫌だ。

ここに居てはあらぬ疑いを吹つかれてしまいそうなのでテフアをシエスタに任せて俺は部屋に帰る、シエスタは嫉妬するかもと考えていたが妹が出来たと張り切っていた。

「ふう…」

またたりと部屋の中で紅茶を楽しんでいると不思議とため息が出

た。

感じているのは祭から帰ったようなけだるさだ、平和だ、本当に平和だ…目から溢れた塩水を拭つていると扉が数回叩かれた。

「どーぞ」

「入りますね」

部屋に入ってきたのはルイズだった、杖を持つて嬉しそうに一コ二コ笑いながら入ってきた。

「お兄様！成長したんですね！」

椅子を進める前にそんな事を言われて思わずルイズの胸を見てしまった、俺の部屋に閃光と爆音が満ちて俺はコンガリと焼けた。

「胸じゃなくて魔法です、見て下さい…フライ！」

ふわりとルイズが浮いて俺の部屋の中を漂っている。

「…頑張つたな」

「はいっ！」

嬉しそうなルイズの顔にズキンと痛みが走った、似てる、アーツに似てる、こいつモ俺ガ…

…-…-…して…-…-
…-…-私を…殺して…-…-

「ぐつ！」

昔の情景がフラッシュバックし思わず額を押さえる。

「あ…具合が悪かったんですねか？」

喜色満面だったルイズの顔が陰り心配そうな声が聞こえた。

「大丈夫だ、頭痛がしただけだ」

気を取り直してルイズに椅子を進めるとチョコンとルイズは椅子に座った。

「それで…どうだった？君の両親は」

「凄い喜んでくれましたよ！あ…そ、それでですね…エイブラハム兄様に御礼をと思いまして…」

モジモジとルイズは体を動かした、そうして差し出されたのは毛糸の塊…いやこれはマフラーだな、お転婆なルイズにもこんな可愛い趣味があつたんだなと関心する。

「似合うか？」

首に巻いて笑つてみるとルイズの顔がぱああつと明るくなつた後シユンとなつた。

「…あの、下手くそでごめんなさい」

「何を言つ、例え金で出来た服があらうとルイズが作つてくれたコイツに比べれば小石程の価値もない」

嘘ではない、俺は金銀財宝なんかよりもずっとコイツのがありがたい、一生懸命編んしてくれたのだろう、編み針が幾度となく刺さつた手を見て納得してくれた。

「ルイズ、本当に嬉しいよ。ありがとう」

ニッコリ笑つてやるとルイズは顔を朱に染めて頬に自分の手を当てた。

包帯だらけの手、何と言つか…ルイズがぶきつちよなのは知つてゐるが…とてもなく嬉しい、杖を取り出してキュアの呪文を手にかけてやる。

「兄様、私もつともつと努力して凄いメイジになります、そしたら…そしたら兄様に…えつと、その…」

歯切れの悪いルイズ、俺が首を傾げているとピコーンと部屋から逃げてしまつた、全く持つて訳わからん。

「んー…凄いメイジになつて俺に…ま、まさか…」

いや、有り得る、何しろカリース様の娘だ。

「ヒイイイイ…」

決闘を申し込まれるかも知れないと言つた結論を出した俺は爆発の威力を思い出して部屋の隅でブルブルと震えるのであつた。

そしてその夜の晩餐会でルイズは必死に俺の結論を否定するのだがカリース様は…

「流石私の娘、格上にも立ち向かつていくとは…」

目尻に光る物を出しながら娘の成長に感激していた、被害を被るのは俺なのだが…ちなみにちょっと前にカリースに何故俺を田の敵にするか聞いてみた所。

「邪悪だから」

と否定できない答えを頂いた、人類八十億人を滅ぼした俺は転生しても魂に恨みがこびりついている、だから邪悪に見えるのだろう。さあ、明日は魔法学院に編入しなくてはならない、早めに寝ておこう。

第四話・久しぶりの悪行（前書き）

もじけえよ、でもここからきな臭くなつてくるよ

第四話：久しぶりの悪行

トリステイン魔法学院での編入を終えて俺は男子寮のベッドに寝転ぶ、やべえ俺の部屋よりいいベッドだこれ。

「ふー……」

堅苦しいスラックスとYシャツを脱いで部屋着に着替える、こう言つた服装は好かない、俺は柔らかい絨毯の上でバイオリンの音に合わせてくるくる踊るよりキャンプファイアーの回りで粗野な男の外した歌声で適当に荒々しく踊る方が好きだ。

閉話及第…しかしこの学院はかなりきな臭い、そこかしこにレコン・キスタの残り香がある、トリステインからは長く離れていたから俺は内情とかにはさっぱり詳しくないが…どうやらトリステインはかなりまずいようだ。

「トリステインには花はあつても杖はない…だつたつけか？」

鳥の骨と呼ばれる枢機卿が今は政権を動かしているが…上手く機能していないのが現状だ、新聞を読むに…新聞と言つても瓦版みたいな物だが…アルビオンは王軍が優性らしい、だが俺は確信している、王軍はその内劣勢になりいすれレコン・キスタに敗れると。

学院内の掃除をいつ始めるか考えていると部屋のドアがノックされずに開いた。

「どうしたんだエルザ」

親父に経験を積めと言われて俺と一緒に学院に送られたエルザがいつも違う学院のエプロンドレス姿で立つていた。

だがエルザは上から下までずぶ濡れだつた。

「先輩達がガキに食べさせる賄いはないって水をかけたの」

口をへの字に曲げ涙を堪えながらエルザはそう言つた、イラッとしたがら立ち上がりドアを閉めてエルザを椅子に座らせる、筆筒からバスタオルを引っ張りだしてエルザに被せる。

「風邪引くから着替えなよ、寒いだろ？」

どうせこの様子だと部屋も追い出されてそうだ、そう考えながらエルザの髪を拭いてやる、エルザは黙りこくり大人しく拭かれる。

「酷い奴らだな……だが、今日はお前の勝ちだなエルザ、よく泣かなかつたな、偉いぞ」

そう言つて頭を撫でてやるとエルザは俺に抱き着いてきた、そのまま声を殺して泣いている。

元吸血鬼のエルザははつとなる程美しい、恐らく女の嫉妬であるう……性根が醜い女は見た目も醜い、いくら化粧でごまかしたとて醜い者は醜いのだ。

エルザが落ち着いた頃に食事を出してやる……と言つた俺の夕飯だ、部屋まで運んで貰つてあつたが食べ忘れていたのだ。

すっかり冷めてしまつていたから魔法で温めなおした。

「エルザ、今日は俺の部屋に泊まつていけ。今夜は寒くてな……人肌が恋しかつたんだ」

モグモグと白身魚のムニエルを食べていたエルザはコクンと頷いた。

エルザが寝付いた頃、俺は剣を片手に窓から飛び降りた、目指すはメイドの宿舎。

「いっくよ～ いっくよ～ ハイブラハムはいくよ～ 家族を泣かせた奴を懲らしめに～」

怒りではちきれそうな頭を静める為に歌う。

「山越え谷越え地獄越え～ 涙の代償払わせに～ 足かな？腕かな？顔かな？それともいつのちつかな～ メイドの諸君！こーんばーんわー！！」

宿舎の扉を蹴破ると轟音でメイド達がバタバタと現れた、皆ボローンとしている。

「唐突だけど隠れんぼをしよう、君達は隠れる、俺が鬼だ……30秒あげよう……さあ逃げて逃げて鬼に捕まつたら酷い目に会うよ」

皆困惑してゐる中、リーダーらしきメイドがゆづくりと前に出てき

た。

「ミスター・タルブ、隠れんぼなんかより私と楽しい事をしませんか？」

「いい度胸をしている、エルザの記憶を見た所、コイツがリーダーとなつて虐めているようだ。

「20：19：18」

「あ、あのミスター・タルブ？ 私だけじゃ不満なら、他の子達も一緒に…ね？ 隠？」

「3：2：1：はい、みつけた！」

リーダーの首を引っつかみそのまま吊り上げる、他のメイドはキヤーキヤー悲鳴をあげている。

「捕まつたからオシオキでーす」

剣を引き抜きリーダーの臍の下…子宮に向かつて突き刺してぐりぐりと動かす。

「肩に子供を作る資格も、産む資格もございません」

剣を引き抜くとボロリとぐぢゃぐぢゃになつた子宮が一緒に出てくる、獣のような悲鳴をあげているリーダーを固まつて怯えているメイド達の足元に叩きつけてにんまり笑う。

「どうした？ 逃げないのか？」

「ひ、酷いです、ななな…なんでこんな事を…」

「お前らエルザ虐めたじやん、当然の報いだ」

そう言つてやると氣の強そうなメイドが前に出て俺に怒鳴つた。

「やつ過ぎです！ ちょっと水をかけて外に出しだだけじや…」

「ほお？ 吹雪が荒れ狂う真冬の寒空の下に小さい子供に水をぶつかけて外に追い出すのがやり過ぎじゃないと？」

エルザが俺を頼る事を考えつかなかつたら今頃凍死していただろう、エルザの凍死死体を見てコイツら笑つていたであらう事は容易に予想できる。

「ならば貴様らにも同じ事をしてやるうではないか…ウォーター！ 杖を引き抜いてメイド達に水をぶっかける。

「レビューション！運が良ければ助かるぞ！そら行け！」

遥か遠くの森に投げ捨てておいた。

どうせ生きて帰つてこれまい…さて地面でのたうちまわつてゐる口イツはどうしようか…ま、この時代なら子供が産めない女なんざ「三程の価値もない、ビバ男尊女卑だ、もうまともに生きられないであろから傷を治して俺はそのまま帰つた。

部屋に戻るとエルザが静かに寝息を立てていた、殺人で荒んだ心が癒されていくのがわかる、エルザの頭を撫でて俺は予備の毛布をクローゼットから引っ張り出して椅子の上で毛布に包まつて寝た。

「ハイブラハム、起きて」

ゆさゆさとエルザが俺の体を揺すつてゐる。

「チューしてくれなきゃ起きない」

ちょっとふざけてみた、思いきりパンチされた。

「起きた？」

「バツチリだ」

サムズアップして見せるとエルザは苦笑した、どうやら元気になつてくれたようだ。

「ちょっと耳貸して」

エルザが指先でちょいちょいとやつてゐる、屈んで耳を差し出して見ると首筋に吸い付かれた。

驚いて体を離した時にはエルザは既に逃げ出してドアノブに手をかけていた。

「き、昨日のお礼だから、勘違いしないで！」

そのままバタバタと部屋を飛び出していくエルザを見送り、俺は赤面した、純情な少女のよう…こんな時に恋愛経験が必要になると…情けない。

第五話・ハイカラハムと青タイツと微笑み二歩（前編）

さあ、ハルゲニア壊滅へのカウントダウン開始だよー。

第五話・エイブラハムと青タイツと微笑み二歩

今日は待ちに待つてない召喚の儀…正直病欠したいです…だが残念ながら出なくては進級できなくなるため一年分学費が無駄になる、こここの学費は安くないのだ。

肩を落としながら俺は外の庭に出る、コルベールが張り切つて説明していた。

「エイブラハム！」

びよこびよことカトリアが手を振つてゐるので俺も手を振り返す、胸がバインバインつて跳ねてゐるのに気付けカトリア、周りの野郎どもが前屈みになつてゐるぞ。

「てな訳でして…ミスタタルブ！まずは貴方から召喚して貰いましょう！」

コルベールに指名されてダラダラと前に出てダラダラと呪文を読み上げて猫位の世話しやすい動物がいいなーなんて考えながら杖を振り下ろした。

「うお！？どこだここ！？」

なんか赤い槍持つた全身青タイツの男が召喚された。

「あー…コルベール先生、まさか…」

「コクリとコルベールは頷いた、つまりはコイツと契約する訳だ、キスする訳だ…男ど。

「よう槍使い、ちょっとといいか」

槍を抱えて困惑している青タイツに話しかける。

「…ほう」

「…ふむ

目があつた瞬間お互いの力量を見抜いた、コイツは伝説級だ。

「貴様…ただの小僧じゃないな」

ゆらりと槍を構える青タイツ、こちらも背中から剣を引き抜く…

「お前もただの青タイツじゃないな、お互い化け物か」

「これは甲冑だ！」

青タイツが突っ込んだ、中々いい腕をしている。

お互い同時に武器を下ろした、今やつたら確実にどちらかが死ぬ、それはつまらない。

「青タイツ、あんた名前は？」
剣を背中に仕舞つて尋ねる。

「ランサー…とでも呼んでくれ、しかし何故俺はここに…」
急に呼び出された事に困惑しているらしき青タイツ…むとじランサー。

「まあ、落ち着け。後で説明してやる今は…我が名はエイブラハム・

エシュー・クルスト・ド・タルブ…」

契約の口emonを唱えてランサーにキスをする、オウフ…気持ち悪い。

「て、てめえ何しやがる！つてあつつ…？」

ランサーの額にルーンが…ルーンが…ルーンじゃなく犬と刻まれた、すまないランサー。

「おいこらー説明しやがれ！お前はマジmonのホモなのか…」
ランサーは怒り心頭と言つた感じだ、まあそうなるだらつな。

「えつとな…ここはどこだか解るか？」

「あん？そら地球のどこか…つて月が一つだと？」

「…よし、確定だな。いいかよく聞けよ」

ランサーに色々と説明する、元来頭はいいようで理解は早かつた。
「成る程…つまり俺は貴様のサーヴァントとなつた訳か…」
理解が早くて助かる、だがやつぱり不服そうだな。

「ま、サーヴァントと言つても四六時中一緒に居る訳でもないしな。
ランサー、あんたは限りなく自由にしててくれ、だが三つ約束しろ」
ランサーの前に指を三本立てる。

「一つ、むやみやたらに殺すな、殺していいのは野盗とかそんな奴らだ」

「分かった」

一つ目はランサーも了承してくれた。

「一いつ、小遣いはやるから何も奪うな」

「ほお、くれるのか。嬉しいねえ」

一つ目は寧ろ嬉しいようだ、早速手を差し出してきたがあげるとそのままどつかに遊びに行く危険性があるからまだ渡さない。「三つ、俺の命令には必ず従ってくれ」

「ハツハツハ！それは構わねえさ。俺は元々騎士だ、主君の命令には基本逆らう事はしねえ」

初耳だ、どうやらランサーは元々騎士らしい、どこの騎士だったのだろうか。

「ヴァリエールも人を召喚したぞー！」

「うおおおおお！今年はどうなってるんだ！？」

「今度はむさい青タイツじゃなくて銀髪の綺麗な人だ！」

有象無象の声の中から嫌な単語を一つ聞き取つた、銀髪の綺麗な人？ま、まさか…

油の切れたブリキ人形の如く首を動かすと嫌な予感が的中した。

「あ、クルストさんだあ。お久しぶりです」

腰まである銀髪を風に靡かせ、真紅の瞳をキラキラと輝かせる女、100人に聞いたら100人が美人と答えるクラスの美女、その名は…

「三柳…一葉…」

前世で一番苦手だった人物の三柳一葉、しかも全盛期のどんでもない強さを誇る時の一葉だつた。

数回戦つたがあの時の一葉とは決着が着いた試しがない。

「クルストさん、ここどこなんですか？あ、なんとなく分かつてきました、貴女が私のご主人様ですね、どうでもいいけどお腹空きません？」

…俺が苦手とする原因を分かつただろうか、一葉は頭の中が花畠どころか天国なのである。

カトリアは一葉にキスをされて目を白黒している、俺もこれから

起じる事を考えて目を白黒させた、全く持つて冗談じゃない…微笑み三歩の一葉…二二二微笑んでいて強くなさそうに見えるが戦えばどんな達人でも二手目に斬られると言つ意味だ、ちなみに趣味が散歩と言う事も皮肉つていい。

「一葉…あなたなんでここに居る」

頭痛を抑える為に額に手を当てつつそう訪ねてみる、これから行われる会話の為だ。

「…今日は正面目に行きますね、クルストさん…もう一度貴方の力を貸して欲しいのです」

やつぱり面倒事だつた、俺は昔の顔で一葉を睨む。

「十五回…あんたらに窮地を救われた数だ、それには感謝している感謝はしている、おかげで俺は人類を殲滅する事ができ、結果地球を元の環境に戻し全ての生物が無用な滅びを迎えるのだけは避ける事ができた。

「だがな、俺は死人だ、死人は生人を救う事は出来ない、そして世界もな…あんたらの知つてゐる英雄エイブラハム・ヨシュア・クルストは死んだんだよ、ここに居るのはただのエイブラハムだ、クルストなんて呼び方はされてない」

それでも一葉は二二二笑つてゐる、多分一葉の事だ、俺がまた助けてくれると思つてゐるのだろうか…正解だ。

「…で、なんなんだ問題つてのは」

「えつとですねー、地球が吹つ飛んじゃいました」

「…………俺にどうしろつて言つんだ」

「どうすればいいんでしょうね?」

二二二二、二二二二、二二二二。

つまりはどうじょうもないから俺の脳味噌を頼りにきたつて所か…ま、これ位ならいくらでも構わない。

「受け入れ先を探さないとな、星の再生の魔術の術式は基点がないと基本不可能だからな、ま、その基点を簡略化する方法もあるにはあるが…それを行うには新ルーンの解明術式の応用とマナイオン陽

性化結界と…後は208式結界の二型をアレンジして……んーまあ
基点を見つけてこい」

まあこんなもんでいいだろつ、他の奴らの駄騒でも眺めながら俺
は地面に腰を降ろした、隣に一葉も座つていい……いやいや、早く帰
れよ。

「あははは、私が最後の地球生き残りだからこいで頑張らないとい
けないんですよね」

……何だつて？

「おい、俺の息子は？娘は？」

「えつと、ジエームズ君と円ちゃん…じゃなくてリーナちゃんでし
たつけ？そう言えば貴方が死んでからの事を話さないといけません
ね…酷い物でした」

そう言って一葉は苦虫をかみつぶしたような顔をした後ゆっくり
と口を開いた

第六話・悪党の最後と地球のそれから

「行くぞクルストオオオオオオオオオオオオオオオオーーーお母さんとお父さんのお仇だあああああーーー！」

目に憎惡の炎と悲しみの光を灯らせて突進してくる白い髪の女の子…俺が世界で最も愛した女の娘…そして俺の大切で可愛い子供である、手には元々俺が使っていた宝具ピースメイカー…大切な者を犠牲にして平和を齎す穢れた聖剣。

娘に偽物の記憶を植え付け実の父親たる俺を討たせようとしている…最低な父親だ、それ位理解している、理解している全て計算づくだ、円…いいや本当の名前はリーナ、リーナが人類を滅ぼした悪党たる俺を討つてこの止まらなくなつた戦争に終止符を打つ…リーナは悪党の子じやなくて英雄としてこれからも長く語り継がれる存在になる。

それに、俺は嬉しい、若い頃ならリーナに負けなかつただろうが、今はリーナのが強い、リーナに俺ほどの技術はないがお前の母さん譲りの頑丈な肉体と優しい心、そして俺の剣技で悪党たる俺を超えられる。

思えば長かった、五歳の時に復讐の為に戦いを初めて十三歳の時にお前の母さんに出会つて嗜められて化け物にされたお前の母さんを殺害し…理想を継いでから、気付けばもう三十三歳だ、人間としては若いだろうが異能者で言えば死を待つだけの老人…リーナはもう十九歳か…いい人も見つけたみたいだし…俺はもう思い残す事はない、だからこのまま全力でリーナを迎え撃つ、全力の俺が負ける事で…リーナは次に進める。

これが父親として愛しい子供に残せる最後の贈り物だ。

「どうなのだ！」

手から使い慣れた白銀の巨剣、プラチナム・ラヴァーが弾かれて

空高く飛んで行く、予備の小剣に手を伸ばすがそれより早くリーナが接近してくる、もう解つてた最後だ。

「これが…お父さんの剣だ！」

吸い込まれるように切つ先が俺の胸に迫る、この技は剣が描く軌跡からスワローなんて呼ばれている、ピースメイカーが甲冑を碎き胸の筋肉を押しのけアバラを叩き割り見事に俺の心臓を貫いた。

「ぐつ！？見事だ」

異能者を言うのも厄介なもんで心臓が無くなつた位じゃすぐには死なないし数分間は余裕で動ける、目の前には何故か悲しそうなりーナの顔…そう言えばそうだつたな、佐伯円とエイブラハム・Y・クルストは友達でもあつたな…

胸から剣が引き抜かれ俺は地面に倒れ込む、ああ…いてえな畜生。…何故だクルスト、何故お前の剣から敵意を感じない…むしろ家族に向けるような愛情を感じた

まだ佐伯円であるリーナがそんな事を聞いてくる。

「いざれ解るさ…そろそろ俺がかけた魔術が解ける…」

術者たる俺が死ねば消える類の魔術だ、佐伯円が頭を抱えて目の前で蹲つている…大容量記憶のフラッシュバック、あれは気持ち悪いんだよな。

「あ、わ、私は…」

リーナに戻つたらしく、手から剣が落ちて甲高い音を立てた、リーナの瞳には後悔と懺悔と…

「悪いなりーナ、こんなでかいもん背負わせちまつて」

畜生、最後まで悪党でいようなんざ無理だ、娘のこんな顔見ちまつたら…

「お、お父さん…あ、あああああ…私なんて事を…」

「大丈夫だ、もう悪党の娘なんて人間に苛められる事も…友達ができないなんて事もないんだリーナ、お前は今日から英雄だ…げほつ！げほつ！」

止まつた血が喉から溢れて黒い甲冑に掛かる。

「待つて、今治療を……！」

「止めとけ、資源の無駄だ」

「喋らないで！」

リーナが胸の傷にガーゼを当て始める、リーナには俺譲りの頭脳がある、もう答えは出しているはずだろ？！ピースメイカーは宝具らしく様々な特性がある、たとえば…ピースメイカーで着けた傷は治らないとかな。

「最後に聞いてくれ……」

「お願いだから喋らないで…私は天才なの、こんな傷ぐらいすぐには治して……また三人で一緒に……」

俺の頭脳を引き継いだリーナは間違いなく天才だ、全ての事象に見ただけで答えを下せるほど…

「俺はな、ずっと人殺しを続けてきて…人並の幸せなんぞ無理だつて思つてた」

「……大丈夫だから…最後なんて言わないでお父さん、昔みたいに…一緒に…」

リーナの泣き声…この子は本当に優しく育つた、俺は口クに育児なんか出来なかつたといつのに恨むどじるかこうじて言葉をかけてくれる。

「だけどお前たちが産まれた時は…嬉しかつた、こんな俺でも可愛い子供を抱けた、あの頃のお前は泣き虫で……いかんな、年を取ると思い出話をしたくなる…」

「もつとたくさん出来るから、お願いだから死なないでお父さん…もう泣いているのだろうか、田がかすんでよく見えない、それでリーナの顔ならすぐ出でくる、声を聞いただけでどんな表情をしているのかわかる。

「お前達は俺の誇りだ、そしてお前達だけは忘れないでくれ、俺はここに居たと…愛している、リーナ、ジエームズ…俺が必死に掴み取った平和の中で…達者に暮らせ」

もう言いたい事は言つた、丁度時間切れのようで意識が遠のく、

手を虚空に伸ばすと誰かに手を握られた。

「死なないでよお父さん…私もつとたくさんお父さんと…」

その言葉を最後まで聞く事はできなかつた、俺はそこで死んで…

目が覚めるとハルゲニアに居た。

「そこまでは知っています、ここから、ですよ」

思い出話をしたら一葉に諫められた。

クルストが死んで一週間が立つた、悪党としての名を馳せていたクルストだ、みんな喜ぶのだろうと思っていたが泣いている人が多かつた、人類の僅かな数万程の生き残り…全てクルストに助けられた善良な人々だ、彼らはクルストの為に涙を流していた。

クルストは人類を殲滅したのは俺だあ！なんて嘘を吐いていたがなんの事は無い、人間は自ら滅んだだけなのだ、異能者の国たる日本に全ての核を撃ちこもうとした所、クルストの妨害によつて自國に落着、結果滅んだ。

「ふう…」

出るのはため息ばかりだ、クルストが誰にも知られずに解決していた問題が全て私達に向かつてきつた、國家総動員で当たつているがまだ人手不足は否めない、あの人はとてつもなく優秀だつた：それこそ人間が世界規模で恐怖を抱く位に。

「母さん、あまり無理するなよ、僕ももつと手伝うから…」

息子の双葉が珈琲を運んできてくれた、私はそれを一口飲んでからにつこりと笑う。

「ありがとう、でも困つて泣いてる人がいますから」

そう、クルストの行動理念だ。

困つてて、泣いてる、苦しんでる、俺にとっちゃそれだけで十分助ける理由になんだよ、でしたつけ？ 偽善者、偽善者と揶揄

する人間にそう啖呵を切つて見せた、その矮小な人間には理解できなかつたみたいだが……閑話及第。

再びデスクに向き直る、あるいは書類の山と山、木で出来ているデスクがきしむほどの量だ、うんざりして閉口しながらペンを取る。

「双葉君、そう言えばリーナちゃんは？」

クルストの才能を全て受け継いだ彼女が加わってくれれば大分楽になるのだが。

「さあね、プラチナム・ラヴァーを担いでどこぞに旅に出たつて聞いたけど……ジエームズの方は世界各地の絶望を倒しているよ」
ジエームズ、クルストを超える者と噂されている少年だ、クルストの理想を理解し、その眞の目的の為に世界各地を回つている、まあ眞の目的と言つても困つた人を助けるだけだけど、それでもジエームズのおかげで私達は大分助かつていて。

戦争によつて疲弊した日本軍に絶望を討伐できる力は無い、私達は国家から動けずに戦いに行く事はできない……私達はクルストに頼りっぱなしだと思う、彼はもういないのでから自分達でなんとかできるようにならなくては。

「一葉元帥！！一葉元帥はおられますか！！」

激しく扉が開け放たれて青い髪の女の子が飛び込んでくる、確かに彼女はアディとか言つたかな、最近士官になつたばかりの少尉……第十小隊所属の。

「はい、ここにいますよ、どうしましたか少尉」

書類の山から顔を出して彼女に見えるようにするとアディは嬉しそうに顔を明るくした、私に駆け寄つてきて……

「敵襲です！月軌道上で第四第五艦隊が迎え撃つてますが状況は好転せず！陸戦準備とのことです！」

「なつ……まさか……どこの識別ですか！」

「銀河帝国です……」

不味い不味い、銀河帝国と言えばこの銀河で一番の勢力を誇る大軍団だ、過去に一度地球への進攻があつたがその時に止めたのがク

ルスト…彼がいなくなつたと知つて再び攻めてきたというのだろうか、官品の居合刀をひつつかみ急いで戦闘服に着替える、双葉はアディを連れてかけ出して行つた。

「ふうー…」

年で鈍つた体に久々に活を入れる、いつ振りだらう刀を振るのは、いつ振りだらうか戦いに赴くのは…年涯もなくわくわくして、久しぶりの戦いの感覚に高揚する。

外に出ると陸軍が私の指示をまだかまだかと待つていた、復興支援ばかりさせていたから彼らも体が鈍つてているのだろう。

「全陸軍に告げます、ようやく訪れた平和を乱す莫迦者がいます。この平和はある男が必死に掴み取つた物…誰にだつて奪う権利などありはしない！奴らに田に物見せてやりましょー！ピースマイカー！前進！…」

それと同時に降下予想地点のデータを送る、異能者は各自その場に武器を持つて駆けて行つた。

それからと言う物帝国はいつまでも落とせない地球に郷を煮やし、地球を破壊…火星前線基地で指揮をしていた私達一部の異能者は撤退を開始…逃げるとこなんてありやしないのに…

結局私達数百名は宇宙をしばらく漂つてどこかの星に落着したかと思えば…

「私はここに召喚されていたって訳ですよ」

もう何がなんだかさっぱりわからないが…とりあえず用心するに越した事はない、銀河帝国…まさか地球を吹き飛ばしてくれるとは…多分地球に残っていた異能者達は同盟を組んでいる星に逃げてい

るはすだ。
やれやれ、早く地球を再生してやむがま

特別編・もしもハイカラハムが転生ではなく召喚されいたら前編（前書き）

ちょっと試しに書いてみました、人気あつたら中編と後編やります

ヴェストリの広場、普段日が差しにくいこの静かな場所はいつもと違い悲鳴に包まれていた、悲鳴の中心には2メイルを超える黒い甲冑の大男が、これまた巨大な白い片刃の剣を携えてぱーっと突っ立っているのだ。

鎧の覗き穴から目の前でもがいでいる芋虫…訂正、四肢を失った金髪の男を眺めている。

「つまらんなあ魔術士、全く持つて貴様はつまらん」

金髪の芋虫…訂正、ギーシュは脳内血圧が下がり既に気絶している。

「ふあああ…ふ…俺の勝ちでいいな、帰つて寝る」

大欠伸をした後まるで遊びに飽きたように語り、生徒の波を搔き分けて大男はどこかに歩いていつてしまった。

何故こうなつてしまつたのかとルイズは頭を抱えた、大男…クルストと名乗つた男はギーシュとの戦いが始まると同時に背中の剣に手をかけ、手を離した。

たつたそれだけでギーシュは四肢を切り落とされて芋虫のように転がつたのだ、殺氣も何もない、クルストにとつては文字通りお遊びだつたのだろう。

ルイズが精一杯頑張つて呼んだ使い魔は…最強の使い魔だつたのだ、それも単騎で国を落とすよつた強さを持つ化け物、ルイズは意を決してクルストを追い掛けた。

「ちよつとクル…スト…」

ルイズが追い付いた頃、クルストは教師達全員に杖を向けられていた。

「動くな化け物め！風の鎧にはなりたくないからう！」

ギターが得意げに言い放つた、クルストはピクリとも動かない。

「…すまないクルスト君、オスマン学院長に君を連れてくるように

言われたんだ」

「コルベールは申し訳なさそうに杖を向けている、そんな中クルストは…

「ふああああ…ふ…」

大欠伸をしているのだった、これまた退屈そう。

「……で、なんだお前ら」

訝しげな視線を教師達に向けたクルストは苛立しげにそして腹立しげに足を踏み鳴らすのだった。

「ええい！黙れこの悪党めが！」

そして完全に調子に乗っているギターをクルストは一警した後、私に視線を移した。

「ご主人様よ、あいつら殺していいか？」

「ダメに決まってるでしょ！」

全く非常識な使い魔である、一応ルイズの言つ事は聞いているらしく、ふむ…と呟くと両手を挙げた。

敵意はないと言つた所だろうか、コルベールはホッとしたように杖を下ろしたが…

「食らえ化け物！ライトニングクラウド！」

ギターがクルストに向かって風のスクウェアスペルを放ったのだが、クルストに雷が向かって…そのままギターに帰ってきた。

「馬鹿じやねーの？」

自業自得で死んだギターに向けてクルストはそう言い放つた、目には侮蔑の光が揺らいでいる。

この傍若無人な悪党は少し前、ルイズが召喚した使い魔なのだが……当時の情景を思い浮かべてみよう。

「はあ…はあ…」

進級のかかつた使い魔召喚の儀式、その中ゼロのルイズと呼ばれる少女は幾度となく頑張っていた、しかし努力が結果に結び付かないのが世の中の道理、結果少女に向けられるのは罵倒と嘲笑。

少女は今にも倒れて泣き出しそうだった、少女の体を支えていたのは高いプライドと生来生まれ持つた諦めの悪さだった。

「ミスヴァリエール、残念だが」

ハゲあがつた男、コルベールが本当に残念そうにルイズに近寄る、膝に両手をついて荒い息を吐いていたルイズは気丈にも顔をあげて…

「もう一度だけ！もう一度だけお願ひします！」

諦められない、使い魔召喚の儀は楽しみにしていた、これで私はメイジになれるかもしないと…だが現実は無情、ルイズはずつと努力を否定され続けた、だが生来の気丈さで乗り越え泣きの一回をコルベールに要求する。

「…後一回だけですよ」

コルベールは優しく微笑みながらそう言つてくれた、ルイズは汗塗れの顔を引き締めて顔を前に向ける。

「この宇宙のどこかに居る私の使い魔よ！お願ひ！答えて！私に相応しい使い魔よ！貴方の力が必要なの、私は貴方に何も求めない！だから答えて！」

杖を振ると確かに手応えがあつたがやつぱり爆発した、周りが野次を飛ばすがルイズはそんな事気にならなかつた、聞こえたのだと了解だと言う声が…爆発の余波である煙の中から声がする。

「お前かちびすけ、この俺を召喚したのは…」

荒々しい男の声、煙が晴れてくるにつれてくつきりと輪郭が浮かび上がつてくる。

筋骨隆々の体に鋭い目つき、光を返さない漆黒のつんつん髪…全体的に言うと美青年だった、ワイルド＆クールな感じで危険な匂いがする男を醸し出している。

「そうよ！私が貴方を呼んだの！」

一つしかない緑色の目が私を捉えた時には全身が粟立つたが負け

じとルイズは答えた、男はクツクツと悪党のように笑つた。

「いい執念だ… 最悪の悪党を地獄から呼び出すかちびすけ、いいだろう、気に入った。さあ何を望む！目も眩む宝か！永久に不滅の帝國か！それとも世界そのものか！さあ願いを言え… なんだって叶えてやろ」…」

ちびすけと呼ばれたのは気に食わなかつたがなんだつて叶えてくれると言うのだ、ルイズは意を決して口を開いた。

「あんた、私の使い魔になりなさい」

目の前の男がキヨトンとした、何回か瞬きをした後。

「マジ？」

と聞いてきた。

「マジよ」

そう答えると男はゲラゲラと愉快そうに笑つた。

「俺を使役したいってか！ハツハツハ！面白いぜちびすけ… いいだろう、それも楽しそうだ、さあ契約だ」

ぐいっとルイズの体が抱き上げられる、そのまま男の顔が近付いて…ルイズの唇を奪つた。

無理矢理唇を開かされ舌を押し込まれる。

「ふあっ、な、何…んん！？」

ぐちゃぐちゃと官能的な音が自分の唇から鳴るのを聞いて抵抗していたルイズもだんだんと大人しくなり男に身を委ねる。

男が唇を離すと銀の糸がルイズの唇と男の唇を繋いだ。

「契約完了…この時より我が剣は貴様の物だ」

男の左手の甲にルーンが刻まれたがルイズはそんな事気にしている余裕はなく、ポーッとする体と頭は重力に負けて地面に座り込む羽目になつた。

「…大丈夫か？」

怪訝な瞳でルイズを見る男、だが肝心のルイズから返事はない。

「ふあ…あん、んん…」

ルイズは男の唾液に塗れた唇から情欲の声を上げるだけだ、男は

それを見て困ったように頭をポリポリと搔いた。

「オホン！これにて春の使い魔召喚の儀は終了です！」

コルベールは氣を取り直してそう言い放った。

官能的で情熱的なキスに見とれていた貴族のチェリー＆バージンズも氣を取り直して空に浮くのだった、特にルイズに声をかけるのでもなく…男は前屈みになりながら寮に向かい飛んでいく、コルベールもそそくさとどこかに行ってしまった。

「はあ…畜生、コイツおぼこか」

性交どころかキスすらしたことないであろうルイズを見つめる、まだ夢見心地気分で宙を眺めている。

顔を平手で張り飛ばして意識を覚醒させると…

「何すんのよ！」

怒り心頭と言った顔で男の胸倉を強く掴んだ。

「いつまでぼーっとしていやがるちびすけ、さつやと帰るぞ」

胸倉からルイズの手を弾いて男はそんな事を言ひ、ルイズはそれも気に入らなかつたようで地面を踏み鳴らした。

「誰がちびすけよ！私にはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエルって立派な名前があるのよ！」

そしてやけにラ行の多い名前を披露してくれた。

「そうか、じゃアルイズだな。俺は…まあクルストとでも呼んでくれ」

そう言つてふわりと浮くクルスト、ルイズが顔をしかめている。

「…どうした、飛ばないのかルイズ」

クルストが不思議そうな視線を向けてきた。

「今日は疲れたから飛ばないの！」

クルストに失望されるのが怖くてつい嘘を吐いた、クルストはどうでもいいように鼻を鳴らしルイズの体を抱え上げる。

「ちょ、ちょっと！」

お姫様抱っこされたルイズがバタバタと暴れる。

「悪いが俺は早く休みたくてな、お前に気遣う余裕はない」

そしてそのまま凄いスピードで飛び、あつと言つ間にルイズの部屋の前まで辿り着いてしまつた。

「ちょっと、なんで私の部屋を…」

「匂いだ、お前の体臭の残り香を辿つてここまで來た」

「ちょっと…？私が臭いみたいな言い方はやめなさい…！」

なんに關してもいちいち怒るな、とクルストは心の中で思つ。

「あいあい、そら、部屋に入れルイズ」

面倒臭くなつてルイズを部屋の中にほうり込む。

それからしばらくルイズはピーチクパーク騒いだのだがクルストは一切反応してくれなかつた。

「…それで、なんであなたが召喚されたのかしり」

「ん？呼んだのはお前だろ、俺は悪性英雄なんでな…強い欲望の呼び声に呼び出される」

「英雄つて…あんた平民の傭兵でしょ？」

そこまで会話するとクルストは顎に手を当てて考えた、数秒程だらうか。

「成る程、そういう事か」

一人で納得したのかコクリと頷いた。

「ま、そういう事にしておいてくれ、面倒が無くて良さそうだ」

そこまで言うとルイズの言葉に一切返答をせずにゴロリと床に横になつた、ルイズも何を言つても無駄だと理解したのか何も言わず自分も寝間着に着替えてベッドに横になつた。

そして朝、ルイズはかなり荒っぽく起こされた。

「おはようルイズ」

目の前には大男のクルスト、今は朝六時半で結構早かつた。

「おはよ…何よこんな朝早く起こして」

そして不機嫌そうなルイズを見てクルストはニヤリと笑つた。

「朝飯が欲しくてな」

眠い目を擦りながらルイズはよろよろと立ち上がつた。

「そうね…朝ごはんね…食堂が開く時間までまだあるから…」

「俺に普通の食事は意味がない」

そういうがいなや、クルストはルイズの唇を貪り始めた。

「ん！？ちゅ…ちゅる…な、何を…あ…んん…だ、だめえ…あふつ」

長いディープキスの後クルストは満足そうに唇を離した、荒く熱い息を吐くルイズを見て邪悪にわらつ。

「なん、で…」

「俺達悪性英雄はこいつやって魔力を補給するんでな、本来なら性交渉も行いたい所だが…ま、それ勘弁してやる、俺は燃費はいい方なんだな、無理な戦闘をしなければそんな事をする必要はない」

つまりは激しい戦闘の後そういう行為が必要な訳で。

「んつ…はあはあ…」

涙目になりながらルイズは唇を拭う。

「慣れろ、さもなきや俺は消える」

そう言うとクルストは部屋から出て言ってしまった、今まで気丈に振る舞つていたが、ここでルイズの涙腺は決壊する。

散々努力した魔法は使えないし、ようやく呼べた使い魔も言う事を聞かない、自分は本当にヴァリエールの子なのかも疑い…結局声を上げて泣いてしまった、隣の部屋から何事かと飛び込んできたキルケにも慰められる始末で…まあキルケと仲良くなれたのはよかつたが…ルイズはどうしてもクルストが好きになれなかつた。そして使い魔召喚の儀から初めての授業、これには使い魔が同伴する必要があつてクルストを探していたらすぐ現れてくれた、訳を説明すると嫌な顔をせずなんの興味もなさそうに頷いた。

そして今隣に座つている訳だ、机に腕を着いてぽけーっと虚空を眺めている、観察して分かった事だがクルストはやる事がなく暇な時はずっとぼーっとしてゐる事が多い。

「…何見てんだ、教師來てるぞ」

クルストに注意されて慌てて前に向き直る、ミセスシュブルーズがニコニコ笑いながら教室に入つてくる所だった。

「こんにちは皆さん、この時期は（中略）で珍しい使い魔を召喚し

た子も居るようですが…」

シユブルーズがルイズを…いやクルストをチラリと見る。

「魔法が使えないからってそこらに居た平民を連れてくるなよ…ゼロのルイズ！」

「先生！風邪つひきのマリコルヌが私を侮辱しました！」

ギヤーギヤーと喰き会うデブとルイズ、クルストはようやくかと言つた感じで立ち上がり…いつの間にかマリコルヌの後ろに居た。

「コイツを殺せばいいのかルイズ」

ニッコリと笑つたクルストはナイフの切つ先をマリコルヌの殆どない首に突き付けていた。

「だ、ダメよそんな事しちゃ！」

「？？…まあルイズがそう言つなら止めとくが…」

不思議そうな顔をしながらクルストは席に戻つてくる。

それからの授業は少し重苦しかつたがシユブルーズが氣を取り直したように鍊金し、ルイズにやらせて教室を吹つ飛ばした。

「……何か言いなさいよ」

罰として一人で掃除しているとルイズが唐突にそんな事を言つてきた。

「ん？ そうだな、素晴らしい爆発魔法だつた」

「…馬鹿にしないで！ これはね！ 失敗魔法なのよ…」

ルイズは馬鹿にされたと思ったのか顔を真つ赤にして怒鳴り散らした、クルストは首を傾げている。

「わからないなら説明してあげる！ 私はね！ どんな魔法を使つても爆発しかしないダメなメイジなの！ ゼロのルイズなの！」

クルストに掴みかかりそうな勢いで近付きながら怒鳴る、ルイズ自身ただの八つ当たりだと理解している、だけど当たらないとやつていられない。

「…ふむ」

クルストはまた何かを考え始めた、その姿がルイズのしゃくに触つたのかルイズは更に怒り始めた。

「何よ！あんたも馬鹿にするんでしょう…私はダメなメイジだつて！役立たずで…貴族の面汚しつて…」

ぱろぱろとルイズの瞳から涙が落ちる、クルストはそれを見てため息を吐いた。

「しないよ、絶対に、例え世界がルイズを否定しようが俺だけは絶対に」

それだけ言つと「ゴミを袋に詰める作業を再開した。

「何よ…どうせあんたも私の事…」

簞を持ったまま黙り込むルイズ、まだ納得出来ていないうだ。

「ふう…掃除おーわりつと」

最後の「ゴミを袋に叩き込みクルストは机の上にドカリと座る。

「…」で全部吐き出しちまえ、俺が全部受け止めてやる。そうすればお前は明日からまた頑張れるだろうしな」

パンパンと自分の隣を叩き座るように促すクルスト、そんな様子をルイズはじつと見つめる。

「…なんであんたはそんな事出来るのよ」

ようやく絞り出した言葉がソレだった、クルストはその言葉を懐かしむように頷き口を開いた。

「お前には泣き顔より笑顔が似合つからだ」

ボツとルイズの顔が赤くなる。

「な、なななな、何臭い事言つてるのよ！格好つけてるつもり…？」

「バーローおめえ、男が女の前で格好つけられなきゃ たまぶら下げて生まれてきた意味ねーよ

「げ、下品よ！」

その様子にクルストはカラカラと楽しそうに笑う。

「育ちは悪いもんでな、元気出たか」

ぼむつとクルストの手がルイズの頭に乗る、ルイズは顔を赤くしながら頷いた。

「それじゃ毎飯でも食つてこい、食事は体と心を元氣にする」

トンシと優しく背中を押されてルイズは頷いた。

「…お礼位は言つてあげる」

「おう」

「それじゃまた後でね！」

そうやつてにこやかに別れたはずだった…だがクルストはギーシュの四肢を切り飛ばして死に至らしめようとしていた。

聞く所によるとメイドを虐めているギーシュを止めたらルイズを馬鹿にしたから怒ったとの事、聞いた時少し嬉しかったルイズではあるがその後の行動でその嬉しさは吹き飛んだ、クルストと名乗つた男は一介の容赦もなくギーシュに鉄槌を下した。

エイブラハムが居た地球での歴史（前書き）

興味なかつたら読み飛ばして下さい

エイブラハムが居た地球での歴史

西暦1936年、極東の国日本で異能者の娘と天皇が婚約、異能者政権が誕生すると共に一條家、二河家、三柳家、四港家、五神家が五摂家になる

1937年、中国が満州国に進軍を開始、満州国に居る3000万人の異能者に殲滅させられる、日中戦争勃発、一週間後終戦

1938年、ソ連とナチスドイツに三柳家の次女と三女が嫁ぐ、何故かイタリアも混ざり四国同盟が結成されると共に四国民民主化開始

1939年、結婚自由法により異能者の数が爆発的に増える、ドイツがポーランドに宣戦布告、フランス、イギリスがポーランドに介入しドイツと開戦

1940年、三柳家がクローン技術を開発、大量のクローン異能者兵团が出来上がる、アメリカが日本に大陸の利権を手放すよう要求、日本はあっさりと手放す、満州の異能者日本に渡航

1941年、イギリスが沖縄を要求、突っぱねるとイギリスは日本に宣戦布告、アメリカも日本に宣戦布告する

1942年、九州にイギリス陸軍18師団上陸、全員が捕虜となる、日本軍フィリピン、ベトナムを解放、シャムと同盟を結ぶ
1943年、インド解放、日本軍口サンゼルスに上陸、連合艦隊日本へ空爆開始……空戦異能者兵团に敗北する、連合艦隊空母八隻空飛ぶ斬撃にぶつた切られ連合艦隊後退

1944年、ワシントン陥落、アメリカ軍降伏、独ソ連合軍イギリス本土に上陸

1945年、日本軍連合国側植民地をイタリア軍と共に解放、独立させる、イタリア軍七割が女性である異能者の国日本に本気で移住したがる

1946年、連合降伏、イタリア軍、ワインがないと聞いて移住を断念

1947年、中国国民党が共産党に敗北、チベットが中国共産党の支配下におかれる、ドイツポーランドの一部を自国に併合、ヴィシーフランスが独立

1948年、ソ連完全民主主義に移行、国名もロシア連邦国に改名
1949年、エイブラハムの爺さんヤハウエ・スタイマン・クルスト、アメリカ大陸カリフォルニア国で誕生

1950年、元アメリカ国三つに分けられ完全独立、カリフォルニア国に数千人の異能者が移住

1951年、朝鮮半島独立、一年で経済崩壊する

1952年、アメリカ国がカリフォルニア国と南部連合国に宣戦布告、第三次アメリカ内戦勃発

1953年、三柳家本拠地を木星に移転させる、ヤハウエ火星探査ロケットマーズを製作しカリフォルニア国火星に移転を決定、準備に取り掛かる

1954年、南部連合国降伏、ヴァチカン、イタリアに宣戦布告、日本ドイツロシア静観

1956年、イタリア陥落、ドイツロシア参戦、カリフォルニア国火星移住完了、アメリカ再び大陸の霸権を得る

1957～1970年、平和な時が流れる、ヴァチカンはイタリアを独立させドイツロシアと講話

1970年、エイブラハムの父ヨシュア・エリック・クルスト誕生、同時にヤハウエが行方不明になる

1971年、星人たるアースレスが長き眠りから目覚め神の軍勢で人類と異能者に攻撃を開始する、第一次人異神戦争勃発

1975年、エイブラハムの母マリア・マグダライタリアで誕生
1980年、ロシア陥落、ドイツベルリンまで押し込まれる、ヴァチカンアースレス側に寝返る、エイブラハムの母、マリア・マグダラ神の母体として、ヴァチカンに拉致され数年に渡り凌辱される、

三柳乙葉誕生、三柳家地球圏に帰還

1982年、ドイツイギリス陥落、ポルトガルに多数のドイツ人

とイギリス人が取り残される

1985年、中国戦線崩壊、日本残った国に打信し世界がまとまる地球連邦を確立させる、ヨシュア、マリアを救出、婚約する

1988年、ヨシュア・エリック・クルスト九人の異能者と共にアースレスを封印する

1990年、エイブラハム・ヨシュア・クルスト誕生、三柳一葉月で誕生、三柳龍葉試験管で誕生、ゼノヴィア・リドルビッチロシアで誕生、ミュウ・ライアンアメリカで誕生、リー・ウルフ中国で誕生、シユタイナー・ハウゼンドイツで誕生、エフスキー・ペトリエンコロシアで誕生、トーケマン・ジニアスイギリスで誕生、空天空日本で誕生、メリッサ・フルアメリカで誕生、後にヒーローラッシュと呼ばれる時代の幕が開ける

1993年、エイブラハム新エネルギーを発見、実用化し巨万の富を得る、イラク、アフガニスタンに宣戦布告

1994年、エイブラハム人工筋肉を開発、新エネルギーを利用した無敵バリアを開発、銀河間移動システムを開発、魔星から魔族の第一王子ポコルンべを地球に連れてくる

1995年、エイブラハム人工筋肉からパワードアーマーを開発、人間が異能者に太刀打ち出来るようになつた、ヨシュア、エイブラハムと旅行中エイブラハムを庇いアメリカ軍に殺害される、エイブラハムアフガニスタンに逃走、マリア殺害される

1996年、三柳家イラクに軍事支援、三柳龍葉含むクローン兵团がイラクに投下される、エイブラハムと龍葉戦闘、龍葉敗北、撤退する、イラク降伏

1997～2002年

エイブラハムが世界各地のアメリカ軍を撃破、殲滅、結果として住民に感謝される、アメリカ大統領何者かに一家共々暗殺される、アメリカ弱体化

2003年、エイブラハムがゼノヴィアと出会い意見の相違から戦闘：エイブラハム初の敗北、ゼノヴィアの強さの秘密を探る為に

ゼノヴィアに同行……誰に対しても優しいゼノヴィアに惚れる、エイブラハム復讐をやめる

2004年、ゼノヴィアとエイブラハム、一晩の間違いでゼノヴィア妊娠、出産する、お互い恋人はやめて夫婦になる事を決心、結婚式一週間前ゼノヴィア拉致される、結婚式前日、化け物となつたゼノヴィアとエイブラハムが対峙、エイブラハムゼノヴィアを殺害し理想を引き継ぐ

2005年、エイブラハムゼノヴィアを蘇らせる、ゼノヴィア記憶を封じられオメガと名付けられる、三柳一葉三柳龍葉と共に三柳脱走、三柳乙葉エイブラハムと接触、陰謀を開始

2006年、エイブラハム、三柳一葉、三柳龍葉、オメガを含む1990年に生まれたヒーローラッシュの子供達が東京第三防衛学校に入学、三柳一葉様々な人の死と恋人たる空天空との出会いで大きく成長、自分のクローンであるアルウェンと双葉を養子にする、エイブラハム乙葉と共に人類管理計画を発動する、エイブラハム、再び一晩の間違いでオメガが出産

2007年、オメガ、ゼノヴィアとしての記憶が戻る、体内の絶望の種が成長し絶望として変貌、エイブラハム今度はゼノヴィアを守らんとし英雄達の前に立ち塞がり英雄達を三度撃破するが四度目に敗れる、ゼノヴィア死亡、エイブラハムゼノヴィアの死体を抱き抱え崩れ始めた搭の内部に残る、エイブラハム行方不明

2008年、アースレスが再び蘇る、第二次人異神戦争勃発、世界連邦敗北、神の軍勢日本以外全てを占拠する、エイブラハムが日本に帰還する、最終決戦でアースレスを討伐、再び封印に成功する

2012年、エイブラハムコールドスリープで眠っていた娘と息子を孤児院に置いてたつた一人で平和への戦いを開始する

2013年～2022年

様々な物語があつたが割愛する

2023年、人類壊滅、エイブラハムリーナに殺害される

エイブラハムが居た地球での歴史（後書き）

まあこの後もずっと続くんですが、…正直昔の小説なんで覚えていません

せん

第七話・ハイブラハムとセブンズカラー

召喚の儀が終わり一週間が過ぎた、明日にはテファヤ、や、シエスター、やらルイズやらが入学してくるらしい、俺は特に何もせずに口当たりのいい広場の上で昼寝をしている。

「いい天気ね、ハイブラハムは今日何するのかしら」

隣に居るカトレアのおかげで眠れず仕舞いだが。

「んー…何かしようつて訳じやないんだがな、虚無の曜日とはいえ無理に出かけると出費がかさむしな」

「そ、そつ…」

少し残念そうなカトレアを尻目に俺は空を眺める、真っ白な雲が青空を悠々と流れている。

「人込みなんかに行くより、じつやつてお前とマッチタリしてた方がいいよ」

自分の額の傷痕を突きながらそつと囁く。

「もう、口が上手いんだから」

「おうおう、昼間つからお熱いねえ」

頭をペシッと叩かれた、嘘でもお世辞でもないんだがな…

「聞き覚えのある粗野な声がする、鼻を鳴らしながら答える。

「つるせー、ランサー、お前こそ一葉を口説くんじゃなかつたか？」
体を起こしながらそつ尋ねるとランサーは渋い顔をした、この様子を見るにやんわりと…やしてきつぱりと断られたな、わまあみる。

「…で、どうだつた。」この王都は、

「そうさね、なんと言つか寂しい都市だな」

「のトリステインで一番活気のある街なのだが…欲望に忠実な糞貴族のおかげで衰退の一途を辿つていてる。

「…それは…ま、仕方ないさ」

ゆつくつと立ち上がりながらそつ言つ、俺はどうすればいいのだらうか…この頭脳があれば救う方法なんぞこゝりで出でくる…だ

が革命を成功させるには血が必要なのだ、少なくとも川を作る位の量はなくてはいけない。

「そついやエイブラハムよお、トリステインで変な女にあつたんだ、弓と槍を抱えた傭兵風の赤毛の女でな」

その容貌を聞いてしばしつぶつた、まさかアイツか？　いやいや有り得ない。

「へえ、それで？」

「あまりにも美人だから声をかけたら殺されかけた」

カラカラと笑うランサーに呆れながら眉間に押される、間違いない…アイツだ、なんでここにレッドが居るんだ。

間違いなく殺したはずだ、セブンズカラーと呼ばれる賞金首……今度確認を…

「…すまんエイブラハム」

「馬鹿野郎…つけられたな！？」

剣を引き抜き飛んでくる炎の矢を弾き飛ばす、衝撃で地面が揺れた。

相変わらず野砲のような威力だ、剣を持つ手が痺れる…プラチナム・ラヴァー程の名剣なら問題はないのだが俺が今持っているこの程度の剣では持つて次射を弾いてから後十分…レッドと視線が混じり合う、俺に殺された為か復讐の光を放っている。

レッドまで直線距離にして十三リーグ…俺が全速力で駆け抜けても一十分…

「ランサー、十分以内にレッドまで辿り着けるか？」

「はっ、十分もくれるのか？五分で十分さ！」

言つかいなやランサーは駆け出す、レッドの第二射が放たれて俺に向かい真つすぐ飛んでくる。

「うらあ！」

気合いで込めて弾き飛ばす、剣が欠けた、ヤバイな…カトレアが俺の背後にいなかつたらどうとでも出来るんだが…畜生、守りながら戦うのは苦手なんだ。

俺とレッドは相変わらず睨み合っている、混じり合つ視線…レッドはゆっくりと口を開いた、唇を読みやすいよう。

「我等が悲願、この世界で実現せん、止められる物なら止めてみせよ。我等が天敵クルストよ、その半分人間となつた体で止めてみせよ」

「ヤリと笑つたレッドはさつさと逃げて行つてしまつた、ランサーもそれを感じ取つたようでこちらに引き返してきている。

レッドの最後の言葉に舌打ちする、どうやら奴らは俺が弱体化したのに気がついているようだ、元来異能者は子供でも完全武装した人間の大人を一蹴できる、肌はライフル弾を弾き返し撫でる位の力加減の一撃はたやすく人類の命を奪う、内臓が潰れようが心臓と脳が無事なら平気な異能者に比べて俺はたかがマスケットに傷つけられ強く殴らなくては人類は死なず、内臓の一つでも傷つけば命に関わる…だが。

「レッド一つだけ勘違いしてやしないか？」

「そう、奴は一つだけ勘違いをしている。

「俺は最初から最後まで格上だけには負けてねえんだよ」

半分人類となつた弱々しい体？ そんな体で宇宙最強の生物異能者に立ち向かえつてか？ 余裕だぜ、アースレスに比べれば奴、こども子犬にしか見えない。

…とは言え俺に勝ち田は殆どない訳で、気合には空回りしかしなかつた。

「説明して貰いましょうかエイブラハム」

顔をしかめたカトリアが夜遅くに俺の部屋を尋ねてきた、一葉は一応使い魔らしく振る舞つておりカトリアの後ろに立つていう…さき柄の寝巻を着て枕を引きずると言つた私半分寝てますよスタイルではあるが…一葉にしては頑張つた方である。

一葉は鼻提灯を出して幸せそうに寝てゐる、立つたまま。

「一葉さんも寝てないで起きて下さい…」

まあカトリアには知る権利があるだろう、襲われたのだから。

「ふえ～…寝てないれしゅ……すぴ～…」

嘘だ、あの状態の一葉は半分寝ている、冗談抜きで半分だけ寝ているのだ、会話も出来るしちゃんと話した事を覚えている、気配探知もしてくれている。

「もう……いいわエイブラハム、話して」

「ふむ…俺が話すより一葉に聞いた方がいいかもな、セブンズカラーカーの事は」

セブンズカラー、その単語を発した途端一葉はぱつちりと皿を開けた。

「…来ているんですね、ハルゲニアに…」

「有り得ない事だが…まあ俺と言つ事例がある」

「…セブンズカラー、異能者至上主義の過激派異能者達のリーダーです、星を支配しようと田論んでいましたけどくじけました」

ペラペラと先程まで寝ていたと思えない饒舌ぶりだ。

「へえ…そいつらつええのか?」

自分のベッドの上で胡座をかきながらランサーはそつ問ひ掛ける、一葉は頷いて返事を返す。

「はい、彼らは全員戦闘型ですか?」

戦闘型、異能者は戦いが得意な異能者と研究が得意な異能者に分けられる、一葉は戦闘型異能者だ。

「へえ…いいねえ腕が鳴るねえ」

ランサーはさも楽しそうに笑う、これはただの戦いつて訳ではないのだがね。

「うーん…なんでセブンズカラーはエイブラハムを狙ってきたのかしら…」

カトーレアは顎に手を当てて何かを考え始めた、これは俺の癖である。

「…恐らく彼女達はクルストさんを一番の障害と認知したんだと思います、クルストさん軍隊率いてれば誰にも負けないから、過大評価だ、俺だつて負ける時は負けている。」

「嘘つかないで下さい、貴方撤退する時殆ど味方の戦力温存しているじゃないですか」

一葉にじとつとした田で見つめられる。

「撤退つて味方の被害少なくする為にやるもんだからな、被害が少なければ次の戦いは有利に進む、有利に進めば被害は減る、被害が減れば」と言う訳さね」

戦略の基本だ、兵の被害は極力少なく…兵がいなければ敵は倒せない、戦車も動かないし飛行機も飛ばない。

「あ？兵がいなくても一人で暴れれば敵の前進は止まるだろ」

素つ頓狂な事を言つランサー…そんな事出来るのは一葉かお前位だ。

「エイブラハムはどうするの？」

カトリアはランサーをスルーして俺に尋ねてきた、俺はどうするか…か。

「奴らの理想を再びへし折るが、奴らも俺を消したがつてゐるみたいだしちょうどいい」

敵となつてくれた為に判断はしやすい、敵になつたら殺せばいい、味方だつたら守ればいい。

「ルイズ達が入学してくるまでは平和だろ、ルイズ達にも警告してかなきやな」

第八話・焦躁のエイブラハム（前書き）

最近暑いね、凄く暑いね

第八話・焦躁のエイブラハム

入学式が終わった次の日は休みだ、俺は部屋に籠りきり何をしていたかと言つと…

「出来た！無煙火薬！」

黒色火薬に変わる新たな火薬、無煙火薬を開発していたのだ、これでタルブ軍を強化出来る。

「ほお…これは素晴らしいですね」

「コルベールは俺の技術に興味深々だ、さてコルベールの方は…

「先生の研究も完了しましたか」

コルベールは蒸気タービンの開発をちょうど終わらせていた、次は石油の抽出技術と…後は蒸気タービンを使った工作機械の製作…忙しくなるぞ。

「ふう…私は明日の授業の準備があるのでまた今度にでも」
名残惜しそうなコルベールはさつさと俺の部屋から出て言つた。
産業革命の開始…明日にはトリスターニアに赴き女王陛下と謁見せねばなるまい、恐らく多くの血が流れる事だろう。

強大な工業力のせいで戦争も起こるかも知れない、だが…それでもこの工業力は人類を救う。

人間は弱く脆く愚かだ、それは俺が一番よく知つてゐる。

だからこそ人間は強い、弱いからこそ武器を作り脆いからこそ科学を発展させ愚かだからこそ戦争をする、そして戦争は武器を強くし科学を更に発展させる。

「ふう…」

疲れを織り交ぜたため息を吐いて椅子の背もたれに寄り掛かる、どうやら俺はこの世界が好きになりかけているらしい。

「兄様…いますか…？エイブラハム兄様…？」

「ルイズさん！抜け駆けはダメです！」

「何よ…いいじやない、貴女達私より有利なんだから…」

「エイブラハムさん！遊びに来ましたよー！」

部屋の外が騒がしい、ルイズにシエスタにテファの声が聞こえた、何かしているのだろうか…

「鍵は開いている」

そう言つて欠伸をする、用があるなら勝手に入つてくるであらうしな。

「失礼しまーす」

テファががちゃりとドアを開けた、相変わらずうらうらだ。
「ああちよつと…」

続いてルイズが焦りながら入つてくる。

「お邪魔します、あ、お兄様の部屋の匂いです」

最後にシエスタ、つまりはオイルや薬品臭いと言いたいのだろう
技術屋の部屋なんぞそんなもんだが。

「よあいらつしゃい、お茶でも出すよ、ランサー」

「俺ががよ？」

部屋の片隅で槍を磨いていたランサーが嫌な顔をしている。

「いいから手伝え、淑女を歓迎するのが紳士だろ」

そう言つて渋々と日本茶を煎れ出すランサー、よしよし、俺は
自作冷蔵庫から大福を取り出しテーブルの上に置く。

「さ、どうぞ」

魔法で椅子を引いてやる、三人はお互いを威嚇しあいながら椅子
に座る：なんだ？ 何があるのか？

お茶が入つた頃にランサーと共に自分も席につく、偉くぎすぎす
しているなあ…

「お兄様！ 今度の舞踏会私と踊つて下さい！」

シエスタがいきなり叫ぶように言い放つた、ランサーのまたかと
言つた顔が印象的だ。

「…もしかして三人共その用事？」

「…はい…」

元氣があつて大変よろしい、だが…

「すまんが俺は舞踏会には出ん、諦めてくれ」

誠に残念ではあるが俺は舞踏会には出ない…いや出れないのだ。

「えー…」

勇気を出したシェスタがしょげている、いやはや本当に申し訳ありません。

「残念です、エイブラハムさん…」

テフア、そんな捨てられた子犬のよつたな顔されてもなあ…

「ど、どうしてですかエイブラハム兄様…」

ルイズがそんな事を聞いてきた、俺は冷や汗を垂れ流しランサーは笑いを堪えている。

「……れないんだ」

「え？」

「踊れないんだ！俺！全然ダメなの！」

天は一物を与えず、俺は踊りや歌はからつきしダメなのだ。
歌えば音を外しまくり踊れば相手の足を踏み抜く、絵を描けば地獄が完成すると言つた具合だ。

「カトリアと練習もした…だが…」

カトリアの足は青痣だらけで先にカトリアが根をあげてしまった。

「そ、そうだつたんですか…すみませんお兄様」

シエスタが申し訳なさそうに頭を下げる。

「気にしないでくれシェスタ…」

悲しい気分になりながらぼむぼむとシェスタの頭を撫でる。

「……諦めません！私は諦めませんよエイブラハムさん！」

テフアの目が燃えている、まさか…マジでやるつもりなのか？

「あ、踊りはやめましょ」

よかつた、じやあ何を諦めないんだろうか。

「舞踏会には一緒に出て私達をエスコートして下さい」

ああ、成る程…そういえばカトリアも去年は大層声をかけられたらしく疲れ果てていた、ちなみに俺も前日声をかけられまくった。
皆様は忘れていらつしやるだろうが俺は絶世の美男子である、異

能者だからね。

「そうね、兄様が一緒にいれば声はかからないわ」
ルイズはそう呟いた。

つまりは話しかけてきたリオ説いてきたリオがうつとおしゃから俺をダシに断ろうと……俺は猫よけ水か……純粋なお誘いでなかつた事にちよつとガツカリして三人の案を承諾する、俺もダシに出来るしな……一応カトレアにも伝えておくかな、誤解されて三柳流の何か喰らつたら困るし。

「おーエイブラハム、俺ちつと出掛けてしまう」

ランサーはいつものアロハに着替えて槍を担いでどこかに行こうとしている。

「おう、どこ行くか知らんが行つてらっしゃい」

今日の分の小遣いを渡して満面の笑みで出ていくランサーを見送り俺はベッドに寝転ぶ。

無くなつた左腕の代わりについている義手を眺める、運よく砂漠に落ちていた義手……これは間違いなく前世の俺の義手だ、もしかしたら他にも落ちているかも知れない。

……探す気にはなれないが、そのまま眠るひつとゆつくり目を閉じたが……部屋に誰か入ってきたのを感じそつとナイフに手を当てる。入ってきた奴はゆっくりと俺のベッドの前まで来て……ベッドに腰掛けた、ん? 何故? 俺の知り合いか?

「……誰だ?」

目を開けて確認するとそこには一葉が居た。

「あ、起きちゃいました?」

「ニッコリと聖母のように微笑む一葉……一体なんなんだ。」

「セブンズカラーが現れたそうで……私の所にも来ましたよ、ホワイトが」

頭を抱える、あんな厄介な奴もこつちに来ているのか……セブンズカラーのリーダー格のホワイト……名前が白川幸江、奴の厄介な所は死ない所である。

否、ちゃんと死にはする、死ぬんだが…ひょっこり戻つてくるのだ、死体に取り付いて…奴は悪霊の異能者であり何かに取り付く事で蘇り再び行動を開始する…まだまだ厄介な所はある、例えば奴の能力だ、ペインザルーレットと呼ばれているあの能力はお互いを拘束しあつてルーレットにより体に傷をつけていく…しかもどちらかが根をあげるか死ぬかしないと止まらないルーレットだ。

「…よく無事だつたな」

「はい、ランサーさんに助けていただきました」

「…ツコリ笑う一葉…おいこらランサー、何も聞いてないぞ俺…「ホワイトいわくセブンズカラー全員がトリスティンに居るみたいですよ、この学園にもグリーンが潜入してるつて…」

相変わらず自分の計画をべラべら喋る奴である、一葉は困ったようく笑つている。

「…よし、一葉は西側を頼む。俺は東側を探す」

「やめときましぇう、下手に刺激して暴れ出されたら…」

それは考えていた、グリーン…詐欺の異能を持つ者、全てを欺く事が出来る為こういう場所での戦いでは俺達が不利だ、気がついたら一葉と俺が戦つている…なんて事態に陥るだらう。

「しかし…」

グリーンの詐欺の被害に遭う生徒も増えるだらう、それを見過ごすしかないのか…

「今は様子を見ましぇう、下手をすれば貴方はカトレアさんやルイズさんを…」

そう言われて俺は渋々と頷いた、仕方ない…彼女達だけは殺したくない、俺の大切な友人だから。

「お互い警戒だけは最大限で生活しましぇう、ランサーさんにも手伝つて貰つて下さい」

頷いて返事を出しておく、さてランサー、強敵との戦いの出番だぞ。

「…やられた」

「いへり呼んでも返事すら帰つてこない、これは…

「ええ！？」

俺の一言に一葉が驚いた。

「強力なマジックジャミングだ！位置もわからん！畜生！一葉！西を！」

頭脳が凶悪なマジックジャミングと結論を出した、ここまで強力な物を俺達に気付かれずに出すとは…

「はい！」

返事をした一葉は窓を突き破つて外に踊り出た、俺も後に続き東側に走り抜ける、気配探知に寄るとランサーの近くにルイズとシエスタの気配があるので…急がねば…

第八話・焦躁のエイブラハム（後書き）

クーラー涼しいいいいいいい！

第九話・所詮貴様は力不足（前書き）

いろいろと読みづらいです

第九話：所詮貴様は力不足

よりもよつてグリーンがここに来ているとは…最悪だ、カトレー、ランサー、シェスターが敵に回る事を想定しなくてはならない。今にも雨が降り出しそうな程の最悪の天気の中平原を駆け抜け奴の姿と…倒れたランサーとカトレー、奴の前に仁王立ちするシェスターを視認する。

「あろゝはゝクルスト！いい天氣だねえ」

日差しが俺の肌を焼く、クソッタレ、こんな時だつてのにいい天氣だ。

「ああそうだな…テメエ、カトレーとランサーに何をした」奴を睨みながら背中の剣にゆっくり手を延ばす。

「何つて彼らは勝手に戦つただけで…それよりクルスト、何故剣を持つていらないんだい？」

急いであるはずの剣に手を延ばすが虚空を切るだけだった、馬鹿な…俺が剣を忘れるだと？

「だつたらシエスターは必要ないね…僕がやろつ」

動かないシエスターの前にグリーンが出て手を前に出しコラコラと動かす、俺も猫足立ちで手刀を構え奴の動きを待つ。

「行くよ？蛇刀百連撃！」

奴の手が蛇のようにのたうち無数に襲い掛かってくる。

「ちつ、三柳九十九斬手刀！」

こちらも無数の抜き手で対抗する、お互いの技をぶつけ合い決めの一撃のさい奴の首に抜き手を延ばすが切れたのは首の薄皮一枚、奴の手が俺の額に迫る、首を上にのけ反らせてかわす。

「はつはつは！流石だよクルスト！」

げらげらと笑いながらグリーン…いや嘘つきはそつ言い放つ、何かがおかしい…違和感が…

「そらどんどんいくよ！蛇刀拡散手！」

奴の手から無数の蛇…いや蛇に見える攻撃が放たれる、蛇刀拳、五本の指と握力で相手を切り裂く異能者拳法、蛇のような動きで相手を幻惑しつつ攻撃出来ると言つた一対一専門の拳法だ。

一見強力ではあるが…

「ふつ！」

地面を蹴り嘘つきに肉薄する、奴の蛇刀拳が俺の体を引き裂くが威力不足だ、握力を使う為に実は危険な有効打面接は少ない、掠れば皮膚と僅かな肉は裂けるが…俺達異能者にとつてそれはたいしたことないダメージだ。

「三柳千枚通し！」

俺の手刀が奴の心臓を貫いた、案外呆気なかつたな…

「あーあ…なんて酷い事を…シエスタちゃんを殺すなんて」

俺の腕の先で力無く垂れる手足は男の物ではなく女の肉付きのいい手足だつた、顔を上げると口から血を垂れ流し力無く体を揺らすシエスタが…

「あ」

腕を引き抜くとシエスタは地面に倒れ込みそのままぴくりとも動かなくなつた。

「あ、あああああ…」

シエスタの骸の隣に膝を着く、殺してしまつた…シエスタを…「可哀相に…あんなに『やめて下さいお兄様！』なんて私を殺そうとするんですか！正気に戻つて下さいお兄様！」つて必死に声をかけてたのにね

ケラケラ笑いながらグリーンが近寄つてくる……やれやれ、俺も中々名演技だつたな、背中の虚空を掴み嘘つきに振り下ろす。

「ギツ！？」

ちつ、浅い、腕一本しか落とせなかつた、嘘つきは後ろに飛びのいた。

「何故だクルスト…何故僕の口先八寸が通じない…！」

傷口を押さえながら唸る嘘つき、俺はその様子を見て鼻で笑つて

やる。

「確かに前世貴様の能力に苦しめられた、だがな。俺には一度見せた技は通用しねえんだよ、俺の能力を教えてやる、バレても対策は取られないしな」

「コツコツとこめかみを指で叩きながら一ヤリと不適に笑つてみせる。

「オールアンサー、俺の能力さ、貴様の嘘を現実と誤認させる能力の対策は既に済んでいる」

そういうとグリーンは苦虫をかみつぶしたような顔をして能力を解いた。

「……僕の負けだ、だが聞かせて欲しいクルスト、何故君はこんなゴミのような世界を守るうとする？トリスターニアの商館で売られてたエルフの少女は泣いていた、あの娘が何かしたの？なんであの娘があんな酷い目に会つの？ねえ教えてよクルスト……彼女は誰を恨めばいい？彼女は何を嘆けばいい？変態貴族に買われた後あんな酷い事をされて……どうして君は僕達戦友と戦つてまであんな奴らまで守ろうとする？」

嘘つきはこんな奴だ、誰かの為に泣けて誰かの為に戦える……確かに世界一優しい嘘つきと呼ばれていたな。

「質問で質問を返そう、その娘を助けてお前はどうしたい？貴族はお前達を怨むだろう、逆恨みつて奴だ、敵がゼロになるまで戦い続けるか？何故そんな無駄な事をする？」

「無駄！？無駄だと！？だつたら彼女はあのままにしろって事か！？」

？

「その通りだ、人身売買……トリステインではそんな悪法が罷り通つていて、そんな悪法の上に胡座をかけて儲けてる肩が居る……お前が本当にエルフの小娘を助けたいのなら……あの時みたいに俺についてこい、策がある」

嘘つきは俺の顔をまじまじと見て來ている。

「た、助けられるの？」

驚いた表情に対して昔のよつに一やりと笑つて見せる。

「俺を誰だと思っていやがる」

いつも見たく、ハイブラハム・ヨシュア・クルストらしく笑つてやる。

「忘れてたよ、君は… そんなのが嫌いだつたね」

嘘つきが苦笑する、やつたね、外交官ゲットだ。

嘘つきは戦いにはとことん向いていないが交渉事になると無敵の力を発揮する、嘘つきが口先ハサを解くと倒れていたカトレアやランサーは消えたが仁王立ちするシエスタは変わらない。

「…嘘つき、シエスタになにをした?」

「え? 君が夜忍び込み激しく彼女を求めあう幻覚を見せてるだけだけど」

嘘つきの傷口に蹴りをかましてやると潰れた蛙のよつな声をあげた。

「俺の可愛い妹になんちゅう夢見せてやがるか貴様!」

傷口を押さえながらからかうと笑う嘘つき、奴は空に浮かび上がる二二ヶ口リと笑つた。

「ありがとうクルスト、僕は傷が治るまで再び学院内に潜伏するよ、いつも君の側に居る。用があつたら呼んでくれ」

「…おう」

返事をすると嘘つきは消えた、さあいろいろときな臭くなつていて、どうやら嘘つきと他のセブンズカラー共は別の目的で動いているみたいだな… セブンズカラーの中で一番戦闘能力が低いのが学者型の嘘つきだ、遠距離中距離専門のレッドも低い方に分類される… それにセブンズカラーだけじゃないな、ここに来ているのは… どうやら動く必要がありそうだ。

「あ、あれ…夢?」

シエスタが目を覚ましたみたいだ、頬が上気していてそこないエロスを感じる… いかんいかん。

「シエスタ、よく聞け」

シエスタの両肩に手を置いてシエスタの瞳を見つめる。

「俺はこれから王都に向かう、その間ここは手薄になるから…頼んだぞ、いいか？赤青黄色以外とは絶対に戦うな、一葉に任せておけ。じゃ！」

魔力で体を浮かせて気力を推進剤として王都に向かう、この速度なら十分つて所かな：しかしどもおかしい：こんな上空にまで焦げ臭さが漂つているなんてまるで都市でも燃えているような…

「うおおおおい！？燃えてる！？トリスターが燃えてる！？」

おお、偉大なる我が祖国の王都よ、曉に燃えてるとかそんなレベルの話じゃなくてマジで燃えてるよ町全体が、一体何がと言つても貴族の軍隊相手にここまで出来るのはセブンズカラーしかり得ないしな…王都の中に着陸し辺りを見渡す、敵影無し…どうやらすでに去つた後のようだ、王城に向かおう。

「我らが希望の七色バンザイ！…」

大通りで誰かがボルトアクションライフルを掲げて叫んでいた、ゴミ箱の中に身を隠し様子を窺つて見る…見た所平民階級の奴らみたいだが…なるほど不真面目そうな顔だ、どうせ自分が原因で仕事に就けないのを貴族のせいにしてた口だな…職人など真面目に働いていた平民の姿は見えない。

「平民を弾圧する貴族に鉄槌をー！…」

しかし厄介な物を持つてゐる…あれは世界第一次大戦の人間の武器…対異能者用弾頭ライフルだ、アメリカのスプリングフィールド社製の高性能銃だ…当たつたら人間なんざ木端微塵になるぞ…丁度ゴミ箱にも隠れだし変装していくかな、マントをナイフで切り裂き服に満遍なくゴミをくつつける、着け髪をつけて髪の毛を白く塗れば…どつからどう見ても老人の物乞いだ。

「ゴミ箱から出てふらふらと平民の集団に近づく。

「あん？なんだこの汚えジジイは…」

一人の平民が気がついた、周りの仲間を一人ほど引き連れてこちらに向かってきている、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて俺を

取り囲む。

「…パンを分けてくれないか若いの」
声を掠れさせて呴くように言つてみる。

「くせえんだよこのジジイ！」

銃を振り上げて俺を殴ろうとしてくる、腰に手を伸ばしナイフを引き抜く、奴の首にナイフを突き立ててライフルを握る、照準は右の奴…そのまま引き金を引くとそいつは粉微塵に吹き飛んだ、状況を理解した左の奴がこちらに銃を向けようとしている、ナイフを喉から引つこ抜き左の奴の頭に投げた、スイカに包丁を叩きつけたような音がして動かなくなつた、奴らの体から弾とライフルを奪い体に身につける。

「ステルス」

杖を振つて隠密魔法をかける、姿が消えて足音すらしなくなる完全隠密魔法をかけて街中を急ぐ…略奪に加え暴行…やつてる事はまるで反政府ゲリラだ、正義も糞もない…余談ではあるが戦争に正義は必要だ、正義がなければただの犯罪となる、戦争はあくまで外交の最終手段だと言う事を覚えておいてほしい、俺達異能者ならまだしも不完全な人間だつたら必要な事だとは理解している…がいつもながらにやりすぎだぜヒューマン。

トリステイン城の前には多数の平民が集まつてゐる、門を破ろうとしているみたいだが固定化のかかつた石壁や鉄の門に四苦八苦しんでいる、ならばとうつぶせになりライフルを構えバイポッドを地面に突き立てる、距離は七百メイル、北西からの風…風速ハメイル、残弾八十五、目標一百人…余裕過ぎてあくびが出るぜ。

「第一射…」

息を止めて引き金をゆつくり絞る。

「命中、死亡十八人、負傷二十七人」

ターンボルトを起こして次弾を薬室に送り込む。

「第一射」

再び目標に狙いを定めて引き金を絞る、俺が人間相手に弾を外す

わけでもなく…スコープ無しの狙撃でも俺は必ず敵を殺す。

「エイブラハム、私の部下を殺すのはそこまでにしていただこうかな」

後頭部に当たる冷たい金属の感触…いつの間に後ろに回り込んでやがつたこいつ…ライフルを手放してゆっくりと立ち上がる、奴もそれに合わせて刀をゆっくりと動かす。

「いよう、久しぶりだな。狂った姉よ」

「そうだな久しぶりだな、愚かな弟よ」

異能者には珍しい黒髪の女…俺の姉クラリス・バーナジア・クル

ストが俺に刀を向けて立っていた。

「姉…いや、ブラックよ、聞いていいか？何故こんな事をする？」

クラリスはにっこり笑うと俺に刀を向けたまま俺の周りを歩き始める。

「再び復讐の時を得たんだエイブラハム、見なよ人間の愚かさをさほらあそこなんてあんないたいけな少女に三人がかりで…」

…そんなクラリスの様子に舌打ちする、彼女は紛れもない俺の姉であり血の繋がった家族でもあった。

「俺に殺されて星に還つても尚貴様は復讐を望むか…父さんはそんな事望んではない！」

「黙れ！お前がいなければ父が死ぬ事もなかつた！何故産まれてきたんだ、この疫病神！！」

切つ先が薄皮を貫き血が刃を伝う、どんよりとした雨雲はたっぷりと貯め込んだ水蒸気を凍らせて地面に向かつてそれを吐き出せた、雨が屋根を地面を俺を姉を容赦なく叩く。

「言つたろうクラリス、俺は平和の為に産まれて來たんだ」

エイブラハム・ヨシュア・クルストの様に笑つて見せる、姉は俺から十二歩距離を取つた、俺は背中の剣を引き抜き正眼に構える。

「気に入らない、私は高慢な貴様が気に入らない！」

クラリスは大声で叫ぶ、俺が気に入らないと。

「気に入られようが気に入らなかろうが俺の知つたこつちやねえ、

俺は俺の道を行く…さあ

笑顔の化粧 ≪ smile make

『の時間だ』

クラリスを中指で刺してにやりと笑つて見せる、クラリスは歯をむき出しにして眉間に皺を寄せ俺に対する怒りを隠そつともしない。

「それが高慢だと言うんだ！エイブラハム…！」

一足で音速を超え、俺を碎こうとクラリスが接近する。

「高慢だらうがなんだらうが、ゼノヴィアの正義を俺は貫き通した…今まで、これからも…」

黒塗りの刀と白銀の巨剣がぶつかりあう、衝撃で辺りの家屋が吹き飛ぶ、そのまま鍔迫り合いを続ける、やはり俺の筋力は全盛期と程遠い…クラリスにすら力負けしそうになつてている。

「エイブラハム！お前は父を殺した人類が憎くないのか！」

クラリスの剣を弾き、距離を取り今度はこちらから接近し横薙ぎに剣を振るがいなされた、体制を立て直すために蹴りを放つ。

「ああ、憎いね！犠牲の上でしか自分達の正義を語れない愚かな種族さ！」

蹴りを食らつたクラリスは僅かにバランスを崩したがすぐに立てなおした、俺もその頃には再び剣を構えている、クラリスの手数に任せた剣技を確実に防御し隙を探す。

「ならば何故！ここで人類の味方をする！」

俺の眼帯に刀が掠り、どこかに飛んでいく…ああ、アニメスから貰つたお気に入りなのに…

「それが彼女との約束だからだ…なんてな、ここの人間もやつぱり例にもれずクソッタレのゴミ野郎ばかりだつたさ、だがそれでも俺はあんた程人類に見切りも着けてなきや嫌つてもいない」

つとかつこつけてみるがヤバいなこれ…奴の打ち込みでもう手に感覚がない、それに比べてクラリスはめがつさ元気だ、俺このまま負けるかもしれん。

「ほざけ偽善者あ――――――つ――！」

「偽善すらできなくてめえだけには言われたくねえええええ！」

「氣合を入れてぶつかつてみたがどうやら力不足だつたようで俺の剣は遙か天空を目指し飛んでいつてしまつた。

「終わりよエイブラハムッ…！」

クラリスの刀が俺の左胸を貫いた、焼けるような痛みと共に肺から血が溢れ出してくる。

「がつ！？カヒュー…カヒュー…」

息が満足にできない、吸つても吸つてもくるしい。

「…ちつ

刀が引き抜かれ俺は重力に従つて地面に倒れた、血が水溜りの上に広がっていく、霞む意識をつなぎ止めクラリスを睨む。

「どうしてそこまで弱くなつたエイブラハム、そんな貴様を殺しても私の気は晴れない… そうかお前異能者じゃなくなつたな？… ははははは、傑作だ、最高だエイブラハム！私はなんの為にここに来たんだかわからなくなつてきたよ」

クラリスは悲しそうに笑うとこちらに寂しそうな目を向けて去つて行つた、俺はその姿を見てすぐに意識を失つた。

「うつ…ぐッ…」

痛みに目を開けると知らない天井だつた。

「先生！五番の患者さんが起きました！」

女人の声が聞こえた、視線をそちらに向けると白衣の人間が走つてきているのが見えた。

「気分はどうかね？名前は話せるかね？」

白衣の人間は額に汗を浮かべながらそう聞いてきた、見たところ

医者の様だが…

「最悪だ、胸の傷が痛い…名前はエイブラハム・ヨシュア・クルスト・ド・タルブ…」

ふむふむと白衣の人間はカルテを書いている、畜生痛み止め位よこしやがれ。

「しばらくは安静にしててくれよ、私は他の患者を見て回るから」俺にカルテを押し付けると医者はそそくさと出ていった、部屋の机に置かれている剣と杖を装備して窓から外に出る、俺の気分と違つていい天氣だ。

ようようとおぼつかない足取りでトリスターニアを歩いていく、どうやらあの平民共は鎮圧されたようで広場に斬首された首が大量に並べてあつた、腐敗具合から俺は一週間以上寝ていたらしい、それを横目に俺は酒場を目指す。

ドアを開けると軽やかなベルの音が鳴り響いた。

「おや、エイブラハムじゃないか」

そこにいたおひげが眩しい紳士、ワルドと見どがめ隣に座る。

「何があつたのかい？」

ワルドは俺の様子を見てエールを呷る手を止めた。

「別に」

掠れた喉から絞り出した言葉はたつた三文字だった、運ばれてきたエールを啜る。

「…ふむ、言いたくないなら聞かないさ、だがエイブラハム、君はそろそろ僕に恩返しさせてくれてもいいんじやないか？君には母さんを助けて貰つた借りがある」

「…ならば頼みがある、ワルド、お前が見つけた砂漠の巨大な銀色の遺跡に案内してほしい」

俺の言葉を聞いてワルドは目をぱちぱちと瞬きさせた。

「あんなよくわからない遺跡にかい？まあいいけど…」

ワルドの返事を聞き俺は、一回満足した、まあ力を取り戻そう、全盛期の体を…異能者の体を。

第十話・リメンバー・ア・ヒーロー

エイブラハムが行方不明になつて一ヶ月が立とうとしていた、人類平等主義のセブンズカラーはトリステインに宣戦布告しその戦火は力のない女子供にまで広がつていつた、トリステイン軍は平民が持つ新たな銃に苦戦を強いられ敗北に敗北を重ねて行つた。

残つているトリステインの国土はタルブ領地、魔法学院、そして首都のトリスターニアだけだつた、トリステインは求めていた、英雄を…戦争を終わらせるだけの力を持つた英雄を…

「お父様…」

先日のヴァリエール領襲撃の際、ヴァリエール公爵は負傷、王都の軍人病院に収監されているが意識はいまだ戻つてはいないらしい、私の主であるカトリアは毎日こうやって祈るだけだ、やっぱり人間の雌は戦う力はないと思われる。

「カトリアさん、あんまり根を詰めないでください」

なんというか娘が増えたような感覚だつた、私は大軍を指揮することはできない、精々小隊指揮かその程度の教育しか受けていない、ランサーはたつた一人中央戦線で敵を引きとめている、彼は私に語つてくれた、アイルランドの英雄セタンタだと、まさに伝記通りの活躍である。

「…伏せて！」

カトリアを押し倒して場に伏せさせる、学院内に備えつけられた聖堂が揺れステンドグラスが碎ける。

「何！？何！？」

轟音の中カトリアの金切り声が聞こえてくる、頭を上げようとしているから無理矢理頭を押さえつける。

「敵の砲撃です！頭下げて！絶対に動いちゃダメです！」

砲撃は五百発を境に止まつた、えつと…たしかクルストさんが言うには次弾発射まで一分位はロスがあるからその間に逃げろつてい

つてましたね。

カトリアを抱きあげてボロボロになつた聖堂から飛び出す、そして急いで掘られた塹壕の中にカトリアと共に飛びこむ。

「あ、一葉にちい姉さま…ご無事だつたんですね！」

ルイズが青い顔で必死に笑つてゐる、魔法が届かない距離からの砲撃は怖いだろうに…私は意を決して刀をひとつつかむ。

「ちょっと敵をやつつけてきます」

「か、一葉？」

「大丈夫、カトリアさん、今日は枕を高くして寝られますよよかったですね」

そう言つて塹壕を飛び出し崩れかけた壁に飛び乗り田を凝らす、砲撃陣地はここから二十リーグ先に鎮座してゐる、歩兵牽引式の野砲だから機動力はゼロに等しい…そこからライフルを持った歩兵がばらばらに進軍してきているから…そうですね、野砲を全て潰した後歩兵をバックアタックしても十分すぎるほど時間は得られます。

「いってきまーす」

そう言つてカトリア達に手を振り砲撃陣地に向かつて水平跳躍する、腰の刀の鯉口を切り目を閉じる、明鏡止水の境地…クルストに教えて貰つた最高の技能をフルに活用し刀を引き抜く、一撃で五百門の野砲を切り捨てる…どうやら私の剣術は鈍つてゐるようだ、本來なら砲兵の足も落としている予定だったのだが…一息で砲兵達を切り刻み歩兵の後ろに向かつて走つていく。

「シャツ！」

急所を外した一撃で複数人の意識を刈り取る、気付かれる前に半分以上を仕留める自信はある。

刀を鞘に戻してタメを作る、目を閉じて明鏡止水の境地に近付ける。

「三柳飛翔桜舞乱斬」

刀を鞘から解き放ち、再び鞘に戻す、まだ何も起こらない、この技は空から桜の花びらが舞い散るように相手を切り刻む。

「終わりです」

パチンと指を鳴らすと同時に阿鼻叫喚のコーラスが開始される、いつ見てもこの景色には吐き気を催す。

「ごめんなさい、でもこうしなければ貴方達がカトレアさんを殺していた…だからごめんなさい」

死亡者はいない、動けない程度に痛めつけられた兵士達が足元で呻いている、彼らに頭を下げるその場を後にする。

所詮ただの自己満足、私は誰一人として殺せない臆病者だ、自分が嫌になる…自己嫌悪に陥る前に遙か彼方から飛んでくる黒い飛行物体に目を向ける、やつぱり来た。

「ちつ！遅かつたか…脆いから人間は嫌いなんだ」

舌打ちをするその人はクルストの姉たるクラリス…私との直接の面識はない、だが噂は聞いている…過激派に属している為共存派だった私を狙っていたという噂だったがクルストに敗れ彼女は星に還つた。

「おやおや…これはこれは…悪名高き微笑み三歩の一葉さんではないですかあ！」

なんと言つたかこのクラリスと言う人物はクルストにそつくりだと思つ、両手を広げ胸を前に突き出し不敵に笑つ…まんまクルストである。

「そういう貴方は卑劣なクラリス様、お元気ですね」

とりあえず挨拶として返事をしてにっこり笑つておく、クツクツとクラリスは笑い私に刀を向けてきた。

「いやあ光榮だ、まさか英雄の一人に皮肉を言つていただけるとは…ぶち殺すぞ糞野郎」

「嫌ですねえ、私は女ですよう」

チリッと首筋が熱くなる、どうやら向こうはやる気みたいだ。

ぶつちやけ私はやる気なんて皆無なのだが仕方なしに刀の柄を握る、私は後の先の極み、向こうは先の先…相性はお互い良いと言えるだろう、ゆっくり腰を落として鯉口を切つた。

「シャオッ！」

クラリスの刀が袈裟に振るわれる、それを刀の中心で受けて刃の上を滑らせて流す。

「シッ！ハッ！」

微妙にリズムを狂わせた一撃を放つクラリス、そこらの使い手ならこれで終わりであろうが私には通じない、クラリスの刀の平をぶつたたいて軌道を反らす。

「ちつ！やっぱあんたのが上か」

クラリスは後ろに飛びのいてこちらを睨んでいる。

「まだやりますか？次は…」

刀を翻して日光を反射させる。

「斬ります」

そう言い放つとクラリスは非常につまらなそうに舌打ちした、刀を納めて両手を上に上げた。

「わかつたよ、今日の所は引いてやる…だけど覚えてろ、いつか貴様の喉笛食いちぎってやるからな」

私を指差してそう言い放った。

「ええ、楽しみにしていますよ」

ニッコリ笑つて返事をしてやる、クラリスは殊更つまらなそうに舌打ちして遙か彼方に走り出していった。

「ふう…」

久しぶりに本気で動いたら疲れた、どうやら私も年らしい。

「ぐつ…がつ…はあ…はあ…」

痛い…全身が痛い…鉄製の床の上でたうちまわる、体を異能者

の体に変化させた、やはりこの研究所は昔アメリカが作っていた異能者鍊成所だつた、研究は一応成功、人間は異能者となる事が出来たが一十四時間年中無休で全身を襲う激痛に耐え兼ねて自殺するか気が狂うかの一択だつた。

「あぐあつ！…げほつ！げほつ！」

鉄製の床は血まみれだ、俺の体は全てが異能化していない、まだ人間の血を追い出している最中であり床は真っ赤になつていて。

まるで全身の皮膚を焼けたナイフで剥がされているような痛み、内臓には溶けた鉄が波をうつているような感覚がし全身の骨は粉碎される痛みを味わう。

だが脳だけは元々異能者の物だつたようでここに痛みはない、充血し真っ赤になつた視界は研究室をノイズ雜じりに映し出している。

「… - - - - - !」

自分が何を叫んだのすらわからなくなつた、全身から噴き出す血は止まつたようだ…激痛はまだまだ終わらない、あまりの痛みに俺は意識が遠退くのを感じた。

「…ブラハム、エイブラハム！目を開けろ！」

誰かに揺すられ激しい痛みで目を開ける。

「…ワ、ルド？」

毎日痛みに堪える事に精一杯で日にちの感覚なんぞ消えうせていた、見覚えのある友人の姿、彼がここに居ると言う事は約束の一ヶ月後になつたようだ。

「…君の髪は黒かつたと記憶していたが」

ワルドは怪訝な顔をしている、ゆっくり立ち上がり鏡を見ると俺の黒髪は真っ白になつて、エメラルドグリーンだつた目は金色に輝き筋骨隆々だつた体はほつそりとしてしまつた。

「…どうやら前世の妻が力を貸してくれているみたいだ」

この姿はまるで俺が愛したあいつの姿だつた、ほつそりした体に白い髪、星のようにキラキラ輝く金色の瞳…だが俺の眼はまるで地獄の釜のようにギラギラとしている。

「… そうか、それじゃあ行こうかエイブラハム」

「ああ、全てを守る為に」

「トリステインの為に」

ワルドと拳をぶつけあって外に出る、さて急がなくては… 痛みを押さえながらトリステインに向かう

よりのべきと【せかここかかなし】(筆者)

読みにくです、殆どひらがなです、99%位平仮名です

おとこの世界【せかここなかなしごとく】

「こわなへこわなあるとや、おとこのじせりもだましだ。
おかあさんとおとこの間にあこねれど、おねえさんとこにひよと
だけしひとやれど、おとこみわまにひよくらぐれでうまわまし
た。

「こわなへこわなあるとや、おとこのじせりもだらしこへねる
おとこははつせんしもした、じんじこせみんなんよひびきもした、はど
じんじこせやれしことばかりじやあつまわせ。

おとこのじせりもだらしことばかりじやあつまわせ
おもこもした、かれどおとこのじせりもとおかあさんこもも
られでこてわるこひとせおとこのじせりもせんじした、おとこ
のじせじんじにたこしとおとこつわるこひといたずなました。

「お母。おなかじんじよ、せくのむとひわことおかあさんがな
にをした、せくがなにをした」

おとこのじのなみだながりのじせりもだらしことせりかう笑こ
ながらじたえます。

「おまえのおやじとおふくらせおまえをひんだつみでてんぱつがく
だつたのだ、おまえはつまれてきせこけなかつたのだ」

わぬこひとせじんじのえらこらじドした、おとこのじせりも
おじつましだ。

「じんじよ、おまえたちがやこまどいのまこでむかどおひかだと
せじひなかつた、やこまどみにここのひなせせなるかわせりのだい
ちにたつことはあるわれなこ、せくがおまえたちのかみにかわりお
まえたちをだんぞこしてやう」

おとこのじがやつこつよつよつてをひえにあげるとたくわさんのこ
んせわがわるいひとのむづかしきけめをひえにあがした、わぬこひとせしん
でしまこました。

かたわせつちました、でもおとこのじのわせはまわせ。

「 わへ とじさんこのちをだこひながせ、 わへ とじさんこのたまし
こをせしにかべむ 」

わへしこべがおだつたおとこのじのむもかげはまつません、

ねとのじせおとこのゆづなかおでじさんこをじゆじこをあす。

「 ねやめなれこねのじよ、 つももなにものをじゆじせなつまむ
ん 」

こつやべねりじるこをひきまうからじうじしてこたおとこのじ
のあえにじりこかみのおんなのじがあらわれました。

おんなのじはとこもきれこでまるとじわばなしにでてぐるおひ
われまのゆうでした、 ですがにくしみにじるくがとらわれたおとこの
のじにせねそなのじのすがたがよくみえまわらでした、 おとこのじ
はわるわうじわうじわうじこはなちます。

「 にんげんはやくぞこじてこるだけであくだ、 わるこやつだ、 だか
りせくがじゆすんだ 」

ねとのじにせむかしあつたやれつせじるくかわせこわせくわ
てこました、 おんなのじせそれをみてひびくかなしこれふんになり
ました。

「 かわこやうなひと、 わたしがあなたをたすけてあげます 」

おひめわめのよくなおんなのじはおとこのじのためになきながら
そつここました、 ねとのじせなぜおんなのじが泣いてこむかわか
りませ。

おとこのじはおんなのじにつるをむけました、 おんなのじせか
なしうながおをするとびかひかのじりこねねあなつるをかまへ
ました、 ねとのじはわらいます。

「 わのつるわはきれこすわぬ、 おまえたいしてつよくないな 」

おとこのじはいかりのあまつれいせになはんだんりよくも、 する
どこかくわつがんもつこなつてこました、 よくみればわかつたはず
です。

おんなのじのたんはぴかぴかでしたがよくみるとちこわなせじせ
れがいくつかあつてあこたなきすがたくわんあつました。

ねむるのじせんじるほどおんなのじにあつからつましたがおんなのじせとじせつとじのじせまひしました。

「やんなにぶじさんゆびじやわたしこせやうとひつたひれません、それではあなたをすくいとしましょ」

おんなのじせわいれいのえがおでやつここます、あつわつまたおとじのじせくわをほかとあつました、まけてれいせじになつたおじるのじのじせとじもわれこなおんなのじがうつつてこたのです。

「ふれせぬな、おまえにたすくじやうじとなんかなこ」

ねむるのじせつとでれでした、やくわいふたつはこつたいびうなゐのやう... ひづれせまたじそど

よいじのえほん【せかいいちがなしいえいゆ】（後書き）

エイブラハムのその後とエイブラハムが所持していた武器元となつた小説常闇学園では死亡後にも数回出でてきます、エイブラハムは死後妻と一緒に墓：といつかダンジョン化した遺跡に埋葬されますが本人の魂は悪霊となつてそこを守り続けています。

エイブラハムが所持していた武器はいくつも存在します、中にはエクスカリバーなどにも劣らない武器もあります、好んで使用していたのはプラチナム・ラヴァーと銘が入つた巨剣とピースメイカーと呼ばれたクレイモアでしょう。

プラチナム・ラヴァーは正に名剣です、元はエイブラハムの妻が使つていた物ですが理想と共にエイブラハムに受け継がれたみたいです、ピースメイカーは小説にも出てきていますが名の通り平和を作り出す事が出来ます。

ピースメイカーは平和への一撃と言う大切な物を犠牲にして打ち出す必殺技があります、エイブラハムの場合は妻との思い出と幸せな未来を失つて打ち出していました、発動すればどんな敵でも一撃で殺せる威力を誇ります、簡単に言えば防御不能で回避不能で必ず相手を死に至らしめる事が出来る程度の技つて事です

第一章最終話…わが身がハーブラハム、ここにちはクルスト

揺れる馬車の中で薬煙草を吹かす、この煙草には強い鎮痛作用があり今の俺の体には打ってつけの煙草だ。

「お姫さん、見えてきましたぜ。トリスティン魔法学院だ」馬車の運転手がそう言つてきた、煙草を口にくわえてフードを被る。

「ううでいい、ありがとうな」

運賃に少し色をつけて渡すと運転手は喜色満面の笑みで去つて行った。

そのまま学院に向かつて歩いていく、酷いなりだつた、草原だった学院の回りは穴ぼこだらけで壁は所々崩れかかつてゐる、鉄製の門は吹き飛ばされて門としての機能を失つてゐる、その門の前に椅子にもたれ掛かつて眠る女が一人…

「……おかえりなさい」

女はうつすらと目を開けると口に微笑を浮かべて俺にそう言つてきた。

「…ただいま、あいつらを守つてくれてありがとう」一葉

そう返事を返すと一葉は満足したように微笑み、再びコックリコッククリと船を漕ぎ出した。

恐らく一ヶ月間毎日戦闘していたのだろう、かなり疲れているようだ、弾丸が掠つたのか体のあちこちに薄い切り傷がある。一葉に向かつて深々と頭を下げるから学院内に入る。

「…補給不足による餓死者数名か」

幾人かの死体が転がつてゐる、どれも瘦せ細り酷い有様だ、たゞやはり少ない補給も貴族に全て回つてゐるようで死んでゐるのは平民だ。

「ちつ」

気に入らずに舌打ちをする、とりあえず自室に向かつてみよう…

死体や痛みに呻く兵士達を横目に部屋までの階段を足早に歩いた、自室の扉を開けるとそこには…

「…ダレ?」

弱り果てたカトリアが俺のベッドを占拠していた。

「…俺だカトリア、随分と瘦せたな」

俺を見るとカトリアはヨロヨロと立ち上がった、倒れそうになるのを見て思わず手を貸した。

「エイブラハム…助けてエイブラハム、大変なの、シエスタが大変なの…！」

思わず首を傾げる、あの糞強いシエスタが一体ダレにやられると言つのだろう…

「よし、案内してくれ」

だが心配なのも事実、カトリアを抱き上げて部屋の扉を蹴り開ける。

「彼女の部屋よ、急いでエイブラハム」

頷いて男子寮の窓からそのまま女子寮の窓を突き破る、シエスタの部屋の扉を蹴り開けるとそこには…

「あ、ちい姉様と…誰よあんた」

怪訝な顔をするルイズと包帯だらけのシエスタが居た、カトリアを下ろして体を覆つっていたフード付きマントを脱ぐ。

「エイブラハム兄様！今までどちらに…」

「話は後だ、今すぐアルコールと綺麗な布を持つてこい」

「はい、後で絶対話して下さいね」

ルイズに頷いて返事を返しシエスタに近寄る、まるで拷問されたかのような傷痕、どうやらシエスタはセブンズカラーの一一番厄介な奴と戦つたらしい

「意識は無し、脈拍微弱…さらに失血、傷は…裂傷が56ヶ所、火傷が皮膚の26%、右肩粉碎骨折に頸椎破損、大腿骨複雑骨折…頭蓋骨に亀裂、左の足も脱臼しているな」

酷い怪我だ、この時代の遅れきつた医療ならまず助からないだろ

う…だが俺に不可能はない。

「よく頑張つたなシエスタ、兄ちゃんがすぐに助けてやるからな」
シエスタの頭を撫でる、触診つて奴だ、この糞つたれの脳味噌は
こうやって触るだけで治療法を教えてくれる、さあ…黒いジャック
だろうが神の手だろうがあつさりと超えてさらに高みに行つてやろ
うじゃないか、背中のリュックサックを下して中から簡易手術キッ
トをひっぱりだす、研究所におかれていった使い捨ての物だが十分な
手術ができる…アメリカ軍海兵隊衛生兵御用達の便利な品である。
麻酔を全て打ち、傷口を消毒する。

「エアスキン」

杖を二三度振つて呪文を唱える、簡易式だがこれでじばらく無菌
室が出来あがつた、メスを被つてているビニールを引っ張がして骨折
箇所の皮膚を斬り裂く、左手に持つた糸で太い血管を縛り止血をし
ながら骨を継ぎ合わせる、ちつ、ビシやーうこちらの腕も鈍つてている
らしい…粉碎された骨全てをつなぎ合わせるのに十八秒もかかつた
…傷口をふさいで次の傷に向かつ…

「お~わりつと」

最後の傷口を縫合するどどつと疲れが押し寄せた、所要時間三時
間、まだまだタイムを縮められそだ…って妹相手に研究者魂燃え
あがらせるなんて俺はマッドサイエンティストか、手術キットを厳
重に密封してゴミ箱に捨てる。

部屋の隅を見るどヴァリエル姉妹にエルザ、テファが重なり合
つて寝ている…そんなに待たせたつもりはないのだが…まあ致し方
あるまい、手術中外で砲撃音や剣戟音が響きわたつていたが彼女た
ちは目を覚まさなかつた、どうやら大分疲れているらしい。

「ひい~…死んじやいます~…」

ヘロヘロと一葉が部屋の中に現れた、こちらも大分疲弊している

…そら一ヶ月も毎日寝る間もなく戦い続けるとなると異能者だつて疲弊する、ただ三柳一葉は少なくとも後一年は同じように戦えるし今夜一晩ぐつすり眠つたらまた明日の朝には元気で傷も疲労も全て取つ払つて同じように行動できる。

異能者が人間に恐れられる理由は解つて貰えたかと思う、異能者十人と人間一億人が戦つたら勝つのは異能者なのだ、そして異能者は一億六千万人居る上に更に鍛えられた三柳クローン兵团が五十億人いる…一葉はその内一人であつたが今では最強の一角を占めている…まあ何が言いたいかと言うと人間が異能者を迫害するのは自明の理である、人間が弓矢を持つて甲冑を着こみながら戦争していた頃には異能者は車に乗つてテレビを見て空を飛んでいたのだ、しかも全て片手間のお遊びで作り上げた物だというのだから驚きだ。

「クルストさん、酷い姿になりましたね」

一葉は俺の姿を見ながらそう言い放つた、鼻を鳴らして返事をする。

「俺がどんな姿をしようが関係ないさ、敵を殺せればいい」

窓の外を眺めていると非常に悲しい気分に陥つてきた、一葉のおかげでここは落ちていないのであるが…やはり俺が決着を着ける必要があるみたいだ、リーダーが死んだら奴らも撤退するだろう…この体でどこまで戦えるかは未知数ではあるが…前回のような無様な結果にはなるまい。

「相変わらず悲しい人…」

相変わらず一葉は聖女の様な微笑みで俺を見ている…なんというか、一葉は俺の母さんに似ていた、マリア・マグダラ、神の子を産むと予言されていた女。

「言つたな、俺はこの生き方に満足している」

一葉がいつも通りなら俺もいつも通りに返す、ふてぶてしくにんまり笑つて見せる、常に油断し油断せず、慢心し慢心する。

「今度はなんの為なんですか？…彼女の為？…あの子の為？」

一葉がにつこりと笑つた、聖女から少女へのシフトエンジ…全

く持つて腹が立つ、だつたら答えてやろうじやねえか、てめえが常闇学園で最初に友達になつたあの男みたく、俺の前世みたく。

「何回答えさせやがるんだ三柳、自分の為に決まつてゐるだろうが」

「いつも通り、そういういつも通りだ。」

「…おかえりなさいクルストさん」

そして一葉は少しだけ悲しそうな顔をした後そう言つた、その様子に鼻鳴らしてみる。

「おう、ただいま」

帰つてきた事に少しだけ後悔して、彼女たちとの別れにもつと後悔して、今更引き返せない自分の意地に少しだけ嫌悪して…そして覚悟した。

「三柳、この部屋に居る奴に伝えてほしい事がある」

だからこれはカトレアの婚約者からルイズの兄貴分からシエスターの兄貴からエルザの…主人様からテファの使い魔からのメッセージ。

「なんでしょう？」

戦友はにこにこと微笑みながら辛い役目を受け取つてくれた。

「今までありがとう、さよなら… そう伝えてくれ」

そう伝えた時、頬に涙が伝つた、どうやら俺は泣いているらしい、そうだな悲しいな…悲しいよな俺よ、でもなこれじやダメなんだ、クルストが最初に殺すのは自分の心…泣くんじやない笑うんじやない怒るんじやない楽しむんじやない…ただ只管に…敵を殺し続ける。

「確かに伝えます、後は？」

一葉は少しだけ俯いてそう答えた。

「お前に頼みがある、こいつらが一人立ちできるまで守つてくれよ」

一葉は満足したように頷いた、そのまま椅子の一つを占領して寝息を立て始める一葉…もう行けと言う事だろう、どうやら一葉は納得してくれたようだ。納得してくれなかつたら一葉は俺を行かさなかつただろうしな。

そのまま部屋を出ると振りかえりたい衝動に襲われたがそれをねじ伏せて俺は前に進む…本当にさようならだ。

「えーっと…お肉屋さんお肉屋さん」

マルトー料理長から渡されたメモを眺めながら私は復興した王都を歩く…あ、どうも皆さん、私カトリアさんの使い魔の三柳一葉です、私は現在戦争終結祝いの為に学園のお手伝いを命じられまして王都にお買い物に来ているのです。

「よおー一葉ちゃん、魚はこんなもんでいいのか?」

ランサーが大量の魚を抱えたまま私に接近してくる。

「はい、それも荷馬車に乗せてくださいねー」

ランサーは頷いて荷馬車に魚を乗せた、ちゃんと野菜と区切つておいてくれているか心配だが…まあエルザが指揮を取つてくれているから大丈夫だろう。

「一葉~?」

「あ、カトリアさん今いきますねーー!」

カトリアに駆け寄る、カトリアは思つたよりも元気だった、エイブラハムはそんな人だわ、とか言つていたが…恐らく辛いはずであろう、クルストさんは公式では王都防衛戦に参加中行方不明となつているが…大切な人にだけは眞実は伝わつていて、クルストはこれで満足であろうと私は確信出来る。

まさようならとあの男は言つたんだ、運の巡りあわせが良くなくてはもう会う事もできないだろ?…それは仕方ない…さて、これから世の中はどうなるのやら…どうやらクルストは星復活の基点はすでに用意してくれていた、地球は見事に復活したが…私は帰る事は出来ない、どうやらこの体…老けてないからおかしいと思つたが思念体らしい、私は宇宙船の中で老衰でくたばつていたらしく生前活躍しすぎた為にどうやらランサーと同じ英靈としてこちらに召喚されたみたいだつた。

だつたらこの命、主人たるカトリアの為に死めるまで死へるのが

儀と言つ物…まあ楽しくやるつと思つ。

そういうえば明日ルイズが召喚の儀を行うと聞いた、カトレアのように異能者を召喚するのであるつか？ だとしたら誰が呼ばれるのであるつか…どうやら私達希望側の異能者とセブンズカラーのような絶望側の異能者を召喚出来る魔術師がここにはいるようだ。どちらにせよ楽しみである、新たなる戦友か…それとも強敵か…私はそんな事を考えてクスリと笑う。

「…どうしたのかしら一葉、芸人でもいたの？」

カトレアがきょろきょろと大通りを見渡している、なんというか年齢に比べて子供っぽい人だ、首を左右に振つて否定しておく。

「これから先がちょっと楽しみなだけですよ」

そう答えておく、配役は変わつた、古き視点は別の視点となつて新たな視点が元の可能性に割りこむ…さてさて次は一体どうなるのやら…

ヒローグ（後書き）

次回より新たな主人公が…ようやく原作の流れになりますよ、ようやつと

第一章プロローグ・君に呼ばれて（前書き）

よつやく……よつやく本編に入れた……長かつた……長かつたぞう！

第一章プロローグ・君に呼ばれて

平和となつた学園の広場にまるでトンネル工事をしているかのような爆音が響き渡つてゐる。

「はあ…はあ…」

その中心に居るのは綺麗な顔を汗だくにして一生懸命杖を振る発育不良の薫色の女の子…その様子を見兼ねたハゲた男…コルベールは申し訳なさそうに口を開く。

「ミス・ヴァリエール、残念だが…」

ヴァリエールと呼ばれた女の子は気丈に顔をあげてコルベールを睨んだ。

「もう一度…もう一度だけお願ひします！」

睨まれたと言うのにコルベールは微笑みを携えて。

「後一度だけですよ」

正真正銘最後のチャンスをヴァリエール・ルイズにくれてやつた、ルイズは気合いを入れて前を見る。

（私になら出来る…エイブラハム兄様がそう教えてくれた…諦めちやダメ、他のコモンだつて私は出来るんだから…）

自分にそう言い聞かせて杖を振り上げる。

「この宇宙のどこかに居る私の使い魔よ！」

押して駄目なら引いてみな、それを体言するように自分で考へていた呪文を高らかに唱える。

「強く気高い最強の使い魔よ！貴方の力を私に頂戴！変わりの望む物は全て貴方に与えるわ！だから答えて…私の名前はルイズ！貴方が必要なの！」

杖を振り下ろすと爆発は起こらず…ブラックホールのような球体がそこに浮かんでいた。

ブラックホールのような球体が碎け散ると…今まさに戦場に居たような汚れ具合の白銀の甲冑を着た男がその場に倒れていた、大い

びきをかきながら。

「！」こんなのが私の…使い魔…」

そしてルイズはその姿を見てがっくりと落ち込むのだった、男が目を覚ましたのかノソノソと立ち上がってくる。

「……ん、こには…………？」

辺りをキヨロキヨロと見渡しゆっくりと立ち上がった、兜をこれまたゆっくり脱ぎ…現れた素顔にルイズは驚いた、中性的な顔立ちをしていて少年にも少女にも見える、エイブラハムのようなツンツンの黒髪は太陽に照らされて宝石のように輝いている、美形だ、物凄い美形だ。

「…………何見てんだよ、そんなに僕の顔がおかしいか？」

その美形は物凄く不機嫌そうに…唸るようにそんな言葉を放つた、さて…負けず嫌いのルイズが聞いたらどうなるか…解るだろう。「な！？あんたちょっと美形だからって貴族にそんな態度取つていわけないでしょ！」

そして甲冑の男もカチンと来たようで反撃の為に口を開いた。

「僕はあんたつて名前じゃないっ！アデル・モトローラ・クルストつて立派な名前があるんだ！馬鹿にするなチビスケ！」

前に乗り出し怒鳴るアデル、ルイズもやはりカチンと来たようで…。

「私だつてチビスケなんて名前じゃないわ！ルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールつて立派な名前があるのよ！」

「はん！お前なんかチビスケで十分だ！」

「何よ女顔の癖に！」

「なんだと！？乳無しひへったん娘が！」

「なんですつて！？平民の癖に！」

睨み合つて一人、コルベールはその様子を見て深く深くため息を吐いた。

「コルベール先生！やり直しを要求します！」んな…こんな下品な

平民嫌です！」

ルイズは口喧嘩に負けたのか半泣きでコルベールに詰め寄った、後ろではアデルがドヤ顔をしている。

「駄目です、もう時間もありません」

「ですが！」

「……ミス・ヴァリエール、貴女一人の為に大分を消費致しました、それに召喚した使い魔は最後まで面倒を見るのが当たり前……わかりましたね？」

そう子供に言い聞かせるようにコルベールが言つとルイズは渋々とだが頷いた。

「……あんた、アデルとか言つたわね」

ルイズは覚悟を決めて前に出る、アデルは不思議そうな顔をしている。

「そう言われて頷く、一体何を言つているのだろうか……

「我が名はルイズ……五つのペンタゴン……」

なんかぶつぶつと喋つた後、ルイズは僕にキスをした。

「つー？ おまつー？ ぼ、僕のファーストキス……つてあつつうー？」

左手に焼きじてを押し当てられたような痛みと熱さを感じた。

「我慢なさい、すぐに終わるから」

ルイズの言葉を聞いて思い切り睨む、めっちゃ熱いんだよこれ……

腕に付いているP.D.Dが精神汚染を感知している……くそつ、精神汚染ハ型…刷り込み式洗脳魔術の類であると俺は覚えている…しかもかなり古いタイプの洗脳魔術であり僕はこれに対するワクチンを持つてはいない…結局熱さは收まり左手に何かのルーンが刻まれた。「ほお…これは珍しいルーンですねえ、ちょっと書き映させていただいても？」

なんかハゲがメモ帳持つてわくわくしてる、きもい。

「まあいいけどさ……」

残念ながら僕にルーンを読む事は出来ない、使える魔術も簡単な物だけだ…手榴弾程度の威力の火球をぶつけたり、切り傷擦り傷をある程度まで癒したり…そんな物だ。

「…さて、ではこれにて解散です。各自自分の使い魔と友好を深めて下さい」

ハゲがそう言い放つと回りに居た奴らはぶつぶつと文句を言いながら去っていく、だいたいはルイズに対する罵倒…そしてルイズの回りに何人かの女が集まつてくる。

「やつたじゃないですかミス・ヴァリエール！」

ボブショートの黒髪を持つソバカスがチャーミング（死語）な女の子がルイズに話しかけている。

「ええ、ありがとうシエスタ！…でもこんなのが……」

不満そうにこちらを睨むルイズ、不満なのは僕も一緒だよ。地面に座り込み様子を見る。

「おめでとうルイズ、私と一緒にね」

ルイズと同じ髪の色をしたなんと言つか…綺麗な人がルイズの頭を撫でている。

「はい！ちい姉様！」

ルイズは凄く嬉しそうだ、ちい姉様はこちらに近寄つてきた。

「私はカトリア、アデル君…でいいのよね？」

にっこり微笑む彼女に少し見とれた、まるで女神のような笑顔だなんて事を考えていたら頭をひっぱたかれた。

「何ちい姉様をすけべな目で見てるのよ！この工口犬！」

ルイズだつた、あの杖で僕の頭をひっぱたいたらしい。

「誰もそんな目で見てねーよ！お前と違つて綺麗だから見とれていただけだ！」

「なつ…まるで私が綺麗じゃないみたいじゃない！」

「ほお…皮肉も通じやがらねえか！胸だけじゃなくて脳もマニアムなんだなお前」

「ぬあんですつとうえ～～！！」

「なんだ戦るか！？」

一戦うてやるうじやないの!!

お互いに罵り合こといつて殴り合との喧嘩まで発展しちゃった、母さんが見つけた、あの廻船の壁の壁紙ついでござるが、

が見たら、おの母さんから泣かでくるが、

仕方なしに拳を構える…戦いの基本は格闘だつて誰か言つてたしな。

「はいはーい、えいや！」

なんだか余り聞きたくない声が響いて地面が揺れた、僕とルイズ

は地割れに挟まれて見事に動けなくなってしまった。

喧嘩に駄目ですよ!! ハイフセヤんと……あ 黒鹿弟子」

卷之三

顔をあけると僕の劍の師匠たる三柳一葉が鬼もじょんへん漏らして、裸足で逃げ出しちば留二落つ二らるようは微笑みを浮かべて二三。

「... まつこ」

チガチと音を立てる。

一
私
剣はなんの為にあるって教えましたけ?上

且元で囁かれる死神の宣告

ギリッと首が絞まる。

一
続き

「ケンと睡を飲み込みます」「泣きな僕はす」「と想ふ

は、口説いて思ひの怒りや憎しみを擡げにしない牠の

此卷之文，皆為其子所作，故不列於卷首。

「人間」のレイズちゃんは君より強いかですか？

そんな事はわかりきつていい、首を横に振る。

「教えた事位守りなさい馬鹿弟子、いつか大切な人を失いますよ…

…はい、立つて」

一葉が悲しそうな顔をした後、僕は地面に下ろされた…これは許されたのだろうか？

「気をつけ」

どうやら許されではなかつたらしい、逃げだそうにも蛇に睨まれた蛙のように動けない。

「ビンタ一発で許してあげますね、後でライズちゃんにも謝る事…体型の事はタブーですからあの子…飛んでらっしゃい！」

一葉が振り上げた手は…初速であつさり音速を超えて振り下ろされた、頬にインパクトとする瞬間…走馬灯が脳内を駆け巡った。

母さんに遊園地に連れて貰つていた辺りでベチュツと僕をビンタした音が響き…音を置き去りにして僕は壁にたやすく突き刺さり…後は記憶がない、どうやら氣絶したらしい…ビンタされた音が可笑しいとかツツコミは無しね…ぐはつ…

第一話・動き出す悪党

「」はタルブの屋敷…中庭の慰靈碑に寄り添つて建てられた小さな二つの墓の前で祈る。

「親父…お袋…あの世で仲良くなつてくれ、タルブは俺が守るからね」

荒らされ果てたタルブの屋敷に振り返る…思い出は全て胸の中、形ある物は全て破壊されてしまった。

「もういいのかイブラハム中佐殿」

後ろで嫌みつたらしく中佐を強調する妙齡の女…マチルダを睨む。「ああ、問題ない…それでオスマンの爺の返答は?」

「はい、これ」

マチルダが差し出してきた手紙を引つたくなり荒く中身を広げる、長つたらしい文だが要約すると嫌だとしか書かれていな。

「狸爺め」

手紙に魔力を通して燃え上がらせる、苛々しながら煙草をくわえる。

「マチルダ、計画はCプランに変更。やれるな?」

火を点けて吹かした後マチルダに言い放つ。

「いつでもやるさ…あんたの方も準備出来ているんだうねえ?」

相変わらず小ばかにしたようなマチルダ、その姿にニヤリと笑つて見せる。

「全ては事もなし、オールオッケーだ、ミスロングビル」

「あらそですか、流石ですわミススタレイブン」

マチルダは見事に化粧をして、俺は顔に包帯を巻いて馬車に乗り込む。

「やあ同志諸君」

中にはワルドが待つていた、どうやらワルドも仕事を終わらせてきたらしく…

「よつワルド、王女殿下からの許可は取り付けられたか？マザリー
「にはバレていないうつむ

「僕を誰だと思っているんだい？」

「…それもそうだな」

ワルドの得意げな顔に苦笑する、案外子供っぽい男だ。

「…ではこれよりナラシンハ隊任務を開始する、各自持ち場に付き
尽力せよ、散！」

各自の持ち場に向かい馬を走らせる、俺は…向かわなくてはなる
まいな、アルビオンに。

懐かしのアルビオン、ウェールズは元気だらうか？新聞によれば
首都は陥落し王軍は西に後退したとの事…あの悪運の強いウェール
ズが死ぬとは思えないが急ぐに超した事はない。

港にはアニエスを待たせている、アニエスと俺ならどんな敵にも
負けやしない。

「…チツ」

馬を止まらせる、道が倒木で塞がっていた、迂回しなくてはなら
ないな…だが倒れ方が不自然だ、まるで巨大な像にでも張り倒され
たような…

「…マチルダ、アイツ何ヤツテンドア？」

顔をあげると巨大なゴーレムが魔法学院に向けて歩いていた、思
わず片言になってしまった。

阿呆は無視して先を急ごう…気にしちゃいけない、クールにクー
ルに俺は去る。

呆れかえりながら馬を急いで走らせると港町が見えて來た、町の
入り口では見覚えのある相棒が手を振つて…思わず口が綻ぶ、
懐かしいな、あいつと戦場を駆けた日々…こうして再び勒を並べて
共に剣を振れる日が来るとは嬉しいかぎりだ。

「クルスト！！」

馬を駅に預けているとアニエスが近寄つて話しかけてきた、頬は
紅潮し目は輝いている…なるほど、あれを見たか、それは興奮する

だろうな…まだ艦装を施してない為に戦闘には使えないが飛ぶ位なら十分だ。

「ようアーニエス、見事なもんだろ？」「コルベールの設計したフネは馬に乗せていた荷物を抱ぎながらにやりと笑つて見せる。

「ああ、あれならロイヤル・ソヴリンも目ではないな、どんな大砲が積まれる事やら…やはり青銅製のカノン砲か？」

目を少年のようにキラキラ輝かせながらアーニエスは語る、俺はその言葉にちょっとした笑みをこぼす。

「違う、そんな時代遅れの物は積まない、見せてやる、こっちだ」手招きして駅の後ろに隠してある港…まあ造船所もかねてているが…に入る、しばらく進んだ後灰色の扉を開いた。

「鋼の…龍？」

アーニエスが呆けたような声を出した、そういうえばティファニアも零を見た時そんな事を言つていたなあなんて考えながら鋼の龍…翼に大きく零と書かれた黒一色のそれを軽く叩く。

「こいつはゼロ、そしてアーニエスが見た船はオストラント級空母…ゼロを空中から飛び立てる事が出来る…おつと見せたかったのははこっちだ」

工場内の電気式照明のスイッチを入れる、そこに映しだされたのはロイヤル・ソヴリンクラスの巨大なフネ、全て鋼鉄で出来ており巨大な煙突を持っている、翼をもちハ発もの原動機がついているが今はプロペラは回つていない、甲板にはこれまた大きく長い二つの砲身を持つ主砲が一門、主砲より小さいがそれでもカノン砲とは比べ物にもならない位大きく長い副砲が後部に三門、そして艦橋はまるで城の天守閣のように聳え立つていて、まさに空飛ぶ要塞である。

「フォーミュラ級巡洋艦エイリアだ」

アーニエスからの返事はない、隣を見ると女性にあるまじき顔をしている…まあ驚くだろうな、フォーミュラ級は三隻出来あがつて、アーニエスが見とれているのはエイリア、その横にサニー、最後尾にアリスだ、ぶっちゃけこの三隻とオストラント級が一隻あれ

ばレコンキスタはどうにでもなる……が後に居るガリアの存在が気がかりだ、ガリアではすでに蒸気機関による工業化が着々と進んでおりこれと同じ艦船を持つてゐる可能性が出て來た。

「……アニエス？」

「はつ！？な、なんだクルスト」

「船の出港時間はわかるな？いつだ」

「あ、ああ……明日の十時だ」

「よし、明日の九時に港に集合だ、アルビオンに行くぞ。ウェールズをでかい仕事に巻き込まなきやならん」

不安そうな顔をするアニエスから視線を反らしてクツクツ笑う、さて……俺はこの世界をどういじくろうか、トリステインで天下でも取るか？ガリア王は邪魔だな、人間にしては賢い、さあ行こうか全ては平和の為に……

第一話…めづらしく僕は口の使い魔

「だから竹輪じゅうしゅうサイルは無理って言つたじゃないか！せめて筈に……はつ」

自分の訳のわからない寝言で目を覚ました、内容から察するに竹輪で弾道ミサイルを撃ち落とそうとしたらしい、どれだけ切羽詰った状況でもそれだけはしたくない、つーか筈でも無理。

「あら、起きたの？」

机に向かっていたルイズがこちらを見ていた、僕は藁の上に寝かされていた…マジでペット扱いだね。

「ああ、うん……」

ぱりぱりと後頭部を搔く、ルイズは机から離れてこじりこに向かってきた。

「異能者って凄いのね……あんなピンタで生きているなんて」
ルイズが僕をマジマジと見ていて、ルイズの目から視線を下に落とすと…見えた！ピンク色のが！

「あー…ルイズ？」

「何よ？」

「…見えてます、乳首」

蹴りを喰らつた、今のは…視覚効果分のキャラにしてやね…。

「…はあ、あんた、もしかしながら一葉と同じ世界から来たのよね」

近くの椅子に座ったルイズは足を組んでそう言い放つ、どうやら地球の事は話されているようだ…頷いて返事をしておく。

「だったらエイブラハムって異能者…だけ？…まあ知らない？」
その名前には聞き覚えがある。

「僕のおじいちゃんだ、エイブラハム・ヨシュア・クルスト…クルスト一族の誇りだよ」

ルイズは目を丸くした、またしかに僕はクルストの容姿ではな

「い、僕はおばあちゃん似なのだ。

「そ、そなんだ……ねえ、エイブラハム兄様はどんな人だったの？」

そこで少々違和感を抱いた、エイブラハム・ヨシュア・クルストの名前を知らない者は地球上には赤ん坊位しか存在しない……そう言えば師匠と同じ世界とか言つていた。

空には一つの月があるからここは火星かと思つていたけど……

「……ルイズ、この世界の名前は？ 火星じゃない……よね」

そう聞くとルイズは怪訝な顔をして鼻を鳴らした。

「ハルゲニアよ、ここはトリスティン王国の魔法学院」

頭が痛くなつた、僕がレバノン星系で戦つている間にビリやら異世界に召喚されてしまつたらしい……

「……ルイズ、僕を帰してくれ」

それを聞いて張り詰めていた虚勢が崩れそうになつた、レバノン星系に帰らないと……戦況は至極不利、艦隊が撤退した為補給すら届かない状況だ。

「無理よ」

ルイズの一言に頭をハンマーでぶん殴られたような衝撃を感じた、からつぽの胃から胃液を吐きそつになるが堪える。

「……僕を帰してくれ」

「ごめんなさい、無理なの……帰したつて事例は過去にないから」「そつか……」

藁の上で胡座をかいてうなだれる、僕はおじいちゃんやおばあちゃん、おじさんやお母さんみたいな英雄になりたかった、十三歳で軍に徴兵されて……いくつか戦争を経験しレバノン星系に派遣されてここに至ると言つて詰だ。

英雄？ 見てみなよこの様を……自分と大して歳が変わらない小娘の犬だ、砲撃の中で涙と鼻水を垂らして駆けずり回つたり、命乞いする敵兵を指揮官の命令で始末したり、やりたくない事は必死に我慢してやってきた。

それがこの有様だ、英雄に成ればせずとも親愛なる仲間達と共に果て同じ墓に入れるかと思いきや… 小娘の犬だ、犬、おじいちゃん みたく誰もやつつけられない悪党をやつつける訳でもなく… おばあちゃんみたいに全ての生き物を無償で助けるでもなく… 師匠みたいに無敵になれる訳もなく… 小娘の犬として一生を生きる。

「…いやだ、そんなのいやだ」

膝を抱えて顔を伏せる、僕は何も出来てない、可愛い奥さんだつていらないし子供だつていない… 歴史に名を残す事も出来ない。

苦しい戦線に舞い戻つて戦う事も出来ない、仲間を助ける事も出来ない、僕に残された選択は犬か死か… あんまりだ、あんまり過ぎる。

「… そんなに嫌がらなくてもいいじゃない」

ルイズはまた不満そうな顔をしている、だから不満なのはこっちだよ。

「嫌がるに決まってるだろ、さっきまで誇り高い異能者の戦士として戦つてたのに… いきなり呼び出されて僕は君の犬だ、考へても見ろよ。いきなり知らない場所に呼び出されて犬になれって言われたらどう思う？ 使い魔つて事は君に生死を決められるつて事だ、誇りも尊厳もなく君のご機嫌を伺いながら尻尾を振るの？ そんな生き方嫌だよ…」

代々受け継いだ鎧が僅かに音を立てるだけで暫く沈黙が場を支配した、痺れを切らしたルイズが唾を飛ばしながら僕に怒鳴った。

「だつたら…！ だつたらどこへでも行きなさいよ！ ただ覚えておきなさい、あんた絶対野垂れ死にするわ！ この世界で何が食べられて何が食べられないかわからないでしょ…！ 私に従つて生きるか… 餓死するかどつちがいいの…？」

うじうじしていたらルイズが癪癩を起こした、こんな事聞かされたら誰だって怒るのは目に見えている… だが言わないとやつてられない。

「…どつちも選ばない」

「……じゃあどうするのよ」

「自決する」

幸運なのか不運のかはわからないが……電子分解投擲弾は一発だけ残っていた、自殺なら出来る、選択は二つ……ルイズの犬になるか、野垂れ死ぬか、自決するか……

「離れてて、巻き込まれたら君も死ぬ」

投擲弾のピンを掴む、抜いたら五秒後に爆発する……指が震えてピンが力チカチと音を立てている。

「ほ、本気なの？」

ルイズが心配そうな声を僕にかけてくれた。

「本気……だよ……」

死ぬのは怖い、けど……僕は立派な異能者の戦士なんだ、覚悟を決めてピンを抜いて胸に投擲弾を抱え込む。

「一葉！」

「わかつてます！」

扉が荒々しく開け放たれた、顔を上げると一葉の足が迫っている……一葉の足は爆弾を蹴り飛ばし、蹴り飛ばされたソレは窓を突き破り遙か彼方で爆ぜた。

「ちい姉様、わ、私……私……」

ルイズが泣いているのに今気がついた。

「大丈夫よ、ルイズ……ほらこっちに来て」

カトリアはルイズを抱き留めている、その姿を横目で確認して一葉を睨む。

「何故です師匠」

「自殺なんてさせる訳ないでしょ、異能者なら戦いの中かベッドの上で死になさい」

優しく説くような口調……そのどちらも叶わそうだから誇りを汚される前に自決しようと考えたのだ。

「不安で孤独なのはわかります、けれども諦めちゃいけませんよ」

「けど師匠！」

「けどもにっちもさつちもドイツもコイツもイタリアもありません、貴方が一端の戦士？私達から見れば未熟も未熟です」

一葉はまるで母のような顔で僕に語りかける、いつものドメステイックでバイオレンスな師匠ではない。

「貴方はクルストですが英雄クルストではありません、今の貴方は戦友を救う事も…誰かを守る事も出来ません」

一葉が僕を抱きしめる…なんだか凄く落ち着く、少し安心出来た。「帰る方法は必ずあります、自棄にならないで…ルイズちゃんは貴方を必要としています、そして貴方に大切な物をくれます。名刀よりも要塞よりも強く堅固な…ね？」

なんと言つたか…自分はまだ子供だと改めて認識した、師匠…三柳一葉は僕を育ててくれた恩人だ、僕の実の母は僕を産んだ後宇宙中を転々として困った人を救つてはいる、父はもとより研究が忙しく家に帰つてこない。

そんな中僕を身請けしてくれたのは一葉だった、実の息子のように愛情をたっぷり込められて育つた…まあおかげで僕は今だに甘えん坊ではあるが…歪む事はなかつた、と思いたい。

「男は覚悟、女は度胸、アデル…ルイズちゃんを守る気概を見せなさい。いえ、守つて見せなさい。貴方が一端の戦士を自称するのならそれ位やつてみなさいな」

その言葉に力いっぱい頷く、おじいちゃんは守ると決めたら全てを守つたらしい…だつたら同じ血が流れ魂を受け継いだ僕でも出来る、出来るはずだ。

「なら…後は一人きりにしても大丈夫…ですかね？カトレアさん」

「ええ、こっちも大丈夫、ルイズも大分落ち着いたわ」

ルイズの目は赤いが先程みたく癪癪は起こしていない…よーし、謝れ…謝るんだ僕…

カトレアと師匠はそそくさと部屋を出ていつてしまつた、大きく

息を吸い込んで謝罪の言葉を…

「さつきは悪かった、帰るまでだが君を……ま、守つてあげてもい

いんだぞー感謝しろー！」

「な、生意氣ね！誰もあんたに守られたくないわよー。」

「生意氣つてお前には言われたくなーよー。」

「なんですつてー！だいたいあんたいくつよー。」

「十五歳だ！文句あるか！」

「私より年下じゃない！年上は敬いなさこよー。」

「嫌だねー。」

…どうやら僕は素直になれないらしく結局口論になってしまった、先程とは違ひじやれあいレベルではあるが…ね。

「…まつたく、あの子は……まあ」

「ま、まあまあいいじやない一葉、あれ位のが可愛いげあるわよ」

廊の向こうで聞き耳を立ててた一葉は呆れ返り、同じく聞き耳を立てていたカトレアは一葉を宥めるのだった。

第一話…ひき口の魔使（後書き）

シノトレスントロゴンヒッヒー誰得だらうな

「ちくしょー……なんで僕がこんな事せなあかんのだ……」

ルイズの洗濯物が入った籠を抱えて寮から外に出る、たしか水場の近くに洗濯板も石鹼もあるとは言つていたが、あの女^{あま}：肝心な水場の場所を伝える前にとつとと寝やがりやがつた、こんな場所見た事も聞いたこともない僕は見慣れない建築様式に戸惑うのだった。

余談ではあるがこここの建物は普通ではありえない作りになつてゐる…自重で倒壊してもおかしくない程に柱が少ない…それに石造りの床や天井は鉄筋やセメントなどでは接合されていない…非常に脆い作りとなつており昨日は不安で寝付けなかつた…閑話及第。

「水場ちゃんやーい、出でおいでーつて出でてくる訳ないかー…ぬははは、虚しい」

女物のパンツやブラウスを抱えてうるうると女子寮付近を漂う男…どう見ても不審者です、本当にありがとうございました。

「あれ？ ちょっと貴方」

背後から声をかけられ振り向くとエプロンドレスを着たちつちやな女の子がこちらを見上げていた。

「…ちよつと似てる、けど違うわね。知り合いかと思つたの、それじや」

「あ、待つて！ 水場の場所を教えて！」

僕がそう言つと小さなメイドはゆつくりと振り返つた。

「こつちよ、着いて来て」

そうして手招きされて僕は後ろにノコノコ着いて行く、結構距離があるのだろう、彼女は饒舌だった。

彼女の名前はエルザ、元々はタルブ辺境伯のメイドでここには経験を積む為に派遣されたらしい…こんな小さな子供がメイドやつてる世界の文明つて…宇宙艦位あるだろつと高を括つていたけど僕本当に帰れるのかな。

夜眠れなくて地球からの距離を計つて見たらどうやらここはバーナード星系から30万光年離れた場所らしくそれほど離れていないのに気がついた。

科学文明レベルは8、魔術文明レベルは12とかなり低めの星ではあるが…参考までに地球の文明レベルは科学魔術共に2359である。

どれだけ差があるか分かつてくれたならありがたい。

「え？ ギヤグ？」

案内された先ではマーライオンが酔っ払いのおっさんよろしく水を吐き出していた、何これギヤグ？

「えつとエルザ、まさか魔術の工業化すらされてないってんじゃ… 僕の言つた一言にエルザは首を傾げている、どうやら普通の工業化自体も起こっていないらしい… 大丈夫かこの国。

「何言つてるとよ、魔術はメイジしか使えないでしょ。あなたも平民ならそれ位わかつて…」

手から炎を出してみせるとエルザは目をぱちぱちと瞬かせた、不思議そうな顔をしている…魔力ゼロの僕が魔術を使ったのが不思議だそうだ…異能者と言つのは星の魔力…アストラルとエーテルの混合エネルギー【アストライト】を使って星の水を奇麗にしたり砂漠を森に出来たりする、炎を出すなど攻撃用の魔術はその応用だ。どうやらそれすらも知らないなんて…普通の魔術とは別の道を辿つて発展しているみたいだ、僕は徴兵される前はただの編みぐるみ屋の見習い職人だったので詳しい事は解らないがかなり異端らしい、他の高度魔法文明星などはだいたいアストライトを使って魔術行使している…どうやらこの世界の魔術は体の中の何かを使って魔術を起こしているらしい、不思議な地球人型の知的生物だ。

「貴方エルフか何か？」

しかしクールな幼女である、表情を変えたのは一回だけで後はみんな無表情である、ボブカットの金髪で可愛いっちゃかわいいのだが…表情がないとなあ、まるで人形と話しているようだ。

「違うよ、僕は人間のネロ・サピエントの異能者、アデルだよ
「…そこまでエイブラハムと一緒になのね」

彼女が何を言つてるかさっぱりわからない、エイブラハムなんてよくある名前だしこの世界におじいちゃんが居る訳もない、おじいちゃんは母さんに殺されて…まあそれはいい、母さんの事だ深い訳があつたのだろうしね。

「さて、口を動かす前に手を動かさなきゃ…」

水を桶に組んで洗濯物と洗剤をぶち込む、いやあ懐かしいな、洗濯機が壊れた時こうやって洗つたつて、手で水をゆっくりとかき回し桶を持ち上げる、水から手を挙げて桶を回転させ始める、泡が空に起ち上り旋風のように桶の上で回る。

「あらよつと」

エルザの分も受け取り全自動洗濯機の中に放り込む、みるみる白い泡が汚れに染まっていく、何度も桶の水を交換して要訝奇麗になつた、同じように水ですすいで桶を空に放り投げる。

「軍隊式徒手空拳…擦手熱殺！」

掌底を桶にぶつけ思い切り擦つっていく、これを生き物の皮に使うと中身を焼く事が出来る危険な技だが加減をすれば…よつと、ねじられて一本の綱のようになつた洗濯物の端を掴み思い切り振りました後に空に放り投げる。

「ほつ！」

両手を広げるとそこに置まれてアイロンまでかけられ皺一つ汚れ一つない洗濯物が落ちてくる。

「はい、案内のお礼」

エルザに洗濯物を差し出すとエルザは抑揚のない歎声をあげて手を叩いていた。

「大道芸人？」

「戦士ですか？」

エルザの失礼な一言に唇を尖らせるとエルザは初めてクスリと笑つてくれた、その笑顔に少々身惚れてしまつた、おちゃらけて照れ

を「」まかしたが…なんだかこの世界の女の子は内面が魅力的な氣がある、とりあえずしばらくエルザと談笑してから別れた、現在は朝七時位かな…起こすには丁度いいかもしれないね。

部屋に戻りベッドで幸せそうに寝ているルイズを見てため息を吐く、いやはや、なんというか…平和ボケした女の子だ。

こんな時間まで寝てるのはよほど裕福な家の出なのだろう。

「ほらルイズ、朝だよ、起きて」

ルイズの体を揺さぶる。

「う~ん…」

「あうち!?」

蹴りを右頬に喰らつた、なんつー寝雜の悪さだ…「こんなんじゃ木の上で仮眠もとれないぞ、すぐに落つこちて蜂の巣か野砲でミンチだ、つて彼女は異能者じやなくて人間か。

人間の女は戦争には出ずに家で子を育てると聞く、異能者とは真逆である、異能者は男が少ない上男はたくさんの女を妻にする…女が狩りや農業に行つてる間に男は食事を作り子をあやし掃除をする…異能者は男より女のが体が強いし凶暴だ、まあ…鍛え上げれば大差はないんだけど…

「ん、あんた誰よ…」

ルイズが半開きの目で訪ねてきた、頭を左右に振つて呆れ顔を消す。

「君に召喚された憐れな犬だよ、ほら着替えて、今日は学校でしょ」

僕たち異能者の学校と言えば東京第三防衛学校だ、あそこは毎年英雄と呼ばれるような優秀な異能者を排出する…僕?試験に落ちて一兵卒だよ。

「あー… そうだつたわねえ」

寝ぼけ眼のルイズはそのままネグリジェを脱ぎ始めた、昨日は恥ずかしがつてたのに…部屋から出るべきか眼福と喜ぶべきか…とりあえず見ておこう、奇麗だし。

「…早く着せなさいよ、朝ごはんに、ふああ…遅れちゃうでしょ

…

…人間の女ってのはさっぱりわからない、昨日は見られて恥ずかしがつてたのに今日は服を着せろ…だって？一体なんなんだこの世界。

「…わかった」

怒っちゃいけない、役得と思え…だが…こんな甘ったれた小娘に顎で使われるのは気に食わない…我慢だ我慢…我慢しろ僕。

…ハイマイサン、君は正直だな。

ハルケギニア歴史書・大トリスティン皇国の章 - 影の存在ジヨナサン・クルスト大佐

この存在には謎が多い、虚無の担い手ルイズに召喚されたアデルだという説と当時のタルブ辺境伯であり第一艦隊司令サー・エイブラハムだという説があるがどちらも信憑性に欠ける。

だがどちらもクルストという名前が入っている事から二人のどちらか、もしくは血縁者と考えられる、いつも黒い甲冑を身にまといしゃがれた声でモゴモゴ話す様は会う貴族達に強い嫌悪感を抱かせたとさせる、タルブ辺境伯と言えば五連発ボルトアクションライフルのデビルシンガーと百連発軽機関銃クラレッタの鼻歌の開発者としても知られ、工業化の父でもある。

大してアデルと言えば伝説の勇者イーヴァルディとして名を馳せた、彼の逸話は尽きず何が本当で何が嘘かわからないと言う有様だ、どちらもメイジを軽視し、工業化を強く訴えた事から同一人物ではないかとの噂があがっている、お互い面識があつたのは大隆起の時のみでそれ以降は会つてないと言われている。

さて話は戻るがジヨナサン・クルスト大佐と言えば大佐で異例の陸軍司令となつた男であり奇抜な戦法を好んで使う事が多く、とてもなく奇抜でそして非常に有効的な戦法を取る事から神の頭脳ミヨズニートールンなどと呼ばれたり、先住魔法と詐称されたりしたようだ、それに対しジヨナサン大佐は鼻で笑い飛ばしたという、ブリミルに対する信仰心まったくのゼロでありそれを揶揄してかゼロのジヨナサンとも呼ばれた事もようだ、いつも隣に槍を持った青タイツの男が居た事が確認されている

優秀な戦術家や現代ハルケギニアの戦争論を作つた男でもあり、そしてブリミル教を大陸の片隅の小国で行われる小さな宗教としてしまつた、この男、もしくは女がいなければハルケギニアでは魔法

の効率運用も工業製品も卓越した医療による人命救助もなく差して変わらぬまま数千年過ごしていた事になる。

トリステインがハルケギニア全土を支配する事もなく、貴族が消える事もなかつた為平民からは平和の使者、笑顔の産み手などと呼ばれている、元貴族からは救いようのないテロリスト、下らない男と呼ばれているようだ。

だがこの男は最初から最後まで王家を支え続けハルケギニアに長い平和をもたらした事を忘れてはいけない

「これは醜い」

食堂に着いてからの僕の感想だ、なんだこの食事は…野菜屑の浮いた冷え切ったスープにカビの生えた黒パン…切れ…捕虜だつてもうちょっとマシな物が食える。

「あら、何か文句があるの？」

「ライスは豪華な食事に舌鼓を打ちながらそんな事を言う、なんというか、腹が立ってきた、下等な人類に何故こんな仕打ちを受けなければならぬのであるうか、僕は誇り高い異能者の戦士なのに。」

無言でルイスを睨む

「まさか人間が呼はれるなんて思ってもみなかつたんだから……」

ルイズの言葉に顔をしかめる、人間が呼ばれた例がないのか？いやいや、一葉を見ろよ、しかも君にそつくりな女性に呼ばれているじゃないか、体系は除いて似た彼女に呼ばれているんだから…まあいいや。

けつけるから… それじゃ」

「流石にこんな食事を取る『メ』無い。用があるたゞ名前を呼べば騙^{だま}しきるから……それじゃ」「近くな草原がある、蛇ぐら^{ヘビ}は居るだうしそれで昼食を済ませう、レンジャー訓練を受けておいてよかつたとひしひし思つた。

一時間後

「ぐおふあ！？」

体の蛇が音速で動いて神経毒の塊を吐き出していく、僕は今弾き飛ばされ学院に直帰中だ。

まさに強制退去である、剣一本あれば遅れば取らないんだけど……あの蛇打撃に対する耐性が物凄い……百発二百発ぶつ叩いてもケロリとしていた。

あわひゆ！？

そして学院の中庭に叩きつけられ僕は呻くのだった、しかもルイズが呼んでる…畜生飯抜きは堪えるぜ…適当に泥を叩いてルイズの元に向かう、手元には大蛇の鱗…緑色で奇麗だなあ…値打は…ゴミ並だ、引き取り料を取られる価値しかない。

13

「遅い！どこで油売つてたのよ！」
やはり剣がないと僕はどうしようもない、ああ、腹減つた……

四庫全書

開口一番は「の黒怪」で、而て「」で、而れるがた儀

「それ、バジリスクの鱗じゃなー！」

鱗を見せるルイズは驚嘆の声をあげた。その様子を鼻で笑つてやる。

違う、これはハシリスケモドキの魚たよ、ハシリスケの鱗は深緑色、これは黄緑色で…ま、そんな知識はいるないか。でもなんの用だい？

「そうそう、召喚して初めての授業は使い魔同伴なの、一緒に着いてきて」

「
」

「文句言わない！早く着いてきなさい！」

まあ情報収集だと自分に良い聞かせて渋々と彼女の後ろを着いていく、辺りにはたくさんの貴族と使い魔が居るがこう見てみるとど

うやら本当に人型の使い魔は僕だけみたいだ。

「ありがとうシェスター」「三スヤリヨー！」「あなたの席開いてますよ！」

黒髪の女の子が手を振っている、僕は適当に壁に寄りかかる…あんたは床よーなんて言われそうだしね。

「シエスタは何を召喚したの？」

「私はこの子です」

「…何この間抜け面の鳥」

「不死鳥の雛ですよ、この顔も見慣れてくると愛嬌があるんですよ？」

ルイズにはどうやら友達がしつかり居るようだ、うらやましい事で…僕の友達はみんな戦場で粉微塵になつてるか病院で冷たくなつている、なんだか教室に小太りの女が入つてくると静かになつた、デブ女は俺を見て何か言つている…何か用か下等生物。

「おい！ゼロのルイズ、魔法ができないからつてそこらへんに居た平民を連れてくるなよ！」

「先生！風邪つぴきのマリコルヌが私を侮辱しました！」

なんだかギャーギャーと騒いでいるが…僕には関係ない、傍観していると風邪つぴきとやらが粘土で口を封じられた、授業が始まつたのかデブ女がもくもくと話している、内容は土属性の魔法の事…どうやら貴族はインフラの扱い手でもあるらしい、僕達異能者には道路とか必要無いが人間には道路がないと移動すらままならないと聞いた、まあ道路歩きやすいもんね。

「では鍊金を…そうですね、ミスヴァリエール貴女にやつてもらいましようか」

「ミセスシユブルーズ！危険です！」

そして教室が阿鼻叫喚の渦に…こらなんがあるな、甲冑のアンチマジックシールドをオンにしておく。

次の瞬間、僕は思い切り壁に叩きつけられたAMSを貫いて僕本体の抗魔力もぶち抜いて直接身体に響いた、揺れる視界を頭を振つて無理矢理治し壇上を睨む。

「…ちょっと失敗したわね」

「ちょっとじやないだろ！ゼロのルイズ！魔法成功率ゼロのルイズ

！」

澄ました顔のルイズとそのルイズを罵倒する貴族達、澄ました顔の下で握った拳は震えていた、なんというか…物凄いデジャビュである、目を閉じれば思いだせる、全てから逃げ出した僕に向けられる罵倒に嘲笑、異能者は弱者にも強者にも同じく寛容だ…だが臆病者だけには容赦しない…だがルイズは違う、彼女はまだ立っている、嫉妬しちゃうよ全く。

「なんか言いなさいよ」

今は一人で部屋の掃除をしている、僕がテーブル三つを抱ぎあげた所でルイズは睨みながらそう言つてくる、さて…なんと答えるべきか。

「よつこらつしょ」

とりあえずテーブルを元あつた場所に戻しながら考える、あまり長く考えすぎたのだろう、ルイズが簞を投げ捨てた。

「あんたはいい気分でしうね！私はゼロ！魔法成功率ゼロのルイズ！どう？あんたにあんなに偉そうな事言つてたのよ？…さぞかしいい気分でしうよ…！」

「ふ……まず言える事は落ちつけ、僕は君を馬鹿にしたりしないしている、これは異能者の誇りに誓つて言える」

並べた机の一つに座る、ルイズと視線を合わせてみると…目に涙が浮かんでいる、そうだよねえ、辛いもんね。

「…僕の師匠の言葉だけど、剣折れる時勝敗を決するは気高き心、眞の武器は折れぬ信念に有り。…まあ僕もあんま意味は解つてないんだけどね」

ただ武器が折れた時に勝つのは根性だ！なーんて事ではないらしい、師匠は根性じやどうしても実力の差は埋められないと言つていた。

「…何訳わかんない事言つてるのよ、あんたなんか…あんたなんか

！…………『ご飯抜きよ！バーク！』

僕に雑巾をぶつけてからルイズは部屋を飛び出して行つた、そんな事より臭いぞこの雑巾！あ、でもほんのりルイズの匂いがする、でもくせえ！それにご飯抜きだと！？ああ、畜生余計に腹が減つてきた。

よくよく考えたら僕は包囲戦の最中で口クに食事取つて無かつたぞ…このままだと飢え死にするかも…いや異能者は一ヶ月位飲まず食わず不眠不休で戦い続けられる体力を持つてゐる、死にはしないが…それでもお腹は減るもんですよ、さつさと掃除を終わらせて僕は中庭で行き倒れる事にした、優しくないルイズに対するせめてもの抗議である、恥かけばいいんだ。

「…………何してゐるの？」

頭の上から声がかかる、顔を上げると雪のよつて白い肌と青と白のストライプ模様の布が見える…なんだこれ？あ、パンツや。

「えいっ」

「おふし！？鼻があー！鼻があー！！！」

思い切り顔面に蹴りを食らつた、思つた他痛かつた、のたうちまわつていると話しかけた人物は呆れてゐるのかため息を吐いていた。「ここで何しているの？」

屈みこんだ声の主は…エルザだった、相変わらずの無表情でこつちを見ている。

「えつと…行き倒れ、かな？」

「なんで疑問形なのよ…はあ、まあいいよ、顔色見ればわかるわ。ついてきて」

首をかしげながら立ち上がる、服に着いた草や土ぼこりを叩く、一体腹ペコでハングリーでアングリーな僕になんの用だろうか。

「ご飯食べたいんでしょ？賄いでいいなら食べさせてあげる」思わず膝まづいて両手を合わせてしまつた。

「エルザ、貴方は僕の女神だ！」

何故か思い切り蹴りを食らつた、後で聞いた話だが貴方は僕の女

神と言うのは使い古されたプロポーズの言葉らしい、どうやら僕は
やつちまつたらしい…でもご飯食べさせてくれたよ、エルザ大好き
だ～友達として…

中途半端な回

「さあ諸君！決闘だ！」

田の前で両手を広げた金髪のあほ面、ギーシュとか言つ奴が声高に宣言した、辺りはヒートアップしやれ殺せだのなんだの騒いでいる、僕は鼻息荒くギーシュを睨んでいる、こいつは僕の田の前で一番やつてはならない事をした…あれは数十分前にさかのぼる。

「いやあ…食つた食つた…」

エルザに案内された先で賄いを出してもらった、やはり腹に何かいれると活力が沸いてくるね。

「おう！いい食いつぷりじやねえか！」

恰幅のいい男が鉄鍋を巧みに操りながら話しかけてくる、確かにこの料理長のマルトーとか言ったか…どうやら追加の料理の調理中のようだ、そこらへんの木片を爪楊枝代わりにしながら立ち上がる。「どうもごちそうさまでした、見事な味でしたよ、あのシチューの隠し味はシナモンですね。絶妙なバランスに入れられていて我の強いシナモンが肉や野菜を見事に引きたてていきました、この料理はまさに芸術ですね」

僕の母親代わりであり師匠である一葉のおかげで味覚は鍛えられている、そう言つと料理長たるマルトーはにやりと笑つた。

「おうあんた！解つてるじゃねえか！味もわからない奴だと思つたが…気に行つた…これからもここのにきて飯食つていいぜ！」

「ありがたい」

しばらぐはマルトーと料理についていろいろと話していた、僕の世界のレシピには特に興味を示してくれた、流石は料理人…後で師匠も連れてこよ。

「君のせいで一人の女性の名誉が傷ついてしまつた…一体どうして

くれるんだね！？」

アルヴィースの大食堂の方から間抜けな怒鳴り声が響いてくる、コック達は何事かとそちらを覗きに行ってしまった、僕もマルトーにさそわれ見にいく事になった、なんだかものすごく面倒な事になりそうな気がしないでもないけど…

「…」「めんなさい」

金髪のあほ面に絡まれてるのはエルザ、深く頭を下げて謝罪をしているが…どうやら相手はただハ当たりのしたい肩のようだ、とりあえず調理場から出て近場のテーブルからナイフを一本押借する。「ダメだ！反省の色が見えないね！これだから平民は…僕が一から教育しなおしてやる！」

杖を振り上げるあほ面、杖めがけてナイフを投げる、角度、スピード、威力…完璧だ、杖を見事に弾き飛ばした…なんだか左手が一瞬光つて威力が上がった気がしたけどそんな事を気にしている場合ではない。

その隙にエルザとあほ面の間に自分の体を割り込ませる。

「なんだね！？君は！？」

あほ面を見て当たりの様子を見て状況を把握する…テーブルに置かれた文物の香りがする香水、あほ面にぶっかけられたワイン…あほ面に浮かぶ女の手の形をしたもみじ…なるほどね、悪魔で予想だけどこいつ一股をかけていてポケットから香水を落とした、その香水はそれなりに有名な物品で誰かのお手製、親しい人にしか渡さない贈り物だと仮定して…カマをかけるか。

「なんだね君は？」と聞かれたら…さあて、答えてやつてもいいがここで問題です、その一…僕は君にハツ当たりされている憐れなメイドを助けにきたただの騎士、その二、浮氣を許さないただの紳士、その三、浮氣がばれて他の女にハツ当たりする情けない奴を殴りに来た見物人…さあどーれだ？」

みるみるあほ面の顔が赤くなつていいく、どうやら予想の半分は当たつていそうでほつとした…ここから奴を怒らせてやるかね。

「やれやれ……同じ男として恥ずかしくなるよ、恥を知りなよ貴族、常に誇り誇りうるさいんだからさ……てめえで誇りを貶めてちや意味がないぜ」

「なんだと……貴族を愚弄するか！？」

「愚弄もなにも事実だろう、今君の状況を見て『こらんよ、女一人にフられた上に反撃する事もできない小さな少女相手に武器を振り上げ喜ぶ、まるで山賊だな』

まるで親の仇を睨むような目だ、その憎悪が心地よい……戦場に渦巻く憎悪にも事足りないちっぽけな物だが久々の戦いの空気に気持ちが高揚する、僕はやっぱり異能者の戦士だ。

「……おや、君はゼロのルイズが召喚したへいみん！じゃないか、主人がゼロなら使い魔もそれにふさわしい物だ。彼女には貴族の誇りなんてないんだろう……そんな君が僕に恥を説く？ はっはっは！お笑い草だね！」

あほ面の首を圧し折ろうと腕を僅かに動かした所である異変に気がついた、静まりかえる食堂内、響くのはヤケクソ気味のあほ面の声だけだ、貴族たちの視線を追うとルイズによく似た女性・カトレアがこちらを見て微笑んでいた、その微笑みに彼女特有の慈愛や母親の暖かさは感じなかつた、まるで身を潜める肉食獣のような雰囲気だ、傍らには困ったような微笑みを浮かべている一葉……そうか、彼女はルイズの姉だつたな……カトレアはゆっくり立ち上がり、ギーシュの傍まで歩いてきた。

人垣がモーゼの奇跡のように左右に割れる、ギーシュは彼女を見て明らかに顔つきが変わつた、表情を読むのが苦手な僕でも解る、あれは”やつちました”といつた顔だ。

「こんにちわミスター・グラモン、その言葉は我々ヴァリエール、ひいてはタルブへの挑発と捉えてよろしいでしょうか？」

「そういえばこいつら貴族だつたな、と僕は頭の中で考える……さて僕はどう動こうか、一応僕は二千年の歴史を持つ騎士の家系で騎士の血を引いている……主君とする人物がいるとすればルイズだ、主君

が侮辱されたのにそれを晴らさない騎士がいるだろ？それに契約の時に刻まれた呪印が言つてはいる、目の前のあほ面の首をたち切り心臓を抉り出して主人に捧げろと… いちいちつるせーなこの呪印。

「カトリアさん、待つて下さい」

手を挙げてあほ面苛めを楽しむカトリアを制する、一葉はじつとこちらを見ている… 悪いけど今日は止まる気はない、僕はそれなりにルイズの事を認めている、努力家たる彼女がいつまでも貶められているのは気に食わない。

「僕は主人の恥辱を雪ぐ為に貴様に決闘を申し込む… 貴様の血で主人の恥辱を雪ぐとここに星へ誓おう」

あほ面は好機と見たのか、意氣揚々と学園の外で待つと言葉を残して取り巻きと去つていった。

「いいの？」

エルザが僕の後ろからそう声をかけてくる、首をかしげる事で答えるとする。

「… 貴族はとても強いの、貴方はただの平民でしょ？ 魔法が使えると言つてもあんなちっぽけな炎じや… 殺されちゃう、私のせいで決闘して… いいの？」

無表情のエルザの瞳に僅かに悲しみが灯る、エルザの頭に手を置いて笑つてみせる。

「大丈夫、心配なら見にあいで」

そう言つて一葉の顔を見ないように振りかえる、さて学院の外とか言つてたか… 歩き出すと扉の所に仁王立ちするルイズが居た、ご丁寧に腕まで組んでいる。

「あんた、何勝手な事してるのよ」

「ん~…」

確かに今回は勝手すぎた、勝手にルイズの名を使って決闘まで約束してしまった、後頭部を搔きながら言葉を詰まらせた。

「… 私なら我慢するから、あんたの気持ちはすぐくうれしいけど、事実なの… 私は我慢できるから、殺されちゃう前にギーシュに謝

つてきなさい」

「よし、きまつた。

「嫌だ」

「つ！平民じゃメイジには勝てないの！あなたの気持ちは十分解つたから！私は大丈夫なの！！」

「僕は大丈夫じゃない、あんな奴に君が馬鹿にされるのが気に食わない、君があの言葉を聞く度に辛そうな顔をするのが我慢できない、つーか君にも解つてほしい、君は平民を召喚したんじゃない。君が呼んだのは最強の使い魔だつて……ここいらで貴族どもに知らしめてやる、一度と君を馬鹿にできないようにしてやる」

「…………こ、この馬鹿！！勝手になさい！」

顔を真っ赤にしてどこかに走つて行つてしまつた、顔真っ赤になるまで怒る事言つたかなあ……後で説教位されそうで怖い……さて、行くか、今日でゼロは蔑称じゃなくなる、そもそも僕の世界じゃゼロつて強いつて事なんだげね。

そして場面は初頭に戻り…

「諸君決闘だ！」

馬鹿は自分が勝つと信じて疑つていない、なんだがピエロを見ているような気分だ、なんだかウジウジと僕に何かを言つてきたが全て鼻をほじりながら聞き流した、鼻くそをそこらに飛ばした所でルールを説明してきた。

「君が参つたと言つた僕が杖を落としたら決着だ」

つまり僕は杖を落とさない限りあいつをぶん殴れるという事だね。

「それじゃあ始めよう！僕は鋼鉄のギーシュ－士のトライアングルだ、よつて魔法で戦う、文句はないね？」

「早くしてくれないかな、お腹が空いてきた」

こちらを思い切り睨むギーシュを鼻で笑うとギーシュは思い切り杖を振つた、ギーシュと僕の間に三メイルはある鋼鉄の人形が現れ

た。

「さあいけバルキリー！！生意気な平民を叩きつぶせー！」

鋼鉄の人形、バルキリーは奇妙な雄たけびを上げるとハンマーの
ような拳を振り上げ僕に襲いかかつたが…

「欠伸がでるような攻撃だね」

指一本でその攻撃を止めて見せた、まずパンチに腰が入つてない、
腕だけでパンチされたら腕の分の重みしか喰らわない上…こいつは
厚さ一サントの鋼の裏には何もない、空洞だ。

「さて、核の違いを教えてあげるかな」

つきだされたままの拳を思い切り握ると音がして拳が変形した、
そのまま思い切り振り回す、何度も地面に叩きつけているとバルキ
リーの腕が千切れ地面に突き刺さつてしまつた。

「さあお次は？」

ゆずるよつにギーシュに向かつて片手を向ける、ギーシュは再び
杖を振るつて同じような三体出した、どうやらあれが限界らしい…
違いと言えば手には武器を持っている事かな…ショートソード
を模してある。

あれ奪えば僕にも扱えるサイズかな。

「悪いけど…この程度じゃ」

まず前衛の一体に向かつて走り出す、懸命に剣を振つているがこ
の程度ならかわすまでもない、刃が体にぶつかつた瞬間に剣を掴み
自分側に引っ張る、踏鞴を踏んでこちらにきたバルキリーにパンチ
をして吹つ飛ばす、腕ごと千切れた剣が僕の手に残つた…つてやつ
ぱ小さな僕にとつてはクレイモアサイズだなこれ…握りも太くて使
いづらい上に研がれてないからさして鋭くもない、ついでに僕がぶ
つかつた所と掴んだ所は刃が欠けたりゆがんだりしてしまつている。
まああるだけ文句は無い、これでようやく本領を發揮できると言
う物だ。

「くつ！その余裕が命取りだ！」

ギーシュが無傷な二体とひしゃげた一体を差し向けてきた、やれ

やれ……腰を落として剣を構える……なんだがとてつもなく左手が光っているが気にしている場合じゃない、貯めに貯めて引き絞った筋肉を、じこぞと言つ場面で一気に解き放つた。

結果は言つまでもなく三体のバルキリーは一太刀で真つ一いつに分断された、ゴーレムだからまだ動けるがどうやら体が重すぎて攻撃には移れないようだつた、啞然としているギーシュに一気に肉薄する。

「ひつ！？」

「歯あ食い縛れ！」

僕の拳が奴の頬に突き刺さる、そのまま振りぬくと空中で十二回半程回つてギーシュは地面に叩きつけられた、その際に持つていた杖が手を離れて地面に落ちる、ゴーレムが消えて僕が持つていた剣も消えてしまった、この世界のメイジはドット、ライン、トライアングル、スクウェアにランク付けされると聞く……つまりゴイツは一番目に強いメイジだと認識してもいい……この程度ならスクウェアもたかが知れると言う物……だが……いや考察は後にしよう、こいつの首をルイズに持つて帰らなくては。

「よつと」

「うう……ああああ……」

どうやらまだ息があるようだが……何、どんな生物でも首を落とせば静かになる、いつも腰に着けているサバイバルナイフを引っ張りだしてギーシュの首に押し当ててどこから切るか決める。

「ちよつと何してやの！？」

人ごみを掻きわけてルイズが走つてきた、何してやつて……

「えつと、君に倒した証として首を持つていこうとしたんだけど

「そんな事したら死んじゃうじゃない！」

「????????そりや決闘だもん、当たり前でしょ？」

ルイズは怖い物を見るような目で僕を見ている、もしやこの国で決闘では主人に首を持つて帰らないのだろうか？……そういうルイズが目の前にいるしね、よし、じゃあとどめだけ刺して……

「ちよ、ちよお~~~~~！」

心臓に突き立てようとナイフを振りあげたら振りあげた手を奇声で止められた、ルイズは一体何がしたいのだろう…殺すな…ふむ、そう言えば名誉を取り返す戦いだったな。

「君の言いたい事がようやくわかった」

ナイフをしまって立ち上がるルイズはようやくほっとしたようだつた、やっぱりこっちが正解かな、思い切りギーシュの足を踏みつぶし骨をへし折る。

「何してるのよ！？」

またルイズが金切り声をあげた、あ、折るんじゃなくて引かねぎるほうだったのか？

「えっと、手足をへし折つて見せしめに死ぬまで晒すんじゃないの？」

「そんな事しなくていいのよ！？」

「あ、生きたまま顔の皮をはがして一度と外を歩けないような顔に…」

「なんでそんな怖い事するのよ…？もつにいのよ！決闘はこれで終わり！」

「え？この程度でいいの？君の誇りを侮辱した代金をこいつはまだ払つてないでしょ？」

逃げようとしているギーシュを指差してこいつと言つてみる、もう一本脚をへし折つて逃げられないようにする。

「…恥辱なら十分あんたに削いで貰つたからもうここのわ」「そういう事か、わかつた」

つまりルイズはこいつを見逃してやるらしい、彼女は随分と優しい…ただの高慢ちきの努力家だと思つていたがこれは再び評価を変えなくてはならない、ギーシュにそばかすが浮いている女の子が駆け寄つてきていた、女の子は怯える田で僕を睨むとさつさとギーシュの治療に入つてしまつた。

ルイズに手を引かれて僕は広場から去つていぐ、先程まで僕を馬

鹿にするように見ていた貴族は誰一人たりとも目を合わせようとはしなかつた…はつ、腰ぬけ共め！つて僕の母さんなら言つんだろうな、僕はそうは思わない…力のない者は力のある者が怖い、僕が師匠に抱く念とさして変わらないはずだ、こここの世界では貴族＝最強らしいからその最強がなす術もなく敗北し無様に地面に転がる…恐怖以外の何物でもないような気がする。

「あんた！」

ある程度離れた所でルイズが僕を壁に押し付けた。

「自分が何をしたかわかつてゐるの！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107t/>

ゼロの使い魔の世界に英雄が生まれるようです

2011年10月10日02時42分発行